

仙台市文化財調査報告書第108集

大野田古墳群  
春日社古墳・鳥居塚古墳  
発掘調査報告書

1987年8月

仙台市教育委員会

大野田古墳群  
春日社古墳・鳥居塚古墳  
発掘調査報告書

1987年8月

仙台市教育委員会



卷頭図版 古墳周辺航空写真 (1967年・仙台市撮影)

## 序 文

本市南西部名取川北岸は数多くの遺跡が分布するところとして周知されています。名取川、笊川や沢谷が形成する段丘や自然堤防群、後背湿地群からなっていて肥沃な耕土として今日まで利用されてきたところですが、最近都市化が進み、こうした田園風景は急減の一途にあります。

かっては、このような田園のなかにこんもりと茂った塚状の高まりがいくつもあって、開田の削平によって明らかにされた一塚古墳、二塚古墳、大野田古墳群等もこの付近一帯に分布していました。いまでもその名残りとして兜塚古墳、王ノ塙古墳、春目社古墳などがみられ、仙台平野における古墳文化の展開を知る重要なところとなっております。

本報告書も、こうした古墳群の性格を究明するため範囲確認を基本として実施された調査の成果をまとめたものです。とくに西歴5世紀後半か6世紀頃に展開された仙台平野の歴史を解明する上で、きわめて貴重な資料といえましょう。調査並びその整理研究にご尽力をいただきました多くの学識経験者や市民のみなさまに、深く感謝を申し上げますとともに、今後こうした文化財としての資源の保護啓発に大きく役立つことを期待してやみません。

昭和62年8月

仙台市教育委員会

教育長 藤井黎

## 例　　言

1. 本書は市道春日通線道路改良工事に先だって1977年に行った春日社古墳・鳥居塚古墳・大野田3号墳・大野田4号墳の発掘調査と、併せて実施した王の壇古墳の測量調査の報告書である。すでに公表された現地説明会資料等に優先するものである。
2. 大野田3号墳・大野田4号墳は仙台市文化財分布地図では未登録であり、1981年に大野田コミュニティーセンター建設予定地内で発見された大野田1号墳・大野田2号墳に隣接するため、今回新たに命名したものである。春日社古墳・鳥居塚古墳・王の壇古墳は従来の呼称を踏襲し、これらを含めた全体を大野田古墳群と呼称する。
3. 報告書作成のための整理及び編集・執筆は結城慎一・藤沢敦（東北大学大学院生）が行った。執筆分担は以下の通りである。

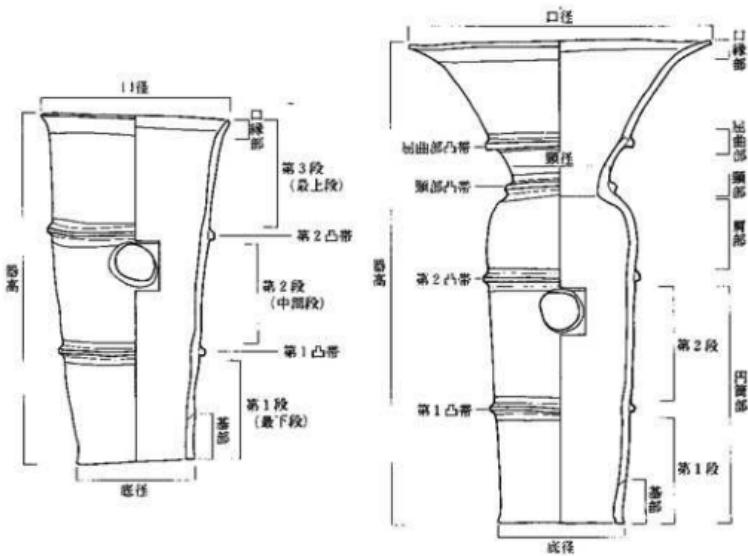
結城…… II・IX

藤沢…… I・III～VII

4. 本報告書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。
5. 全資料は仙台市教育委員会で一括保管してあるので活用されたい。
6. 発掘調査及び遺物整理において、下記の機関および方々より助言・協力を賜わった。  
仙台市立岩切小学校 渡辺泰伸（仙台育英高校） 川西宏幸（平安博物館） 丹羽茂（宮城県多賀城跡調査研究所） 辻秀人・今津節生（福島県立博物館） 山中則和（仙台市博物館） 高橋克寿（京都大学大学院生）

## 凡 例

1. 本報告書中の造物色調については「新版標準土色帳」(小林・竹原:1973)を使用したが、土層の土色は任意のものである。
2. 遺構図版内の表現として
  - (1) 方位は真北を北としている。
  - (2) 断面図中では、石はドットで表わした。
3. 墓輪の表現方法として
  - (1) 製作技法の表現は、基本的に「円筒埴輪総論」(川西宏幸:1978・9)によっている。
  - (2) 円筒埴輪・朝顔形埴輪の各部位の呼称は、下図に示したとおりとする。
  - (3) 横ナデ・ナデは、その範囲のみを示した。



## 本文目次

第Ⅰ章 大野田古墳群の概要とその環境	1		
1. 大野田古墳群の概要	1		
2. 地理的環境	2		
3. 周辺の遺跡と歴史的環境	6		
第Ⅱ章 調査の経緯	8		
1. 調査に至る経過	8		
2. 調査の方法と経過	11		
第Ⅲ章 春日社古墳	12		
1. 検出遺構	12		
2. 出土遺物	21		
第Ⅳ章 大野田3号墳	33		
1. 検出遺構	33		
2. 出土遺物	37		
第Ⅴ章 大野田4号墳	38		
1. 検出遺構	38		
2. 出土遺物	38		
第Ⅵ章 烏尼塚古墳	43		
1. 検出遺構	43		
2. 出土遺物	44		
第Ⅶ章 王の壇古墳	52		
第Ⅷ章 考察	54		
1. 墳輪の検討	2. 仙台市内出土の埴輪	76	
大野田古墳群の築造年代	54	3. 大野田古墳群の特徴と問題点	86
第Ⅸ章 まとめ	91		

## 図版目次

第1図 大野田古墳群分布図	3	第6図 春日社古墳2・3トレンチ	
第2図 大野田古墳群の位置と 周辺の遺跡及び地形	4	断面図	17
第3図 調査区の位置	9	第7図 春日社古墳4トレンチ	
第4図 春日社古墳平面図	13	平面図・断面図	19
第5図 春日社古墳2・3トレンチ	15	第8図 春日社古墳出土遺物(1)	
平面図	15	円筒埴輪	26
第9図 春日社古墳出土遺物(2)		円筒・朝顔形埴輪	27

第10図 春日社古墳出土遺物（3）	第25図 裏町古墳
形象埴輪……28	平面図・出土遺物（1）……55
第11図 春日社古墳出土遺物（4）	第26図 裏町古墳出土遺物（2）……56
形象埴輪……29	第27図 裏町古墳出土遺物（3）……57
第12図 春日社古墳出土遺物（5）	第28図 大野田1・2号墳平面図・ 形象埴輪……30
形象埴輪……30	大野田1号墳出土遺物……60
第13図 春日社古墳出土上遺物（6）	第29図 大野田2号墳出土遺物……61
埴輪以外の遺物……31	第30図 富沢窓跡出土遺物……63
第14図 大野田3号墳平面図……34	第31図 凸帯断面集成図……66
第15図 大野田3号墳断面図……35	第32図 丘反田古墳平面図・出土遺物……67
第16図 大野田3号墳出土遺物……37	第33図 郡山低地の埴輪編年案……71
第17図 大野田4号墳出土遺物……39	第34図 仙台市内埴輪出土遺跡分布図……77
第18図 大野田4号墳平面図……40	第35図 岩切小学校所蔵埴輪……78
第19図 大野田4号墳断面図……41	第36図 屋敷木造跡出土遺物……79
第20図 鳥居塚古墳平面図・断面図……45	第37図 若林城跡内古墳 平面図・出土埴輪……80
第21図 鳥居塚古墳断面図……47	第38図 兜塚古墳・砂押古墳 平面図・出土遺物……81
第22図 鳥居塚古墳出土遺物（1）	第39図 原遺跡・原東遺跡出土遺物……82
埴輪……50	第40図 三神峯周辺古墳分布略図……83
第23図 鳥居塚古墳出土遺物（2）	第41図 教塚古墳・長町清水遺跡 出土遺物……84
埴輪・埴輪以外の遺物……51	
第24図 王の塚古墳平面図……53	

## 表 目 次

第1表 郡山低地周辺の遺跡地名表……5	第4表 鳥居塚古墳出土埴輪集計表……49
第2表 春日社古墳出土埴輪集計表……25	第5表 鳥居塚古墳出土 埴輪以外の遺物集計表……49
第3表 春日社古墳出土 埴輪以外の遺物集計表……32	第6表 仙台市内埴輪出土遺跡地名表……77

## 写 真 日 次

写真1 春日社古墳調査前全景	96	写真19 大野田4号墳出土遺物	104
写真2 春日社古墳2トレンチ 礫群検出状況	96	写真20 鳥居塚古墳調査作業状況	105
写真3 春日社古墳2トレンチ 礫群下の落ち込み	96	写真21 鳥居塚古墳最終状況	105
写真4 春日社古墳3トレンチ 礫群検出状況	97	写真22 鳥居塚古墳最終状況	105
写真5 春日社古墳2トレンチ 周溝完掘状況	97	写真23 鳥居塚古墳 2・4・6トレンチ最終状況	106
写真6 春日社古墳3トレンチ 周溝完掘状況	97	写真24 鳥居塚古墳 2トレンチ填丘残存部断面	106
写真7 春日社古墳2・3トレンチ 周溝完掘状況	98	写真25 鳥居塚古墳 6トレンチ周溝断面	106
写真8 春日社古墳2・3トレンチ 周溝完掘状況	98	写真26 鳥居塚古墳 1・7トレンチ最終状況	107
写真9 春日社古墳2トレンチ断面	98	写真27 鳥居塚古墳1トレンチ断面	107
写真10 春日社古墳3トレンチ断面	99	写真28 鳥居塚古墳7トレンチ周溝断面	107
写真11 春日社古墳4トレンチ全景	99	写真29 鳥居塚古墳6トレンチ	
写真12 春日社古墳4トレンチ断面	99	ビット検出状況	100
写真13 春日社古墳出土遺物(1)	100	写真30 鳥居塚古墳3トレンチ全景	108
写真14 春日社古墳出土遺物(2)	101	写真31 鳥居塚古墳3トレンチ断面	108
写真15 春日社古墳出土遺物(3)	102	写真32 鳥居塚古墳 填丘残存部南北断面	108
写真16 春日社古墳出土遺物(4)	103	写真33 鳥居塚古墳出土遺物	
写真17 大野田3号墳Bトレンチ断面	104	岩切小学校所蔵円筒埴輪	109
写真18 大野田4号墳Cトレンチ断面	104	写真34 王の壇古墳全景	110
		写真35 王の壇古墳近景	110
		写真36 王の壇古墳頂の石碑	110

## 第Ⅰ章 大野田古墳群の概要とその環境

### 1. 大野田古墳群の概要

大野田古墳群は、東北本線長町駅の南南西1.7kmの仙台市大野田字宮地に位置している。そのほとんどは封土を削平された古墳で、現在までに知られているところでは、春日社古墳・鳥居塚古墳・大野田1～4号墳の6基が密接して群在しており、その東に王の壇古墳がある。さらに春日社古墳の北西200mの所には五反田古墳・五反田石棺墓・五反田木棺墓があり、大きさは同一の古墳群を形成するものと考えられるが、それぞれが支群の形をとるのか、あるいはこの地域一帯に古墳が群在するのかについては、現状では不明とせざるをえない。また本古墳群東方の長町清水遺跡と、西方の伊古田遺跡からも埴輪が採集されており、古墳群の範囲がここまで拡大する可能性が高いものと考えられる（第1図）。

これらの古墳は、1976年から行われた六反田遺跡の発掘調査を契機に知られるようになった（注1）ものである。そこで次に、これまでに行われた調査の概要を振り返っておきたい。

1976年の六反田遺跡第一次調査の試掘トレンチNo.7において、五反田古墳の周溝が発見された（第32図参照）。検出した長さは、外縁で3m・内縁0.5mで、円墳とすれば径20m前後になると推定されている。墳丘積土は発見されていない。周溝埋土最下層上面から円筒埴輪が一括出土している。翌1977年の六反田遺跡第二次調査では、五反田古墳の南西にあたるC区で五反田石棺墓・五反田木棺墓が発見された。石棺墓は長軸1.4m・短軸0.5mの箱式石棺で、蓋石は半分程残存していた。石棺をとりまく形で、長軸5.5m・短軸4.3mの隅丸方形に、上端幅約40cmの周溝がめぐらされていた。墳丘積土は発見されていない。遺物は石棺底面から土師器細片が出土しただけである。木棺墓は上端での規模が1.2m×2.6mの土壙中に、最大幅37cm・長240cmの割竹形木棺を直葬したものである。遺物は発見されていない。

同じ1977年の1～3月にかけて春日社古墳・鳥居塚古墳・大野田3号墳・同4号墳の発掘調査が行われている。これは本書において報告するところである。

1981年には大野田コミュニティーセンター建設予定地で、大野田1号墳・同2号墳が発見された（第28・29図参照）。大野田1号墳は周溝の長さ9m程が調査されており、墳丘積土も一部残存していた。円墳とすれば、周溝最深部での径22mと推定されている。周溝内から1～1.2mの間隔をおいて、円筒埴輪・朝顔形埴輪が、ほぼ原形をとどめて出土している。2号墳は周溝の長さ4m程が調査され、墳丘積土はわずかに残存していた。調査範囲が狭いため規模の推定は困難であるが、円墳とすれば1号墳とほぼ同じ位の規模と思われる。周溝底面から円筒埴輪・朝顔形埴輪が、3箇所のまとまりをもって出土している。

以上がこれまでの調査の概要であるが、本古墳群のはほとんどが削平され埋没している古墳で

あり、今後の調査の進展によって、さらに古墳の数は増加するものと推測される。

## 2. 地理的環境

宮城県中央部の地形は、山形県境沿いに南北に連なる奥羽山脈と、ここより派生する陸前丘陵<sup>註3)</sup>、さらに東方へ広がる宮城野海岸平野よりなる。

仙台市近傍では、陸前丘陵を広瀬川と名取川が東流しており、その河間丘陵地を青葉山丘陵<sup>註4)</sup>、広瀬川以北を七北田丘陵、名取川以南を高畠丘陵とそれぞれ命名している。両河川は中流域に下刻作用により4～5段の段丘地形を発達させている。これらの段丘は、古期から青葉山段丘・台の原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と命名されている。

宮城野海岸平野は、七北田川・名取川・阿武隈川の沖積作用によって形成されたものである。この平野は地理的条件や成因、地質などから地形区分がなされており、仙台市南部の広瀬川と名取川の合流点付近では河間低地を郡山低地、広瀬川以北を霞ノ目低地、名取川以南を名取低地<sup>註4)</sup>と呼んでいる。郡山低地は北東縁と南縁を広瀬・名取両河川に、北西縁を長町一利府線による構造線で画された、扇状地性の沖積面である。当低地では広瀬・名取両河川沿いに自然堤防が良好に発達しているほか、その中央を南北に走る自然堤防も見られる。そして自然堤防の背後には、後背湿地が広がっている。

この青葉山丘陵と郡山低地を画する長町一利府線（構造線）は、沖積面下における潜在的断層<sup>註5)</sup>となっている衝上断層と推定されている。この長町一利府線の北西は、それに平行な幅1km・長さ10kmの隆起帯となっており、さらにこの隆起帯の北西縁には大年寺断層群が走っている。この長町一利府線に伴う変動は、鮮新統最上部大年寺層堆積後かなりたった時期に開始されたと考えられており、現在も変動を続けている。長町一利府線に沿う隆起帯の南東縁には、とう曲構造があり、急崖や急斜面をなして平野部に至るが、その平野部との比高は、切られている段丘の違いに対応して異なる。

大野印古墳群は、この郡山低地の自然堤防上に立地し、北方に名取川の一主流である笊川が曲流している。笊川は青葉山丘陵中の太白山付近に源を発する河川で、改修以前はつい最近まで大雨の度に頻繁に氾濫をおこしていた。本古墳群の周辺の山口遺跡・下ノ内遺跡・六反田遺跡・伊古田遺跡では、笊川等の旧河道が発見されており、古くから笊川が複雑に流路を変えていたことが明らかになっている。

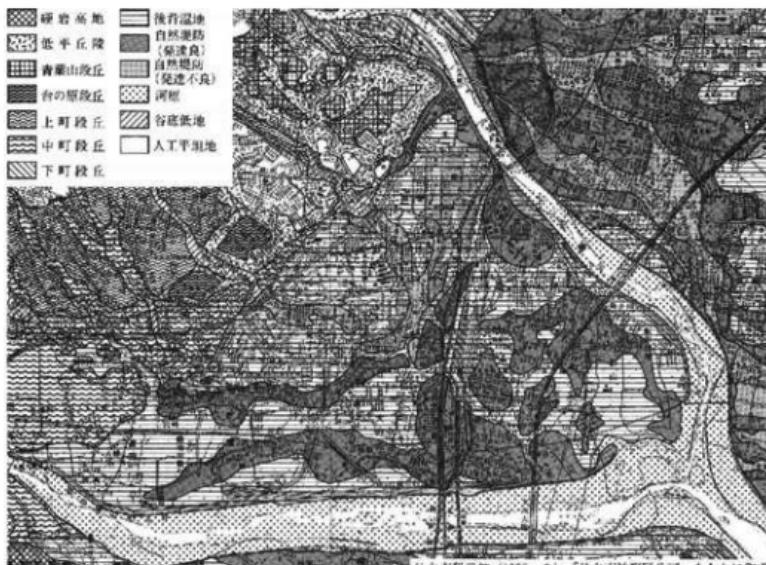
今回調査した古墳は、全て黄褐色・黒褐色シルトを主体とする地層の上に築かれている。また鳥居塚古墳の墳丘下の旧表土の標高は10.6m前後で、他の古墳の周溝確認面の標高は10.5m前後である。これは周辺の自然堤防上に立地する六反田遺跡・下ノ内遺跡の古墳時代遺構の確認面の標高とほとんど変わらない。

第1図 大野田古墳群分布図





硬岩高地  
 低平丘陵  
 青葉山段丘  
 台の原段丘  
 上町段丘  
 中町段丘  
 下町段丘  
 後背湿地  
 自然堤防  
 「築造良」  
 「自然堤防」  
 「発達不良」  
 河網  
 谷底黄地  
 人工平坦地



第2図 大野田古墳群の位置と周辺の遺跡及び地形  
 (国土地理院「1/25,000『仙台西南部』『仙台東南部』を使用」)



## 2. 周辺の遺跡と歴史的環境

名取川流域は、仙台市内でも遺跡が数多く分布する地域である。ここでは郡山低地とその周辺について、古墳時代を中心として周辺の遺跡を概観しておきたい。<sup>註6)</sup>

旧石器時代の遺跡では、名取川左岸の台ノ原あるいは上町段丘上に立地する山上ノ台遺跡と北前遺跡、青葉山段丘上に立地する青葉山遺跡があり、前期及び中・後期旧石器時代の遺物を出土している。縄文時代の遺跡は、段丘上に立地する北前遺跡・山上ノ台遺跡・三神峯遺跡・上野遺跡などがある他、自然堤防上に立地する六反田遺跡・下ノ内遺跡・伊古田遺跡・下ノ内浦遺跡では、中期後半から後期前葉にかけての集落跡などが発見されている。現在のところ沖積平野で検出された遺構としては、下ノ内浦遺跡の早期前葉の堅穴状構造・土壙が最も古い。弥生時代以降では、集落跡は水田稲作の生産域である後背湿地周辺の自然堤防上や段丘の縁辺に立地することが多いと考えられる。弥生時代の水田跡は富沢遺跡で検出されているが、これに伴う集落跡は不明である。しかし住居跡の検出はないものの、般渡前遺跡・郡山遺跡・山口遺跡などでは包含層が検出されており、西台畠遺跡では中期の壇塚墓が、下ノ内浦遺跡では後期の土壙墓が検出されている。広瀬川左岸の南小泉遺跡では、合口塚15基をはじめ各期の弥生土器が出土しており、自然堤防上に広く集落が分布していたことが推測される。

古墳時代では、前期（塩釜式期）のものとしては、伊古田遺跡で住居跡が、六反田遺跡で溝跡が発見されている。この時期の古墳としては、前方後円墳の遠見塚古墳が広瀬川左岸にあり2基の粘土郭が発見されている。方形周溝墓は、名取川右岸の安久東遺跡・戸ノ内遺跡で発見されている。さらに南方の名取市の丘陵上には、飯野坂古墳群や今熊野遺跡など、この時期のものと考えられる古墳や方形周溝墓が多くあり、東北最大の前方後円墳である雷神山古墳もこの丘陵上にある。大野山古墳群の立地する郡山低地から青葉山丘陵にかけての名取川と広瀬川にはさまれた地域では、現在までにこの時期の古墳・方形周溝墓とともに発見されていない。

中期（南小泉式期）のものとしては、下ノ内遺跡・泉崎浦遺跡で住居跡が発見されている。また中期の水田が、富沢遺跡の北東隅に近い、都市計画街路長町一折立線建設に伴う調査で発見されており、その水田は一区画の平均面積が約5m<sup>2</sup>のいわゆる小区画水田が発見されている。古墳は中期後半から後期にかけてのものが多く存在しており、規模も大きく、かつ前方後円墳が多い。広瀬川左岸では、この時期の古墳は中小規模のものしか発見されておらず、また前方後円墳も知られていない。前期（塩釜式期）とは対照的であり、注目される。この中期後半から後期にかけての古墳は、人年寺山麓から西多賀にかけて直線状に並び、ほぼ長町一利府線に沿っている。それらは東から兜塚古墳（帆立貝形？・円丘部径50m・埴輪有）、一塚古墳（円墳・径20～30m・堅穴式石室・家形石棺）、二塚古墳（前方後円墳・主軸長約30m・剥石棺・埴輪有）、砂押古墳（円墳又は前方後円墳・周溝内縁径42m・埴輪有）、金洗沢古墳（円墳

・径15m)、裏町古墳(前方後円墳・主軸長50~60m・整穴式石室・埴輪有)の計6基である。さらに裏町古墳の西方の原東遺跡・原遺跡からは埴輪が採集されており、削平された古墳と考えられている。兜塚古墳から原遺跡までの距離は、約3kmを計る。これら以外には、段丘上の三神峯古墳(円墳2基)、沖積平野に立地する教塚古墳(円墳・径約15m・埴輪有)、金岡八幡古墳(円墳・径15m)がある。また荒川北岸の元袋遺跡、大野田古墳群の西約1kmの堀ノ内遺跡からも埴輪が採集されている。これらの郡山低地に分布する中期後半から後期の古墳の特徴としては、埴輪を有するものが多いことが挙げられ、東北地方で最も埴輪出土遺跡の分布密度が高い地域である。また長町一利府線に沿う古墳には前方後円墳が多く、2基の古墳から石棺が発見されていることから、この時期の中心的地域の一つであることが推測される。しかし、この郡山低地の古墳は、大野田古墳群以外は、散在するものがほとんどで、群集するものはない。また横穴式石室は、広瀬川左岸の法領塚古墳(切石横穴式石室・7世紀)、名取川右岸の安久諏訪古墳、安久東古墳があるが、郡山低地では確認されていない。このことより、既に破壊された古墳が、さらに多く存在していた可能性は高いものと考えられる。窓跡は三神峯の南斜面に富沢窓跡(埴輪窓)、金山窓跡(須恵器窓)があり、両者とも中期後葉~末のものと考えられる。

古墳時代後期の住社式・栗園式期の集落は、名取川右岸では清水遺跡・栗遺跡があるが、郡山低地では現在までのところ確認されていない。郡山低地では、栗園式終末から國分寺下層式にかけての時期ごろから、自然堤防上に急速に集落が拡大する。郡山低地における古墳時代後期の集落の様相の解明は、今後に残されるところが大きい。

古墳時代末期から奈良時代にかけては、横穴古墳の造営が盛んになってくる。青葉山丘陵には、愛宕山横穴群・大年寺山横穴群・宗禅寺横穴群・二ツ沢横穴群・土手内横穴群があり、このうち愛宕山横穴群C-1号墳は装飾を有している。一方、名取川と広瀬川の合流点近くには、多賀城以前の官衙遺跡である郡山遺跡が造営された。平安時代になると、山田上ノ台遺跡や北前遺跡のように高位の段丘上からも集落跡が発見されている。平安時代の水田は、山口遺跡・富沢遺跡などで多く検出されている。中世になると丘陵や自然堤防上に館が作られるようになる。

以上の遺跡分布は現在の知見であり、今後も遺跡数の増加が考えられる。特に沖積平野においては、近年の調査の進展により大幅に遺跡数が増加しており、今後の調査に期待されるところが大きい。

註1 田中創和他(1981・12)「六反田遺跡」仙台市文化財調査報告書第34集

註2 長島栄一(1982・3)「大野田古墳群」『年報3』仙台市文化財調査報告書第41集 PP. 13~28

註3 地図研仙台支部編(1980・6)『新編 仙台の地学』

- 註4 経済企画庁(1967)「地形・表層地質・上じょう 仙台」
- 註5 中田高他(1976・4)「仙台平野西縁・長町一利府線に沿う新期地殻変動」『東北地理』第2号 PP. 111~120
- 註6 これらの過跡の詳細については、それぞれの報告書を参照されたい。

## 第Ⅱ章 調査の経緯

### 1. 調査に至る経過

昭和51年12月に、市道・春日通線拡幅整備工事の計画が提示され、仙台市教育委員会で早速現地踏査を実施したところ、春日社古墳と鳥居塚古墳が計画ルートにかかることが判明した。この両古墳については、文献なども全くなく、従来、ほとんど知られざる古墳で、仙台市文化財分布地図にも未登録の古墳であった。

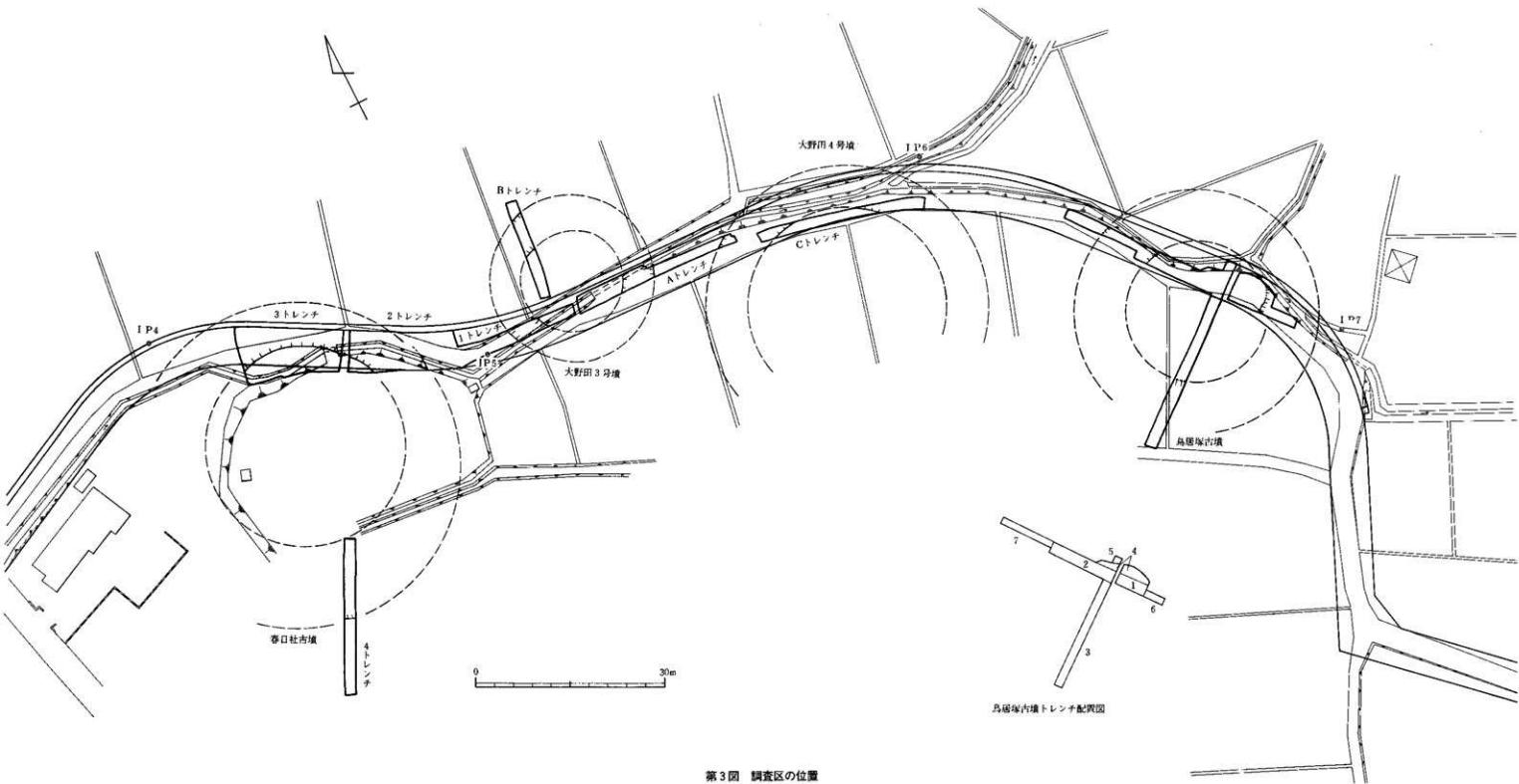
春日社古墳は「大野田ちびっこ広場」となっており、墳形も変形しているもの残存していたが、鳥居塚古墳については、戦時中の土取りなどのためほとんどその原形をとどめていなかった。僅かに農道部分に古墳の積土が残存している状況であった。

この踏査結果にもとづき、仙台市教育委員会では、工事担当部局である仙台市道路部と協議を行った結果、道路部の委託により、仙台市教育委員会が事前調査を実施し、この両古墳の実態の解明を進めることになった。

### 2. 調査の方法と経過

調査場所	仙台市大野田宮
調査期間	昭和52年1月5日～3月10日
調査面積	約200 m <sup>2</sup>
調査主体	仙台市教育委員会 仙台市建設局道路部
調査担当	仙台市教育委員会社会教育課文化財係・岩瀬康治 田中則和 結城慎一
調査指導	仙台市文化財保護委員 伊東信雄
調査参加者	佐久間豊 森剛男 横田康正 川村正之 工藤哲司 松浦邦幸 入間川富市 鈴木つや子 金成美奈子 菅原正直 斎藤武 高橋幸作 関根平治 安川勇新
整理期間	昭和61年4月20日～昭和62年6月15日
整理担当	仙台市教育委員会文化財課調査係・結城慎一
整理参加者	藤沢敦 金沢君代 高橋胡子 油井ゆかり 斎藤洋美

調査は当初、春日社古墳・鳥居塚古墳を対象とし、市道春日通線拡幅整備工事の測量原点



第3図 調査区の位置

TP 4～TP 7を基準とし、トレンチを設定した。トレンチは必要に応じて拡張し、順次トレンチ名を付した(第3図)。また工事に係る部分に直交させる形でもトレンチを設定し、周溝範囲の確認に務めた。調査の記録は、平面図は50分の1の縮尺で平板実測を行い、断面図は20分の1の縮尺で実測した。また春日社古墳のV層の礫群と埴輪上面のピットは縮尺20分の1の平面図を作成した。鳥居塚古墳は1月5日に調査を開始し、1月27日に終了した。春日社古墳は1月26日に調査を開始し、3月7日に終了した。

この春日社古墳の調査終了の直前の3月3日に、春日社古墳1トレンチの壁面の検討で古墳周溝と覚しき溝を発見し、急遽3月8日～10日の3日間、A～Cトレンチを設定して調査したところ、2基(大野田3号墳・同4号墳)の古墳の周溝が埋没していることを確認した。大野田3号墳・同4号墳については縮尺100分の1で平板実測を行い、20分の1の断面図を作成した。

この間、3月6日に王の塙古墳の測量調査を行っている。王の塙古墳の測量図は、縮尺100分の1で、20cmセンターで作成した。

鳥居塚古墳、春日社古墳の調査成果は、1月29日に現地説明会を開催して市民に公表した。<sup>註1)</sup>  
さらに3月4日にも2回目の現地説明会を開催し、春日社古墳のその後の調査成果を公表した。<sup>註2)</sup>

註1 仙台市教育委員会(1987・1)『鳥居塚・春日社古墳発掘調査現地説明会資料』

註2 仙台市教育委員会(1987・3)『春日社古墳発掘調査説明会資料』

### 第三章 春日社古墳

春日社古墳は調査前の状況では、東西44m・南北26m程のマウンドが残存しており、埴輪を出土することが知られていた。平面形は、北側が道路と溝によって画され、南側は水田との間を走る溝によって直線状になっていたため、東西に長い半円に近い形をしていた。また東側がわずかに突出することから、前方後円墳の可能性も考えられた。マウンドの高さは、周囲の水田面から計って1.4mで、頂部は平坦で春日社があり、「大野田チビッコ広場」として利用されている。調査は道路予定範囲に沿って1~3トレンチを設定し、範囲確認のため南側の田に4トレンチを設定した。

#### 1. 検出遺構

1トレンチについては、第IV章大野田3号墳のところで述べることとし、ここでは2・3トレンチと4トレンチについて報告する。但し、2・3トレンチと1トレンチでは層位の対比が十分には行われていないので、それぞれに層名を付し、両者を分けて報告することとする。このうち古墳周溝が掘りこまれている2・3トレンチⅣ層は、4トレンチⅢ層に対応すると考えられる。これらは大野田3号墳・4号墳のⅢ層、鳥居塚古墳のⅢ層に対応するものと思われる。

#### 2・3トレンチ

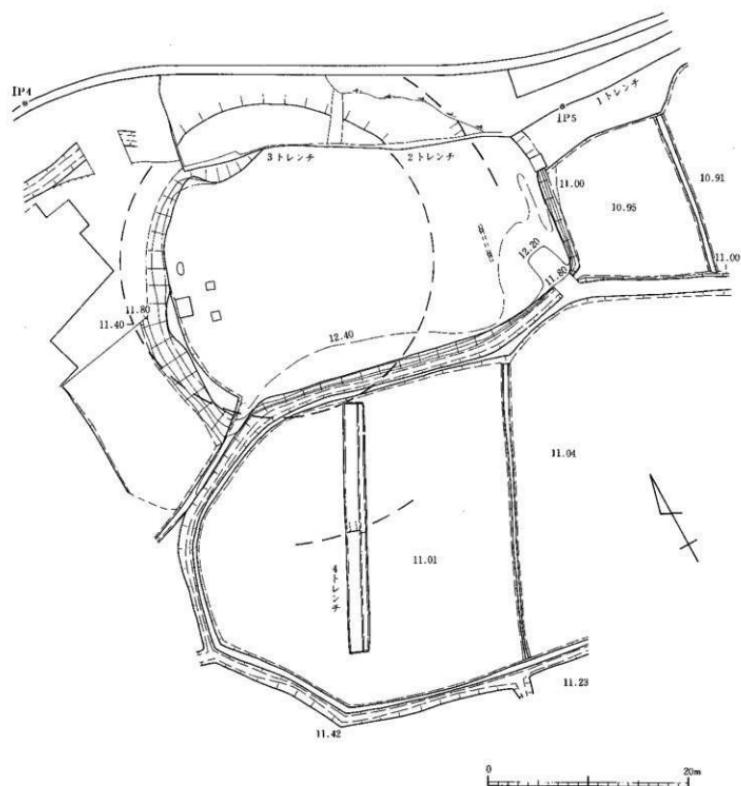
墳丘が残存しているとの当初の予想に反し、墳丘積土は確認されず、V層より上は全て表土及び整地層と考えられる。V層としたのは道路状の石敷造構の整地層で、I~IV層は表土及び「チビッ子広場」建設等の整地層と考えられる。I~IV層は2・3トレンチのほぼ全面に分布するが、V・VI層は3トレンチ西半部には分布しない。VI層は周溝が掘りこまれている層である。検出された造構としては、溝・石敷造構・ピット群・古墳周溝がある。

##### [1号溝]

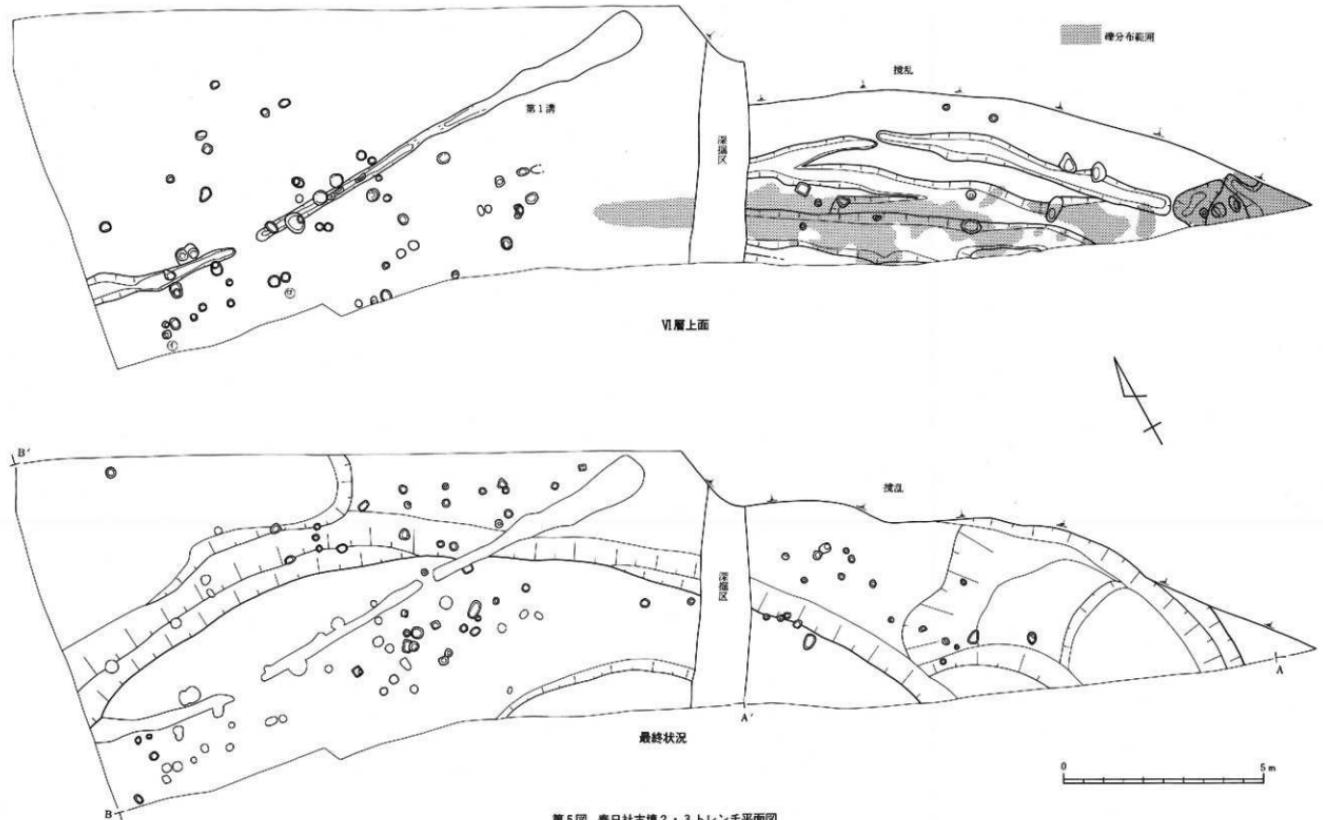
3トレンチで検出された東西方向の溝で、VI層上面で確認したが、3トレンチの断面での検討では、VI層上面から掘りこまれている。断面形はU字形を呈し、上端幅20~90cm、深さ40cmを計る。埴輪片が出土している。

##### [石敷造構]

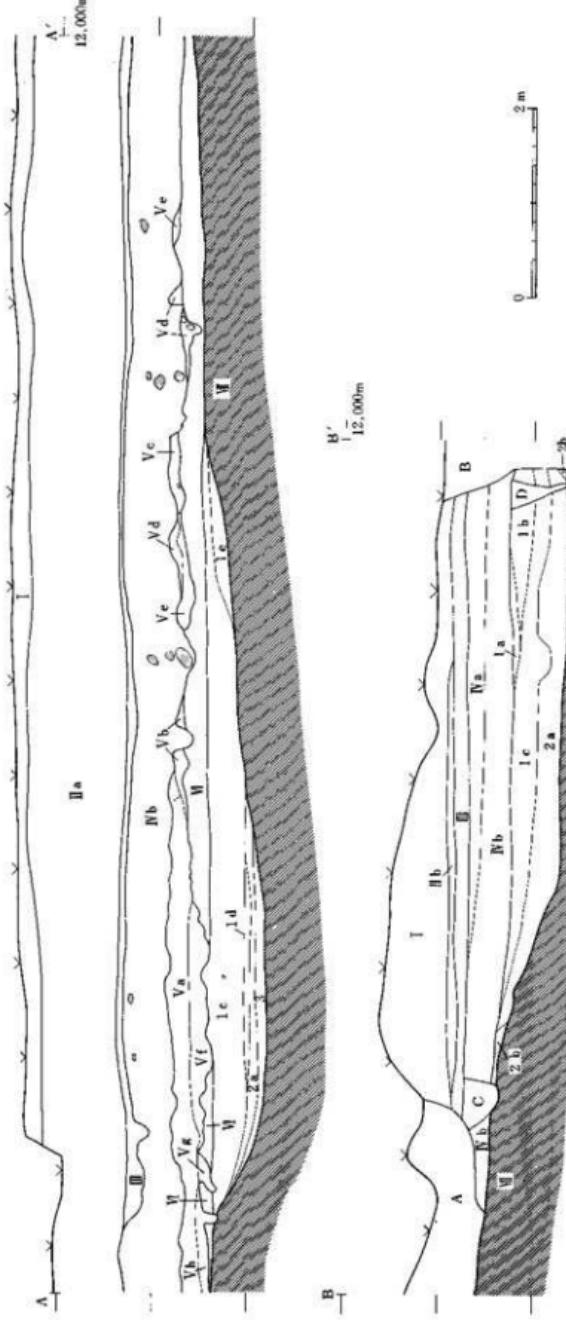
IVb層を除去した段階で、東西方向に礫が分布しているのが発見された。軸は2トレンチの最大のところで1.7mで、さらに調査区外へ続いている。3トレンチでは東側でのみ発見されている。検出した長さは18mである。礫は拳大から人頭大の河原石で、礫の間から埴輪片が大量に発見されており、礫とともに散かれたような状況を呈している。礫群の上面は凹凸をなし、



第4図 春日社古墳平面図



第5図 春日社古墳2・3トレンチ平面図



層位	土色	土質	層位	土色	土質	層位	土色	土質	層位	土色	土質	層位	土色	土質	層位	土色	土質
I	褐色	砂土	V <sub>a</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>b</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>c</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>d</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>e</sub>	灰褐色	砂質粘土
II	褐色	砂土	V <sub>f</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>g</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>h</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>i</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>j</sub>	灰褐色	砂質粘土
III	褐色	砂土	V <sub>k</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>l</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>m</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>n</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>o</sub>	灰褐色	砂質粘土
IV	褐色	砂土	V <sub>p</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>q</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>r</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>s</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>t</sub>	灰褐色	砂質粘土
V	褐色	砂土	V <sub>u</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>v</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>w</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>x</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>y</sub>	灰褐色	砂質粘土
VI	褐色	砂土	V <sub>z</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>aa</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>bb</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>cc</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>dd</sub>	灰褐色	砂質粘土
VII	褐色	砂土	V <sub>ee</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>ff</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>gg</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>hh</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>ii</sub>	灰褐色	砂質粘土
VIII	褐色	砂土	V <sub>jj</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>kk</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>ll</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>oo</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>pp</sub>	灰褐色	砂質粘土
IX	褐色	砂土	V <sub>qq</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>rr</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>ss</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>tt</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>uu</sub>	灰褐色	砂質粘土
X	褐色	砂土	V <sub>yy</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>zz</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>aa</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>bb</sub>	灰褐色	砂質粘土	V <sub>cc</sub>	灰褐色	砂質粘土

第6図 春日社古墳2・3トレーン断面図

平坦ではない。この層を除去したところ、2トレンチで礫群の方向にほぼ平行に溝状の落ちこみが発見されている。このV層は石敷を伴う整地層と考えられ、性格としては東西に細長くのびることから道路ではないかと思われるが、上面が平坦でないこともあり、断定は避けておきたい。遺物は、埴輪・土師器・須恵器・赤焼土器・中世陶器・近世陶磁器がある。そのうち最も新しいと考えられるのは、第13図16の染付のそば縁口で、産地は不明であるが江戸末～明治頃のものと考えられることにより、この整地層の年代はこれ以降である。

#### [ピット群]

2・3両トレンチから合計133個のピットが検出されている。Ⅳ層上面とⅤ層上面で確認されているが、3トレンチ西半部ではⅥ層が存在しないため、Ⅴ層上面確認としたもの一部はⅥ層上面確認の可能性がある。切り合いや埋土を充分には検討していないため、性格は不明とせざるをえない。3トレンチの13個のピットから埴輪が出土しているが、ピット⑦としたものから出土したもの以外は全て小破片であり、埴輪の剥え方とは考えられない。ピット⑦から出土した埴輪は底部片で（第8図7）、ピット底面に横向けになって発見されており、これも埴輪の剥え方を考えるのは困難である。

#### [周溝]

2・3トレンチで周溝内縁が検出されたが、外縁は擾乱のため2トレンチ東端近くで1.7m程を確認したにとどまる。上端幅は2トレンチの状況からは4.5m程になると考えられるが、3トレンチ西壁付近では6m以上になる。断面形状は逆台形で、2トレンチ南壁付近では外側が一段低くなっている。埴輪を掘りこんでおり、深さは60～65cm、底面レベルは9.8～10.0mである。埋土は自然堆積と考えられ、大きく3層に分けられるが、3トレンチ西側では3層は分布しない。出土遺物は全て埴輪で、各層から出土しているが、2層からの出土が大部分を占め、3層からはわずかしか出土していない。

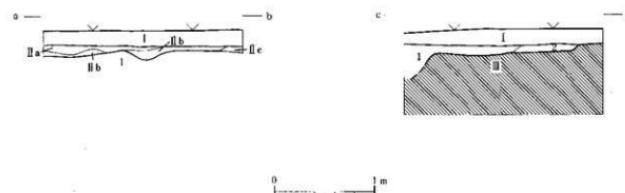
## 4トレンチ

検出遺構は周溝のみである。

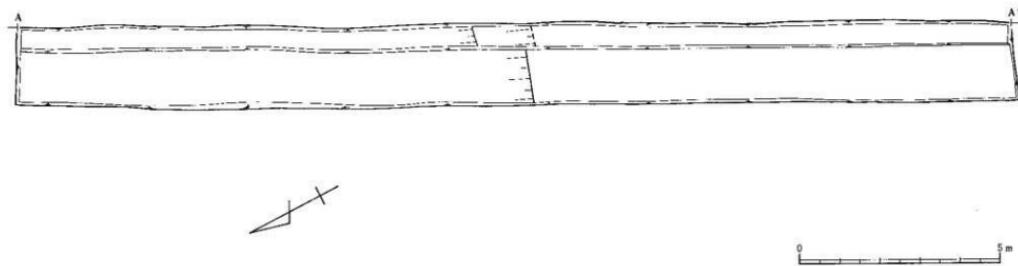
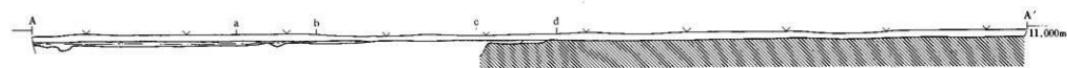
#### [周溝]

トレンチの中央付近で外縁を検出した。内縁は検出されていない。外縁は幅1.4m程の浅い落ちこみの後、更に落ちこむ。周溝埋土を掘りこんでいるため断面形状や深さは不明である。Ⅰ層から埴輪小破片が出土している。

これに2・3トレンチの知見を加えて、一応平面形を復元すると、周溝内縁径31m・外縁径51m程となり、周溝幅は4.5～12mとかなり異なる。また東側の突出は、2トレンチの状況より、前方部となる可能性は少なく、円墳と考えておきたい。



層位	上色	上質	種	名
1	灰白色	粘土質じゅく	層の織合土	
1-1	灰褐色	シロヘキ		
1-2	灰褐色	シロヘキ		
IIa	灰褐色	粘土質じゅく		
IIb	灰褐色	粘土質じゅく		
I	灰褐色	粘土質じゅく	雨潤土	
IIc	灰褐色	粘土質じゅく	雨潤土	
IIe	灰褐色	粘土質じゅく	雨潤土	
2	灰褐色	粘土質じゅく	雨潤土	
III	暗褐色	シルト	地山	



第7図 春日社古墳4トレンチ平面図・断面図

## 2. 出土遺物

遺物は1~4トレンチで出土しているが、2・3トレンチがその大部分を占める。1トレンチ出土のものは大野川3号墳の範囲からの出土の可能性もあるが、細かな出土位置が不明のため、便宜的にここにまとめて報告する。1トレンチ出土の遺物は全て1層からの出土である。

### 埴輪

埴輪は出土遺物の大部分を占め、全部で平箱6箱出土している。1~4トレンチの全てで出土しているが、ほとんどは2・3トレンチからの出土である。2・3トレンチの中でもV層がその約半数を占める。I~V層出土のものは、いずれも表面の風化が激しく、調整はほとんど判別できない。また褶えつけられた状態で出土したものではなく、一括出土資料もわずかで、しかも小破片が多いため、全体の特徴が判明するものはない。第2表に各部位の出土地点の一覧を表わすが、埴輪は個体ごとの差が少なく、しかも前述のように風化の激しいものがほとんどなので、充分には個体識別は行いえていない。したがって実際の個体数は、さらに減少するものと思われる。円筒・朝顔形・形象埴輪のいずれにも黒斑は認められない。

#### 〔円筒埴輪〕（第8図、第9図1~3）

全て外面調整は1次調整タテハケのみのもので、2次調整を有するものはない。全体の形態は不明であるが各部位の破片から推測すると、わずかに外に開き、口縁部付近でやや外反するものと考えられる。凸帯数は不明である。

第8図1は口縁部の破片で、内面調整は斜め方向のハケメの後に縱方向のナデを行い、さらにヨコナデを行う。端部はやや凹む。口縁部片は全部で57点出土しているが、細片が多く、あるいは朝顔形埴輪の口縁部も含んでいるかもしれない。

第8図2~4と第9図1~3は凸帯とスカシ孔を有する破片で、第8図2の内面調整は斜め方向のハケメの後縱方向のナデを行う。他は判明するものは縱方向のナデである。さらに凹帯内面にヨコナデを行うものがある（第8図3）。スカシ孔は全て円形と考えられるもので、他の形状になると考えられる破片はない。スカシ孔は凸帯のヨコナデの範囲の境付近から切りこまれ、段の中でも上方に片寄って穿孔されているが、1点だけ例外がある（第8図4）。第8図5は接合できた数少ない例で、凸帯下側での復元径は18.7cmを計る。これらの凸帯は、いずれも側面がわずかに凹む台形で、上幅0.6~0.8cm・下幅2.0cm前後・高さ0.6~0.8cmで、上・側・下面とも強くナデつけられている。

底部（第8図6・7）は、粘土帯を円形にめぐらして基部としている。基部の幅は明確ではないが、第8図7ではその接合痕が約2cmの高さまで確認できるため、これ以上の幅をもっていたことは確実である。断面形態から5cm前後ではないかと思われる。内面は縱方向のナデが

施されるが、それのおよばない部分には横方向のナデが観察され、基部作成時の調整ではないかと思われる。外面にはタテハケ後、底面近くを部分的に軽くヨコナデを行っている。図示した2点には両者ともにこのヨコナデが認められるが、他の破片には無いものもあり、単純に破片数で集計すると、両者は半数ずつを占める。これは底部の変形を直すためのものではないかと思われ、一撲巻上げに伴う底部調整とは認められない。底面には棒状の圧痕があり、製作時にスノコ状のものを置いていたと考えられる。

#### [朝顔形埴輪] (第9図4~10)

口縁部は1点出土しており(第9図4)、外面調整はタテハケ後ヨコナデ、内面はヨコ方向のハケメを行った後に弱いヨコナデを施す。端部は外側がやや突出する。

屈曲部は10点出土している。第9図5は粘土紐のつぎ目で剥落しており、製作工程が良く観察できる。下側の剥落面は凹凸がなく平滑で、それ以前の段階できれいに調整されていたものと考えられ、屈曲部まで作成し一旦口縁部のように調整し乾燥させたものと思われる。この剥落面には約1.5cm間隔で黒色に変色している部分が認められ、屈曲部まで作成した段階でそれより上部との接合を良くするためにキザミ目を入れていたものと考えられる。このような例は、裏町古墳出土の朝顔形埴輪で明瞭に確認できる。内面調整としては横方向のナデが認められるものがある(第9図5・6)。凸部は側面がわずかに凹む台形をなすが、下側の稜が上側より突出するもの(第9図8)と、その逆のもの(第9図6・7)がある。

第9図9は頭部片で、復元頭径は12.8cmを計る。外面調整はタテハケで、内面は横方向のナデかと思われ、屈曲部にかけての部分には横方向のハケメが施されている。凸部の残存しているのはこれ1点のみで、上側の稜が下側より突出する台形を呈している。

肩部は8点出土しているが、調整の判るものは第9図10の1点のみである。外面調整はタテハケの後、頭部近くにヨコハケが施され、内面は縦方向のナデである。

#### [形象埴輪] (第10~12図)

2・3トレンチから全部で19点出土しているが、いずれも小破片が多く、種類が判明したのは馬形埴輪と、衣蓋形埴輪ではないかと考えられるものがあるのみである。

#### 馬形埴輪

3トレンチの周溝底面付近から一括して出土したが、小破片が多く接合できたのはごく一部である(第10図)。耳と目の間に凸部があり、これが面繋を表わしていると考えられることから馬形埴輪であると判断した。頭部の形態や面繋の形態が不自然なところもあり、タテガミが後頭部までしかのびないと、最後まで判断に苦しんだが、耳と面繋の位置関係から第10図のように復元した。

頭部の幅は14cm程になると思われ、外面はハケメの後ナデ、内面はナデによって調整されて

いる。後頭部右側の外側には、ごく浅い沈線がうず巻き状に観察される。タテガミは後頭部までしかのびず、ここが板状タテガミの端になり、それとは別に作られた角状タテガミが前方にあったのではないかと思われる。タテガミの剥落した面にはハケメが観察される。耳は頭部に差しこまず、貼りつけて作られている。面繁は幅1.5cm、高さ0.5cmの長方形に近い台形で、部分的に頭部には剥落痕にそって細くて浅い沈線が認められる。左側には位置から見て辻金具がある部分まで破片が残っているが、剥落しており、剥落痕も明瞭ではないため不明である。

第12図5は、この馬形埴輪の耳の部分に類似するが接合できず、また位置から見て入るところもないため別個体と判断した。これも馬形埴輪であるとすれば、少なくとも2個体の馬形埴輪があったことになる。

#### 衣蓋形埴輪(?)

2トレⅢ・Ⅳ層から出土した棒状の破片で、上部は中実となっている(第11図3)。表面の風化が激しく、外面は縱方向のナデと思われるが、一部に直線状の工具のあたりがあり、ハケメも施されていたかもしれない。上面は剥落しており、内面は表面が平滑で、棒状のものに巻きつけたものと思われる。外径5.5cm・内径2.3cm・現存長12.4cmを計る。衣蓋形埴輪の立ち飾りの下部の、笠に差し込む筒状の部分ではないかと考えられる。このような形状・大きさから考えられるものとしては、衣蓋以外では動物や人物埴輪の脚部と大刀形埴輪があるが、いずれも管見では中実になるものを見ない。衣蓋形埴輪の立ち飾りの筒状部は、上部を皿状に広げてふさぐことなく十字飾りを付けるもの、皿状の粘土でふさいでから十字飾りを付けるものなど、いくつかの製作技法があるが、立ち飾りの形状より正立させる以外に製作は不可能であり、正立させるためには何らかの方法で筒状部を固定する必要があったと考えられる。それらの固定の方法は実物を検討していないので不明とせざるをえないが、奈良県の勢野茶臼山古墳出土例のように上部が中実のものは(伊達宗泰:1966・3)、棒状のものに巻きつけて筒状部を作るか、筒状に作ったものを棒に立てるかして製作した可能性があると思われる。本例は、内面の表面の状態より、棒状のものに巻きつけて製作していることが明らかであり、このような製作技法から、衣蓋形埴輪の立ち飾りの筒状部の可能性があると思われる。  
(補註)

#### 不明形象埴輪

種類は不明ながら形象埴輪の一部と考えられるものであり、それぞれ特徴を記す。

第11図1は板状の破片で、下面で剥落している。板状の粘土を貼りつけた後、更に接合部に粘土を貼りつけて両面ともナデによって調整している。馬のタテガミか鞍の一部になるのではないかと考えられる。

第11図2は剥落した凸起状の破片で、ナデによって調整されている。女性の人物埴輪の乳房

か馬の飾りの一部になる可能性がある。

第12図1・2は楕円形の円筒状の体部の側面に円筒を取りつけた破片で、外側調整は不明であるが、内面はナデによっている。人物埴輪の胴体の上部にあたる可能性がある。第12図1には破片中央付近の外側に剥落痕があり、人物埴輪であった場合、衣服等の表現がなされていたのかもしれない。

第11図4～7・第12図4～5は、剥落痕や形状から形象埴輪の一部になるとを考えられるものである。形象埴輪では、これら以外に第11図6に類似するものが4点出土している。また形象埴輪ではない可能性もあるが、内面に直径約7mmの棒状の压痕を有する小破片が1点出土している。

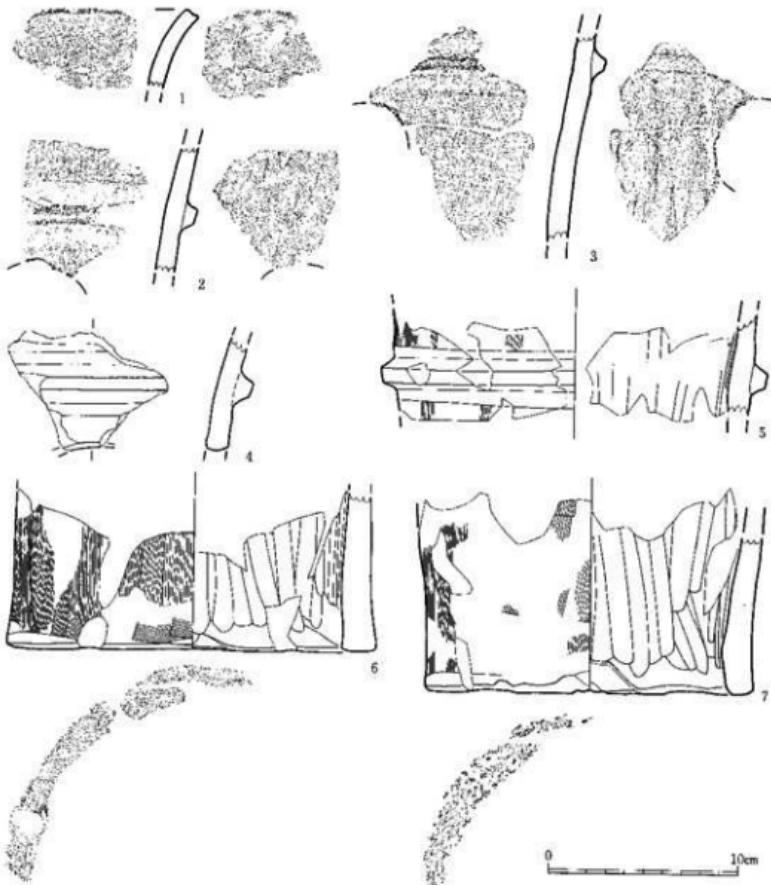
### 埴輪以外の遺物

埴輪以外の遺物としては、縄文土器？・土師器・赤焼土器・須恵器・瓦・陶器・磁器・石器・古銭が出土している（第3表）。いずれも古墳に伴うと考えられるものはない。

**補註** 本稿脱稿後、市橋芳則氏の衣蓋形埴輪の製作技法を検討した論考を知った（市橋芳則：1987・3「蓋形埴輪の製作技法について」『歴史と構造』第15号南山大学大学院文化人類学研究室PP. 101～103）。市橋氏は愛知県春日井郡師勝町所在能田旭古墳出土の2点の衣蓋形埴輪を検討し、ここで問題とした筒状部（市橋氏は輪部としている）の固定の方法について、「ロート状に聞く屈曲部にはまわりから圧力を加えたと考えられる凹みが蓋面を一周しており、おそらく製作を行う際に台にはめ込まれ固定されていたためと考えられる」と指摘されている。この推定は、筒状部の上部がふさがれないものの固定の方法として、もっとも説得力あるものである。ただし、春日井古墳出土例では、指摘されているような蓋面の凹みは観察されず、棒状のものに立てた可能性を考えておきたい。もしこの例が衣蓋形埴輪で、棒状のものに立てて製作したとの推測が正しいとするならば、衣蓋形埴輪の製作技術に相違があることになるため、埴輪製作工人集団の識別やその相互の関係をさぐる上で、有効な指標となるであろう。

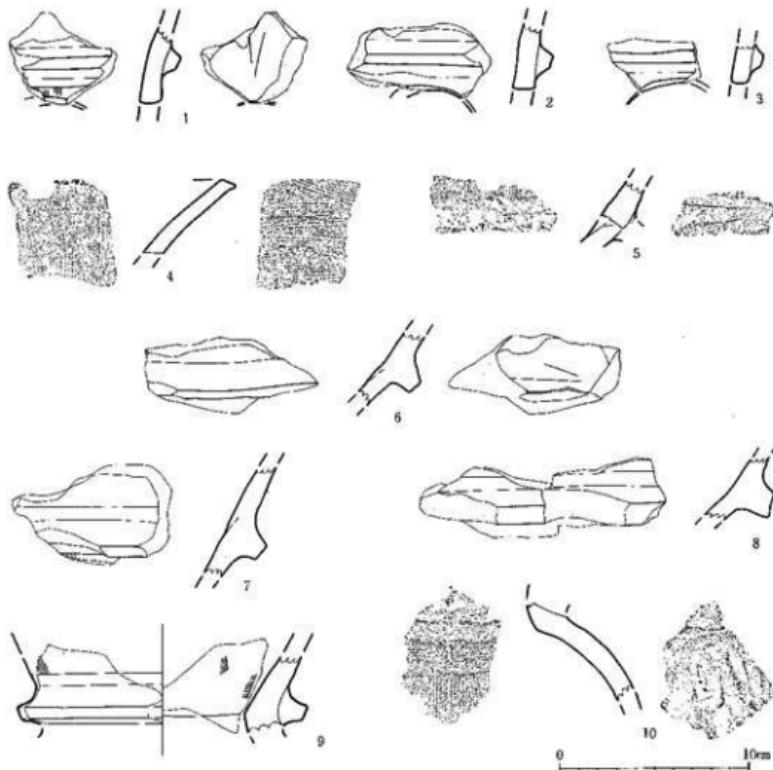
層位	1. ル			2. ル			3. ル			4. ル			4. ル			4. ル			4. ル		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
底部外側ナメ	—	—	—	1	—	—	1	—	—	1	—	—	1	—	—	1	—	—	1	—	—
底部外側ナメ無	—	—	—	5	—	—	5	—	—	1	2	—	1	—	—	1	—	—	1	4	9
不 規	1	3	1	5	26	—	—	35	2	4	16	—	2	—	—	24	—	—	—	—	60
小 計	1	3	1	5	32	—	—	41	2	5	18	1	2	1	1	30	—	—	—	—	72
11 様 部	—	—	—	16	1	—	18	1	2	3	17	2	—	12	1	1	38	—	—	1	57
凸面およびスカラシ孔有る鏡片																					
スカラシ孔部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
凸 帽 部	—	—	—	8	—	—	8	—	—	1	3	1	—	4	—	2	14	—	—	—	22
内面ヨコナメ有	1	—	—	1	16	4	4	—	25	1	2	3	1	6	—	1	15	—	—	1	42
内面ヨコナメ無	—	—	—	1	3	15	—	1	—	20	1	8	2	3	—	1	1	22	—	—	42
不 有	—	—	—	2	1	3	47	1	7	4	—	65	5	21	8	1	—	35	1	1	102
小 計	1	—	—	3	1	7	78	1	11	9	—	110	2	15	4	1	20	2	2	72	1
明鏡形風輪	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
口 棘 部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10
尾 棘 部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6
頭 部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8
小 計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	25

新2表 春日社古墳出土埴輪集計表



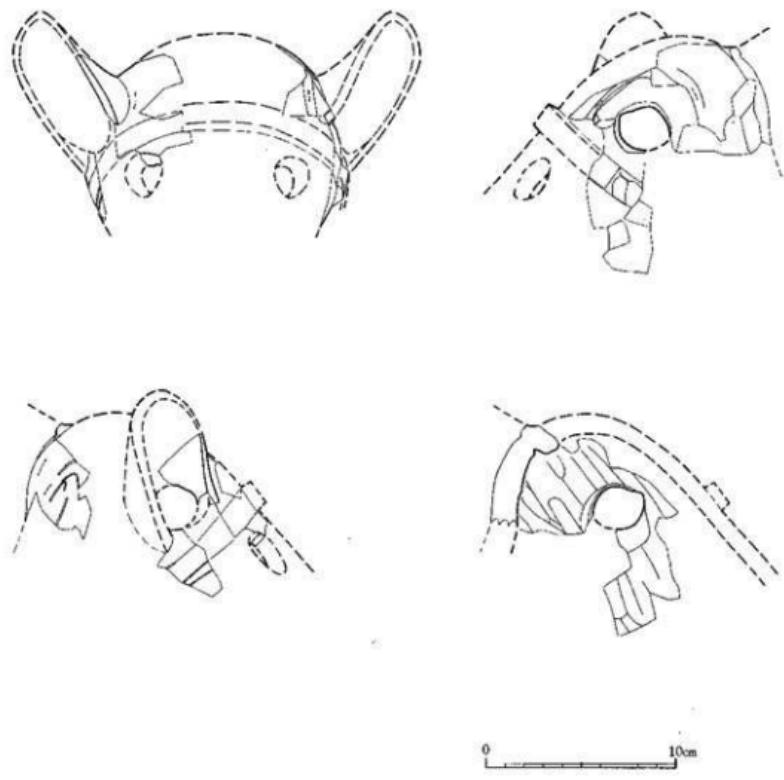
番号	登録番号	種類	出土位置	法量(cm)	△縦幅(cm)	ハクメス/cm	色調	底	集	写真図版番号
1	S-25	円筒埴輪	3トレス基層	-	-	-	-	約8 淡青緑	外面: タテハナ→ヨコナデ 内面: 横方向ハナ→縦方向ナデ→ヨコナデ	13-5
2	S-28	円筒埴輪	3トレス溝 埋土	-	0.8	1.9	0.7	約10 黒	外面: タテハナ→凸凹貼り付け・スカラシ乳靡孔 内面: 縦方向ハナ→縦方向ナデ	13-6
3	S-30	円筒埴輪	3トレス基層	-	0.6	1.8	0.7	約6 黒	外面: タテハナ→凸凹貼り付け・スカラシ乳靡孔 内面: 横方向ハナ→凸凹内面ナデ	13-4
4	S-6	円筒埴輪	2トレV層	-	0.7	2.1	0.9	-	内外面ともに風化のため不明	13-7
5	S-31	円筒埴輪	3トレ圓溝 埋土	-	0.8	1.7	0.8	約9 黒	外面: タテハナ→凸凹貼り付け 内面: 横方向ナデ	13-3
6	S-26	円筒埴輪	3トレ瓦層 底	底 (39.4)	-	-	-	8-9 淡青緑	外面: タテハナ→落部付近ヨコナデ 内面: 横方向ナデ→縦方向ナデ	13-1
7	S-27	円筒埴輪	3トレP-4② 埋土	底 (17.3)	-	-	8-13 黒	外面: タテハナ→底部付近ヨコナデ 内面: 横方向ナデ→縦方向ナデ	13-2	

第8図 春日社古墳出土遺物(1)円筒埴輪



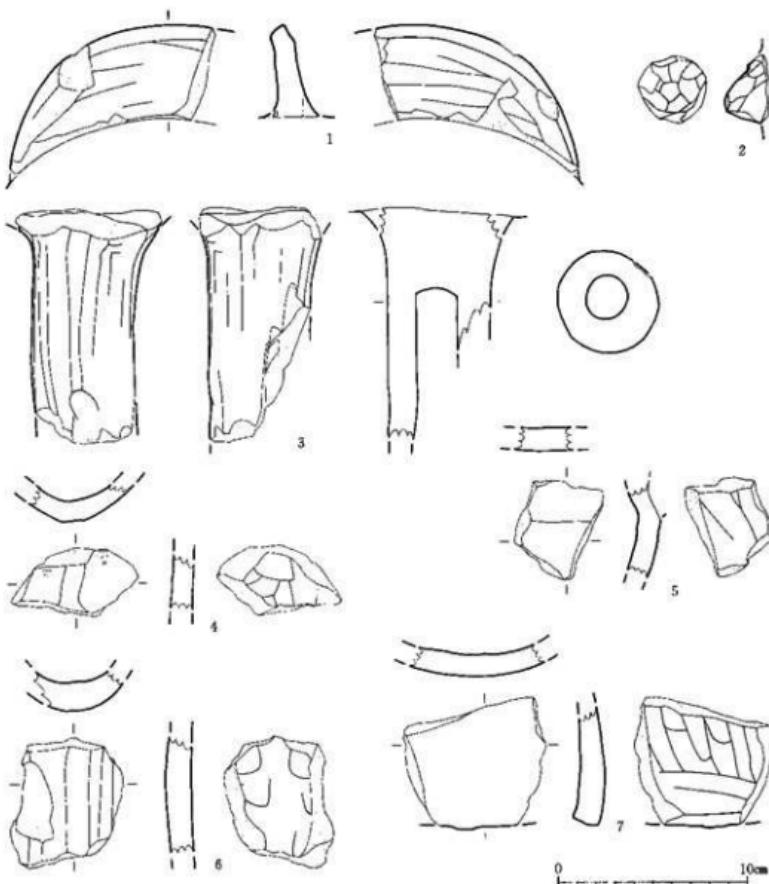
番号	登錄番号	種類	出土位置	法 量	高 さ 上部 下部	幅 幅 高 外側 内側	ハケ メ ン セ ン	色 調	圖 案	写真記載 番号
1	S-3	円筒埴輪	3トレス・西壁	—	0.7	1.8	0.7	約10	—	5-YR 5% G 内面: タテハケ→西面貼り付け・スキン孔穿孔
2	S-5	円筒埴輪	3トレス・V層	—	0.6	2.0	0.8	—	—	5-YR 5% G 内面とも風化のため不明
3	S-40	円筒埴輪	3トレス・西 壁上	—	0.6	1.8	0.6	—	—	5-YR 5% G 外面: 内面貼り付け→スキン孔穿孔
4	S-28	朝顔形埴輪	3トレスPit② 壁土	—	—	—	—	6~7	6~7	5-YR 5% G 外面: タテハケ→ヨコナギ 内面: 横方向ハケ→部分的にナゲ
5	S-29	朝顔形埴輪	3トレスPit② 底土	—	—	—	—	7~13	—	5-YR 5% G 外面: タテハケ→ヨコナギ 内面: 横方向ナゲ
6	S-7	朝顔形埴輪	2トレス V層	—	0.7	2.4	1.1	—	—	7.5-YR 5% G 外面: ヨコナギ 内面: 横方向ナゲ
7	S-24	朝顔形埴輪	3トレス V層	—	0.9	2.6	1.1	約6	—	7.5-YR 5% G 外面: タテハケ→西面貼り付け
8	S-18	朝顔形埴輪	3トレス V層	—	1.2	2.4	1.6	—	—	7.5-YR 5% G 外面とも風化のため不明
9	S-19	朝顔形埴輪	3トレス V層 (12.8)	0.7	2.2	1.3	—	約8	約10	5-YR 5% G 外面: タテハケ→西面貼り付け 内面: 横方向ハケ
10	S-14	朝顔形埴輪	3トレス V層	—	—	—	—	6~7	—	5-YR 5% G 外面: タテハケ→ヨコハラ→ヨコナギ 内面: 鋸方向ナゲ→横方向ナゲ

第9図 春日社古墳出土遺物(2)円筒埴輪・朝顔形埴輪



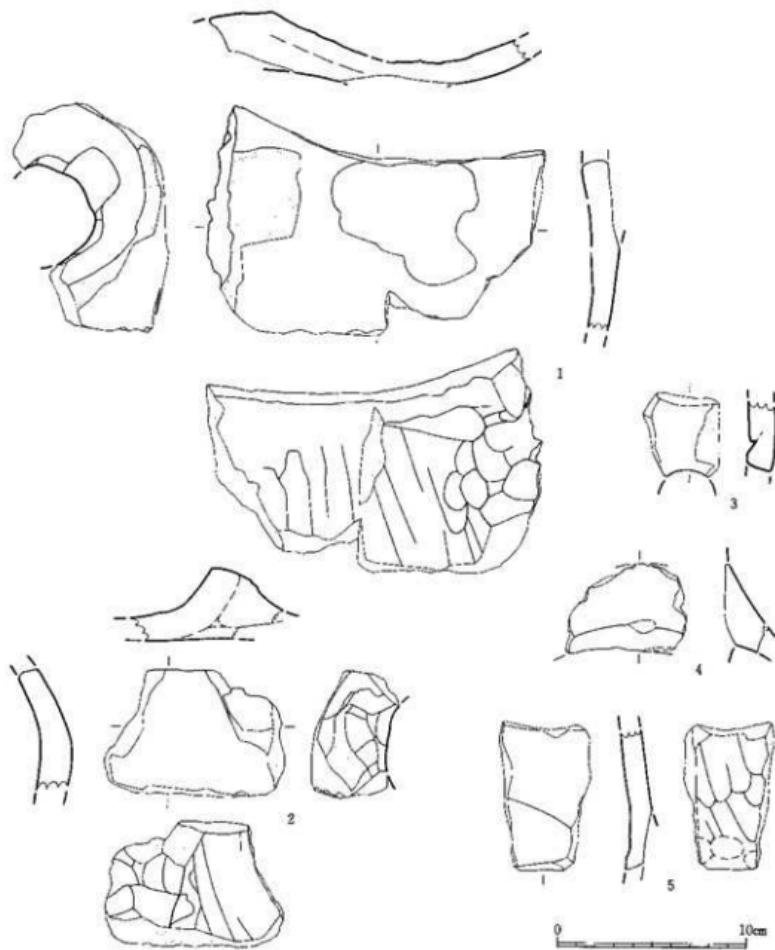
番号	登録番号	種類	出土位置	法長(m)	色調	測定値	特徴	参考文献番号
—	S-33	形象埴輪 馬	3トレス裏 土3層	—	5Y8R 6位	外面:ハケ→ナデ 内面:ナデ		14-8

第10図 春日社古墳出土遺物(3)形象埴輪



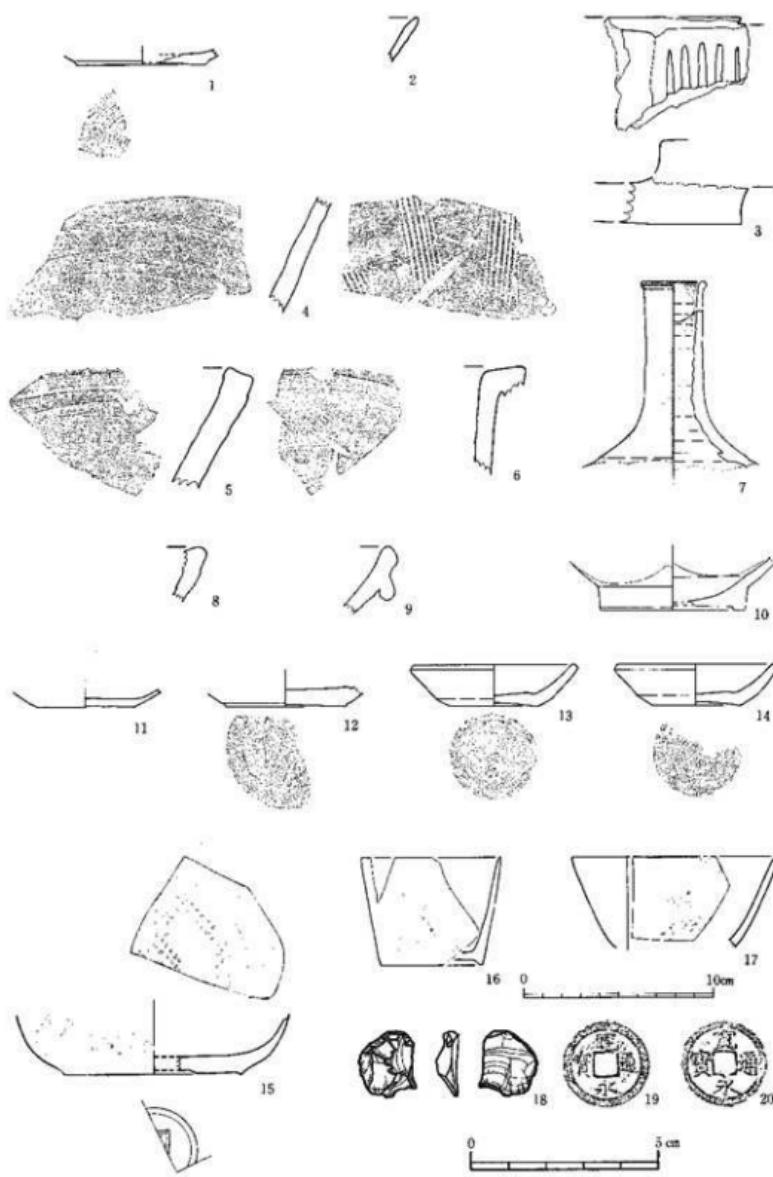
番号	登録番号	種類	出土位置	法寸(cm)	色調	調査・特徴	参考図番号
1	S-34	形象埴輪	3トレ周溝 埋土3層	上:下縫大部4.9 幅2.4 下:下縫2.7	5YR5% 橙	両面ともナデ、下面の剥落した面にハケメは痕	15-1
2	S-35	形象埴輪	3トレ周溝 埋土2層	上:縫3.6 幅2.4	5YR5% 橙	ナデ	15-2
3	S-1	形象埴輪 瓦?	2トレス・瓦層	外径5.5・内径3.3 現存長12.4	5YR5% 橙	外側: 横方向ナデ、内面: 横横正面、上面は剥落痕 外底: 棒頭状の压痕あり	15-3
4	S-38	形象埴輪	3トレ周溝 埋土2層	—	5YR5% 橙	外面: タテハケ一級方向ナデ 内面: 横方向ナデ	15-8
5	S-20	形象埴輪	3トレスV層	—	7.5YR5% 橙	外面: 脱化のため不明、剥落痕 内面: 橫方向ナデ	15-7
6	S-16	形象埴輪	3トレス・瓦層	—	5YR5% 明赤	外面: 横方向ナデ 内面: 橫方向ナデ	15-6
7	S-42	形象埴輪	3トレスV層	—	5YR5% 橙	外面: 脱化のため不明、ナデか? 内面: 橫方向ナデ一級方向ナデ	15-4

第11図 春日社古墳出土遺物(4)形象埴輪



番号	登録番号	種類	出土位置	法量(cm)	色調	測定・特徴	参考図版番号
1	S-23	形象埴輪	3 トレ V層	画面の孔径 5.2	5 YR 5/2 橙	外面：風化のため不明。側面底あり 内面：縦方向ナガ一様方向ナダ	14-3
2	S-17	形象埴輪	3 トレ目・古層	-	5 YR 5/2 淡 橙	外面：風化のため不明 内面：ナダ	14-6
3	S-8	形象埴輪	2 トレ V層	乳頭約3	5 YR 5/2 淡 橙	内外面とも風化のため不明	14-7
4	S-15	形象埴輪	3 トレ里・古層	洞落部幅 4.3	5 YR 5/2 橙	内外面とも風化のため不明	15-9
5	S-12	形象埴輪	3 トレ II層	-	5 YR 5/2 橙	外面：風化のため不明 内面：縦方向ナガ一様方向	15-5

第12図 春日社古墳出土遺物(5形象埴輪)



第13図 春日社古墳出土遺物 (6)輪状以外の遺物

番号	遺物番号	種類	形態等	出土位置	法基(cm)	測量・特徴等	写真図版番号
-	A-1	陶文器?	不規	3トレⅤ層	-	外縁風化、沈殿層、内面にガサ	-
-	C-1	土師器	环?	2トレⅤ層	-	網片	-
-	C-2	土師器	环?	2トレⅤ層	-	網片、内面黒色処理	-
-	C-3	土師器	环?	2トレⅤ層	-	網片	-
-	C-4	土師器	环?	2トレⅤ層	-	内面黒色処理	-
-	C-5	土師器	环?	2トレⅤ層	-	網片、内外面黒色処理	-
-	C-6	土師器	环?	3トレⅤ層	-	網片、内外面黒色処理	-
-	C-7	土師器	环?	3トレⅤ層	-	網片	-
-	C-8	土師器	環?	2トレⅣ層	-	底部片、内外面黒色化	-
-	D-1	赤陶土器	环?	2トレⅤ層	-	直筒細部、山凹系切り	-
2	D-2	赤陶土器	环?	2トレⅤ層	-	クロナダ	-
-	D-3	土師器	环	不規	-	クロナダ、内面黒色処理?	-
1	E-1	陶文器	环	3トレⅤ層	底径(5.6)	ロクロナダ、山凹系切り無網片	-
-	E-2	陶文器	环?	不規	-	網片	-
-	E-3	陶文器	不規	2トレⅤ層	-	ロクロナダ	-
-	H-1	瓦	平瓦?	2トレⅠ-Ⅱ層	-	よじてない、一部に鉛錆らしきもの付着	-
3	H-2	瓦	廢瓦	3トレⅤ層	-	18C以降	19-9
-	I-13	土師質陶器	瓶	3トレⅤ層	-	LJ様断面片、ロクロナダ、色調褐色	-
-	I-14	土師質陶器	不規	3トレⅤ層	-	網片、色調褐色	-
11	I-10	土師質陶器	瓶	3トレⅤ層	-	外縁風化もロクロナダ、内面無網片、内面ロクロナダ、色調褐色	-
12	I-15	土師質陶器	瓶	3トレⅤ層	底径(16.4)	内面風化もロクロナダ、内面無網片、見込盛り上がる、色調褐色	-
13	I-19	土師質陶器	瓶	3トレⅤ層	口径(8.6) 底径(4.6) 高さ(2.2)	口徑、内面ともロクロナダ、見込盛り上がる 底部網片系通り、色調褐色 18C	16-10
14	I-20	土師質陶器	瓶	3トレⅤ層	口径(8.6) 底径(4.7) 高さ(2.2)	内面ともロクロナダ、見込盛り上がる 底部網片系通り、色調褐色 18C	16-11
-	I-9	瓦質土器	筒体	2トレⅤ層	-	内面黒色、内面風化?、江戸初期か?	-
6	I-1	陶器	甕?	1トレⅤ層	-	底、灰粒系、江戸末~明治	16-8
10	I-2	陶器	とっくり?	1トレⅤ層	底径(7.8)	粗馬2、鉄錆、明治	16-6
-	I-3	陶器	角鉢?	2トレⅤ層	-	底?、外番アメ物	16-7
7	I-16	陶器	とっくり?	3トレⅤ層	口径(3.5)	粗馬?、鉄錆、明治、I-2と同一個体の可能性	16-3
-	I-12	陶器	不規	4トレⅤ層	-	網片	-
8	I-5	陶器	瓶?	2トレⅤ層	-	底漆、鉄錆、18C末~17C初	16-5
4	I-6	陶器	瓶?	2トレⅤ層	-	底漆、鉄錆、18C末~17C前半	16-1
-	I-7	陶器	瓶?	2トレⅤ層	-	粗馬、灰粒、賣人印?	-
-	I-8	陶器	大平鉢	2トソ田・吉澤	-	底漆渋、高台山型、長石種系純、高台山型・重ね地き温湯、17C?	-
-	I-17	陶器	瓶?	3トレⅤ層	-	鉄錆、底部系切り、江戸?	-
9	I-18	陶器	瓶?	3トレⅤ層	-	底漆、鉄錆、輪乳2、18C後半以降	16-4
5	I-11	陶器	林?	2トレⅤ層	-	粗馬、色調10YR4/6灰色、小便陶器	16-2
-	I-4	陶器	土瓶	不規	網片、白漆地、織かれた貫入、内面LJ様部付近にも拘泥、口唇部網片	-	
-	J-1	磁器	(染付)	2トソⅠ-Ⅲ層	口径(14.4) 底径(7.9) 高さ(2.8)	内面全面、内面花文 網版プリント	16-16
15	J-4	磁器	(染付)	3トレⅤ層	底径(9.3)	網版、内面にご焼痕、買入有、蛇口型窓高台、蓋台内に泥有、18C	16-17
-	J-2	磁器	(青磁)	2トソ田・吉澤	-	肥前、見込縫?日物ハサ、買入有、17C後半~18C	-
16	J-3	磁器	(染付)	2トレⅤ層	口径(7.3) 底径(5.2) 高さ(3.8)	染付文様は梅樹と芭 江戸末~明治?	16-14
17	J-5	磁器	(青磁染付)	不規	口径(10.9)	肥前、18C後半~19C最早 内面梅花文、口縁部は花茎文	16-13
-	J-6	磁器	(染付)	不規	-	肥前、見込縫?日物ハサ、買入有、18C	-
-	J-7	磁器	大皿(染付)	不規	-	肥前、内面にご草花、外側草花、18C	16-12
-	J-8	磁器	(染付)	不規	-	肥前、見込縫?花文、買入有、18C	16-15
18	K-1	石器	フレーク	3トレⅤ層	長さ(1.7) 幅(1.5) 厚さ(0.6)	同様削離 石材メノウ	-
19	N-1	古墳	東永通塗	2トレⅤ・吉澤	径(2.3)	-	-
20	N-2	古墳	東永通塗	3トレⅤ層	径(2.3)	-	-

第3表 春日社古墳出土埴輪以外の遺物集計表

## 第IV章 大野田3号墳

春日社古墳1トレンチの壁面の検討で周溝状の落ちこみを発見したため、A・Bトレンチを設定して調査したところ、同様の落ちこみを確認した。但し、全て断面での確認で、平面精査は行っていない。したがって平面図の構造のラインは、全て断面からの推定である。

### 1. 検出遺構

検出された遺構としては、古墳周溝・溝状遺構・ピット状の落ちこみがある。

#### 〔周溝〕

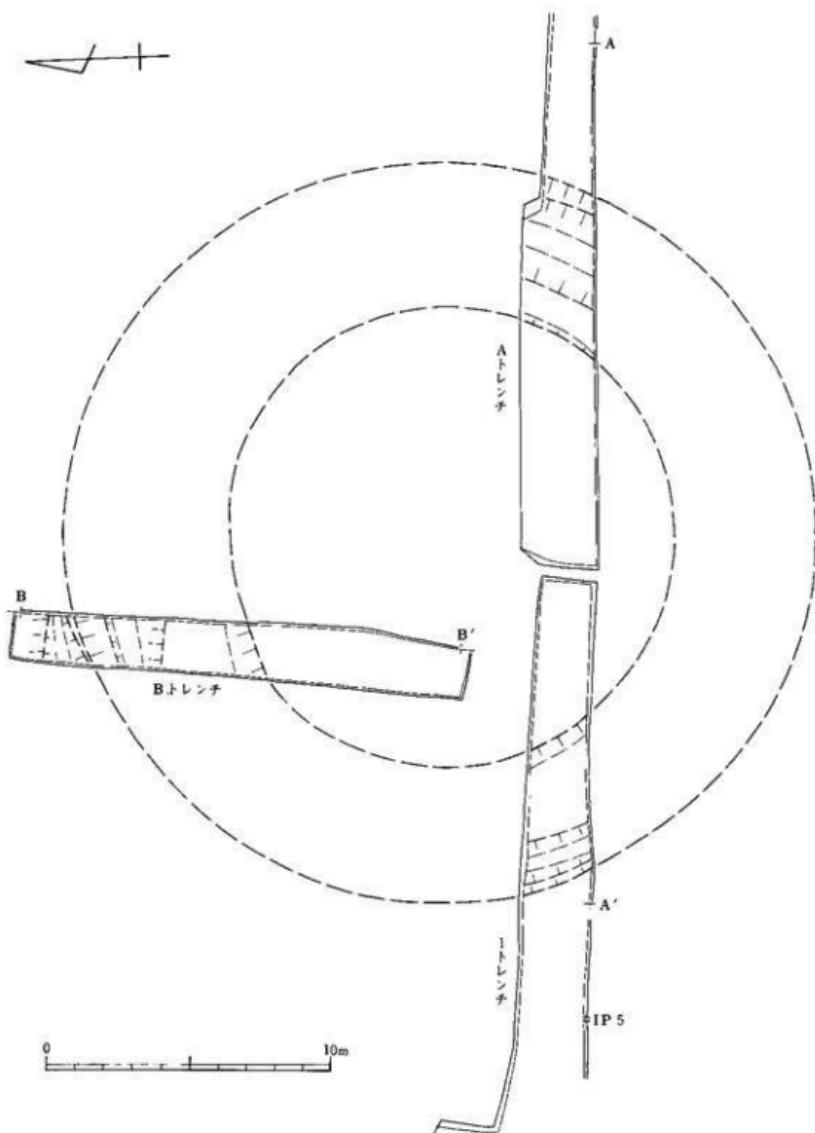
1トレンチ、A・Bトレンチで検出し、断面形状が類似することから同一の溝と判断した。直接この溝に伴う遺物は発見されていないが、円形をなすこと、周囲を古墳に囲まれていることから、削平された古墳の周溝であると考えられる。墳丘積土と考えられるものは検出されていない。

周溝はⅢ層とした黄褐色シルト層上面から掘りこまれており、上端幅は4.8～5.4mを計る。断面形状は舟底形を呈し、外側により幅1.3～3.0mの一段深い部分がある。この部分の底面幅は0.5～0.9mを計る。深さは0.5～0.7mで、底面レベルは1・Aトレンチが9.8m、Bトレンチが10.0mと、Bトレンチでやや高くなっている。埋土は大きく3層に分けられ、自然堆積と考えられる。

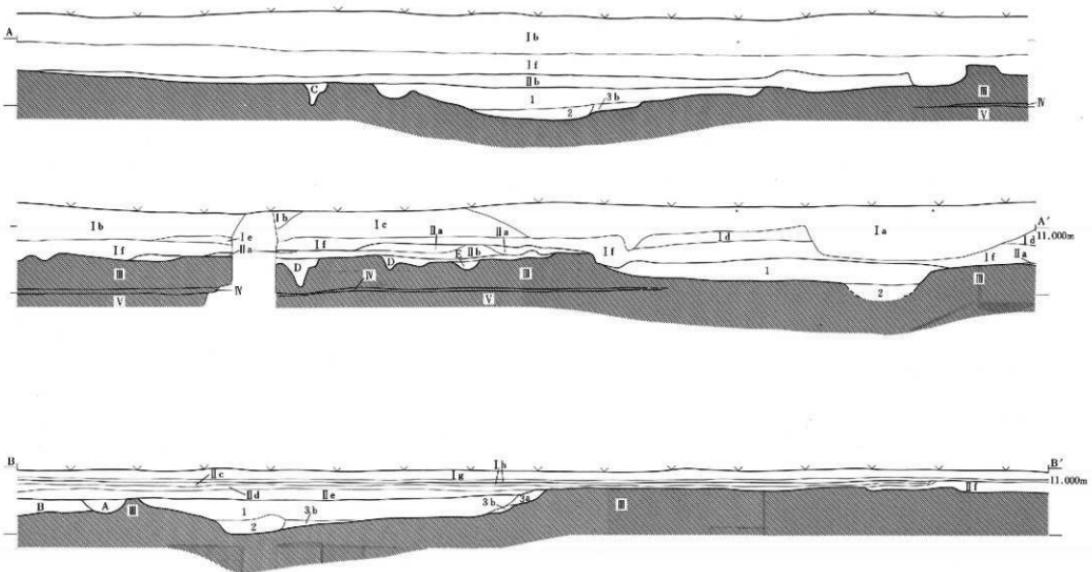
現状から平面形を復元すると、ややひずんではいるものの、周溝内縁径16m・外縁径26m程の円墳となる。

#### 〔溝状遺構〕

古墳周溝以外には、ピット状の落ちこみが認められ、Bトレンチ北端で2本の溝状の遺構が確認された。この両者は切り合っており、第15図でA層としたものがB層としたものを切っている。いずれもⅢ層上面から掘りこまれている。平面精査を行っていないため詳細は不明とせざるをえないが、B層としたものは位置から見て、1981年に調査した大野田2号墳の周溝の一部となる可能性がある。しかし今回検出したものの最深部のレベルが10.3mであるのに対し、1981年調査時の底面レベルは9.0mとかなり異なる。周溝掘りこみ面のレベルも、今回の10.9mに対し、10.0mと異なる。断面のみでの観察なのでいずれとも判断し難いが、もし大野田2号墳の周溝であるとすれば、その周溝の外縁径は30m程となる。

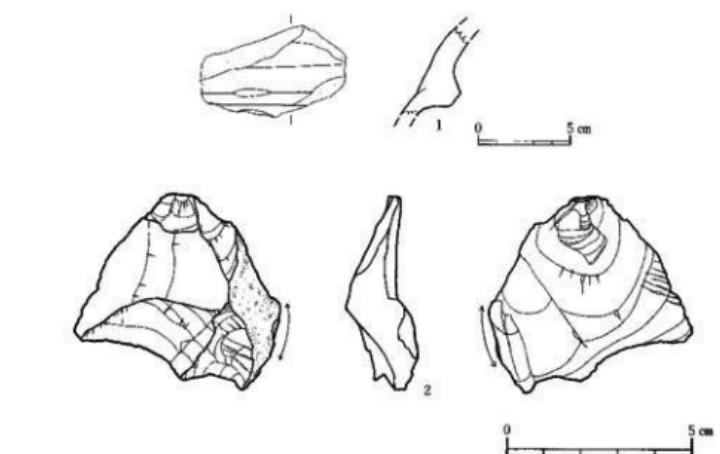


第14図 大野田3号墳平面図



層位	土色	土質	標	層位	土色	土質	標
I a	不 明	不明	溝を埋めたてた堅地帯	基	黄 色	シルト	
I b	緑灰褐色	シルト	疊成粘性土の堅地帯	本	緑灰褐色	シルト	
I c	灰 色	シルト		Ⅳ	黄 色	シルト	
I d	暗 灰 色	シルト		Ⅴ	灰 黄 色	シルト	
I e	灰 色	シルト		Ⅵ	灰 黄 色	シルト	
I f	灰 色	シルト	疊成粘性土の堅土	Ⅶ	灰 黄 色	シルト	
I g	青 灰 色	シルト		Ⅷ	灰 黄 色	シルト	
I h	黄 黑 色	粘 土		Ⅸ	緑灰褐色	粘土質シルト	
II a	緑灰褐色	砂質シルト		A	灰 黑 色	粘土質シルト	溝底土
II b	灰 色	粘土質シルト		B	緑灰褐色	粘土質シルト	溝壁土・大野田1号溝周辺の可能性有り
II c	灰 色	粘 土		C	灰 黑 色	粘土質シルト	ピット状隙水及び堆土
II d	灰 色	シルト質シルト		D	灰 黑 色	粘土質シルト	
II e	灰 色	粘土質シルト		E	緑灰褐色	粘土質シルト	ピット状隙水及び堆土
II f	灰 黑 色	粘 土					

第15図 大野田3号填断面図



番号	記録番号	種類	出土位置	内寸(㎝)			色調	調査	番号	記録番号	種類	出土位置	外寸(㎝)			重さ (g)	石材
				上幅	下幅	高							比	幅	厚		
1	S-1	朝顔形埴輪	Bトレ・工具	0.9	2.9	1.1	5YR8/4	風化のため不明	2	K-1	フレーク	Bトレ・工具	5.2	5.5	1.3	23.1	流紋岩

第16図 大野田3号墳出土遺物

## 2. 出土遺物

第Ⅲ章で報告した1トレンチ出土の遺物以外では、Bトレンチから埴輪片・石器(フレーク)が各1点出土しているのみである。

### 埴輪

朝顔形埴輪の朝顔花部の屈曲部の破片である。I層の出土で内外面とも風化が著しい。

この資料と1トレンチ出土の埴輪は、いずれもT層出土であり、しかも全て表面の風化が著しいため、本来の位置を保っていないことは明らかである。したがって本古墳には埴輪は件っていないと考えておきたい。

### 石器

流紋岩のフレークで、周溝が掘りこまれているIII層からの出土である。

## 第V章 大野田4号墳

3トレンチ東端とCトレンチにおいて周溝が発見された。これも3号墳と同様に、全て断面での確認で平面精査は行っていない。平面図のラインは断面からの推定である。

### 1. 検出遺構

古墳周溝とピット状の落ちこみがある。ピット状の落ちこみは、Ⅲ層上面から掘りこまれているが、平面精査を行っていないため詳細は不明である。

#### [周溝]

B・Cトレンチで弧状にのびる溝を検出し、Cトレンチ東側の溝内から一括の円筒埴輪が発見されたことより古墳の周溝であると判断した。積丘積土らしいものは検出されていない。

周溝はⅢ層とした黄褐色シルト層上面から掘りこまれており、上端幅は6.7m程になると思われる。断面形状は舟底形を呈すと思われるが、底面にはピット状の落ちこみが各所に認められる。埋土は6層に分けられるが、1・2層としたものは、分布範囲が周溝の範囲に限られることから周溝埋土としているが、推積状況が不自然なところがあり基本層の一部となる可能性もある。3層以下は自然推積と思われる。深さは、Cトレンチ東側の周溝掘りこみ面から底面まで0.6mを計る。底面レベルは9.8mである。

平面形は、ごく一部の検出なので不確実であることは拒めないが、円墳であるとすれば、現状からの復元では、周溝内縁径31m・外縁径44.5m程になると考えられる。

### 2. 出土遺物

Cトレンチから埴輪が出土しているが、他の遺物は確認されない。

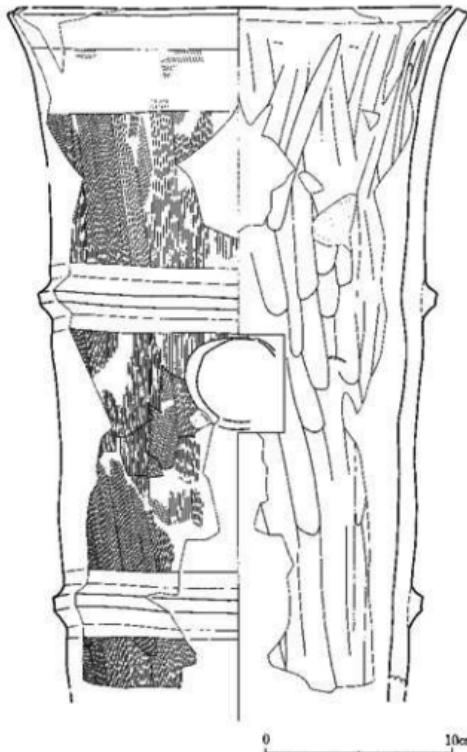
#### 埴輪

図示したものは、Cトレンチの北側壁面付近で、周溝埋土5層の上面に貼りつくような形で一括出土した円筒埴輪である。最下段下半を欠き、約4分の1が残存しており、残りは調査区外へ続いているものと思われる。これ以外には、周溝埋土3層から小破片が7点出土している。これらのいずれにも黒斑は認められない。

第17図の円筒埴輪は、わずかに外に開く形態で、凸帯は2条まで確認できる。大野田1号墳などの例から2条凸帯であったと思われる。ややひずんでいるが、口径は復元径で24.7cm、残存高は37.0cmを計る。凸帯の中心部で計ると、中間段・最上段とも約16cmとほぼ等しい。最下段も同様の高さであったとすると、全体の器高は48cm程になると推定される。底部付近を欠いた

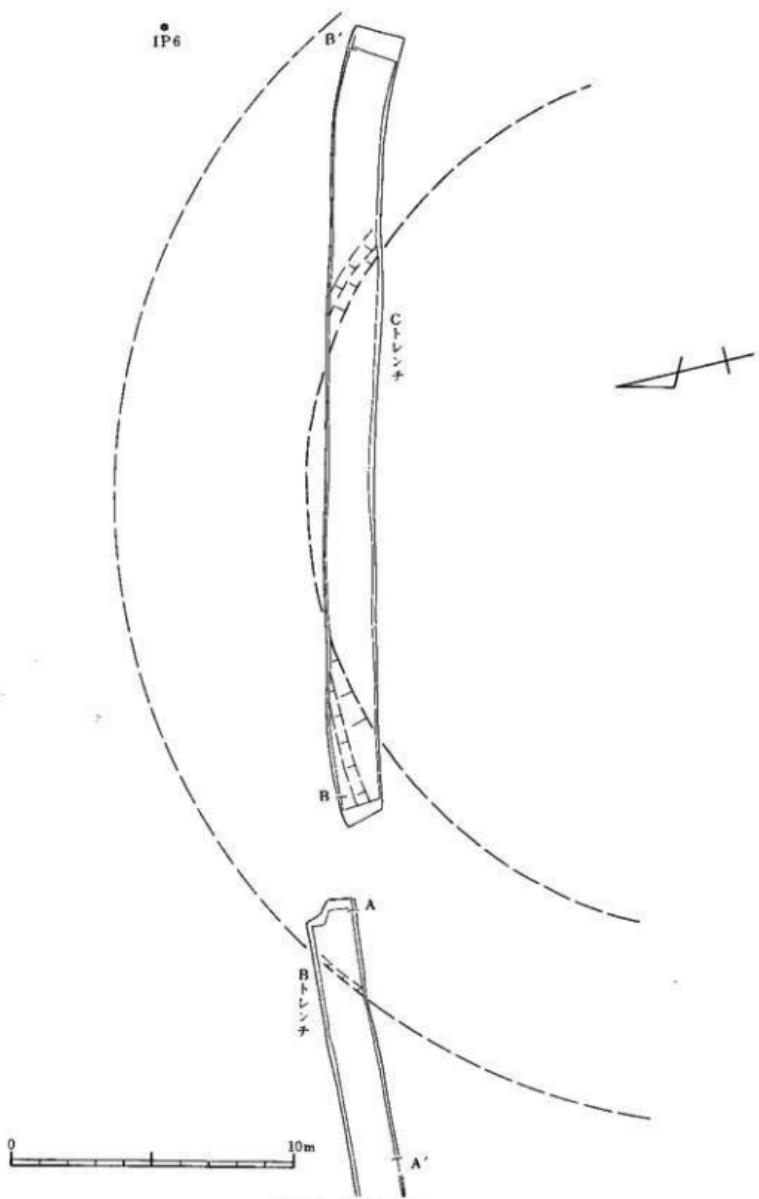
め基部の有無や底部調整の有無は不明であり、成形時に休止期間を置いていたか否かは明確ではないが、第2凸帯のやや下で器厚が変化しているところがあり、それに対応するように外面のタテハケが途切れるため、この付近で休止期間を置いて成形したものと考えられる。外面調整は一次調整のタテハケのみでその後凸帯を貼り付けている。凸帯はM字形を呈し、上・側・下面とも強くナデつけられているが、第1凸帯は乾燥が進んでいたためか表面が平滑になっていない。内面調整は縱方向のナデで、口縁部付近にはそれ以前に行なわれた横方向のナデが一部に観察される。凸帯内面のヨコナデは認められない。口縁部はわずかに外反して端部に至り端部はやや凹面をなす。口縁部内面のヨコナデが施される部分もわずかに間む。スカシ孔は円形で、径5~6cmになると思われる、中間段の中でも上方に片寄った位置に穿孔され、上側は凸帯のヨコナデの範囲の境付近から切りこまれている。

これ以外の破片は、いずれも小破片で、表面の風化も著しく、その特徴は不明である。

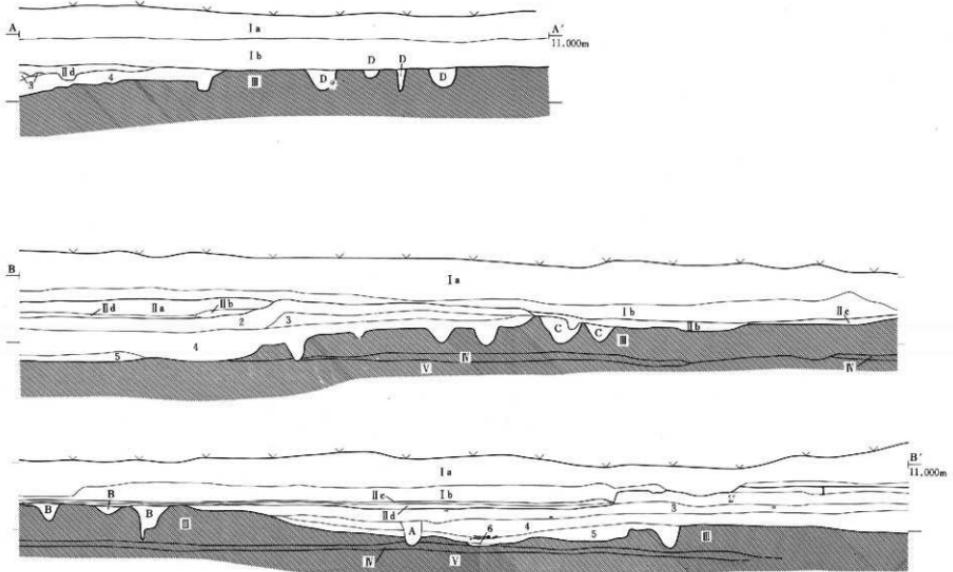


第17図 大野田4号墳出土遺物

番号	登録番号	種類	出土状況	法蓋(cm)	内帯(cm)			ハケメ(cm)		色調
					上幅	下幅	高	外側	内側	
-	S-1	円筒埴輪	Cトレー+赤陶土 底5層+上層 器高(37.0)	口径(34.7)	0.7	2.2	0.7	7-8	—	5YR% 橙
調査										
外側: タテハケ→凸帯貼り付け、上縁部ヨコナデ、スカシ孔穿孔 内側: 隅方ヨコナデ→凸帯ヨコナデ										
19										



第18図 大野田4号墳平面図



層位	土色	土質	特徴	層位	土色	土質	特徴
I-a	褐色(茶色)	シルト	高透水性の粘土層	I	黒褐色	シルト	
I-b	灰褐色	シルト		II	灰褐色	シルト	部分的にグライ化
II-a	灰褐色	砂質シルト		III	暗褐色	シルト	
II-b	灰褐色	シルト		IV	黒褐色	シルト	部分的にグライ化
II-c	灰褐色	砂質シルト		V	灰褐色	シルト	
III	灰褐色	シルト					
IV	灰褐色	シルト	部分的にグライ化				
V	灰褐色	シルト					

第19図 大野田4号墳断面図

## 第VII章 鳥居塚古墳

鳥居塚古墳はすでに削平されていたが、地元の方の話で以前は墳丘が残存していたことが判明していた。調査は道路予定地にそって1・2トレンチを設けるとともに、それと直角方向に3トレンチを設定し範囲確認に務めた。さらに必要に応じて4～7トレンチを設定した。

### 1. 検出遺構

古墳に関するものとしては周溝・墳丘積土があり、他に6トレンチのピット群、3トレンチのピットがある。基本層はI～V層まで確認されており、古墳の墳丘はII層とした黒褐色粘土質シルト層上に築かれており、このII層が古墳築造時の表土層と考えられる。

#### [周溝]

内縁は1・2・3トレンチで検出し、いずれもII層から掘りこんでいるが、外縁は明確にはしえていない。7トレンチの所見では、底面からの立ちあがりがIV層の上部付近までしかなくそれより西はほぼ平坦となっている。この7トレンチ外縁のレベルは9.7mで、内縁のII層上面のレベルが10.5mであるのに対し、0.8mほど低い。あるいは微高地状の高まりを利用し、周囲を削り出している可能性もあるが、そうすると西隣の大野田4分墳の周溝検出面のレベルが10.4mであるのに対し、鳥居塚古墳の周開のみが僅むことになってしまう。他に考えられるのは、周溝範囲がさらに西へ伸びるのか、あるいは後世の削平であるか、調査範囲が狭いため決定し難い。本報告では一応7トレンチの外縁の立ちあがる位置をとって、周溝範囲としておきたい。そうすると現状から円墳であると考えて復元すれば、周溝内縁径22m・外縁径38.5m程となる。断面形状は逆台形を呈し、7トレンチの状況では上端幅8.2m・下端幅4.0mで深さはII層上面からは1.8mを計る。埋土は大きく3層に分けられ、自然堆積と思われる。各トレンチで1～3層の大別は対応するが、細分層は対比していない。したがって細分層の層名は相互に別のものである。7トレンチの周溝内縁付近の3E層上面からピットが掘りこまれていることが壁面で観察されるが、平面形等は不明である。

#### [墳丘積土]

旧道路部分に墳丘積土が残存していた。II層の上に積まれており、残存していた高さは最大のところで60cmである。各トレンチの層は対比しえないので、層名は対応しない。積土に明確な規則性や作業面は確認できないが、おおよそ黄褐色系シルト・砂質シルトと黒褐色系の粘土質シルトを交互に積んでいる。また1トレンチでは、外側に向けて進む形で盛土している。II層上面と墳丘積土の間には、部分的に薄い炭化物層が認められる。

### [6 トレンチビット群]

6 トレンチの中央付近の周溝埋土上面で、3個のビットがほぼ直線状に並んで検出された。いずれも隅丸方形に近い形で、大きさは24~30cmである。径12~20cmの柱痕跡が全てに確認されている。一番南側のビット埋土から、ロクロ整形の内面黒色処理を施した壺の口縁部の小破片が1点出土している。

### [3 トレンチビット]

3 トレンチの中央付近で検出したビットでⅡ層上面から掘りこまれている。径140cmのはば円形をなし、30cmの柱痕跡がある。

## 2. 出土遺物

遺物は5トレンチを除く各トレンチで出土している。

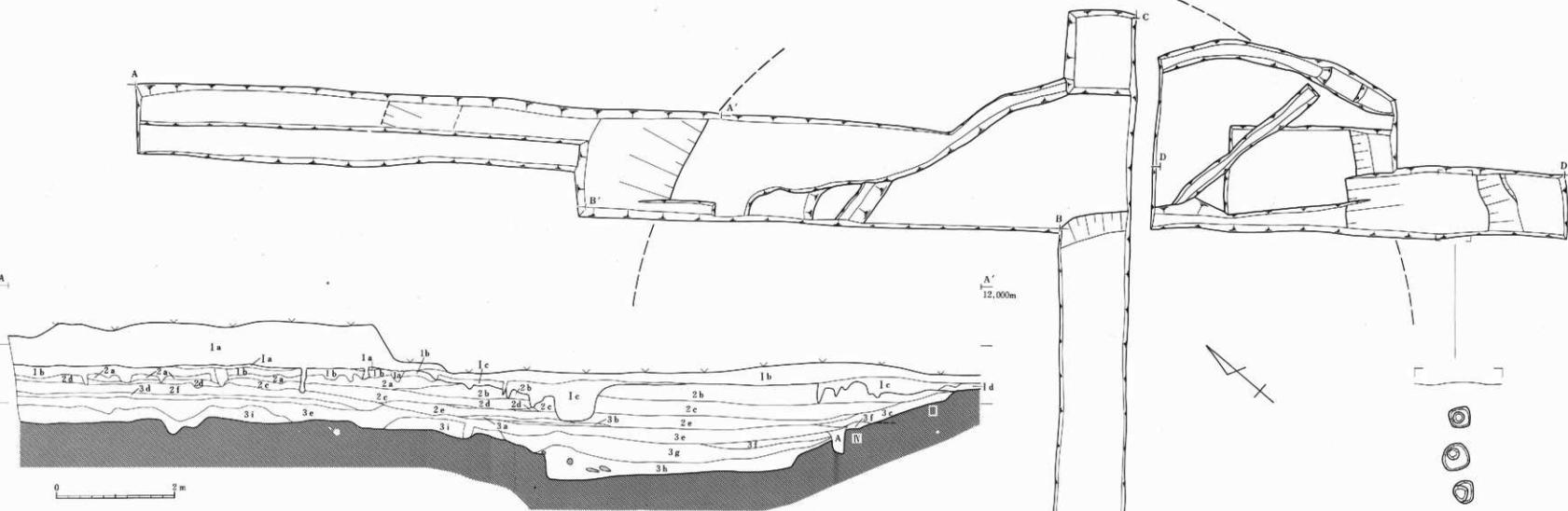
### 埴輪

埴輪は出土遺物の大部分を占めるが、その量はあまり多くなく平箱1箱である。各部位の出土位置の一覧を第4表に示すが、3トレンチでも破片が出土している。壊えられた状態で出土したものはないが、2・6トレンチ、4トレンチでは周溝内縁付近でまとまって出土している。円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪があり、そのいずれにも黒斑は認められない。

#### (円筒埴輪) (第22図、第23図1・3~6)

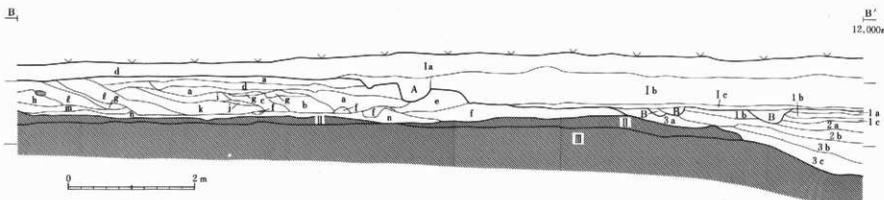
小破片が多く全体の特徴を知りうるものはない。第22図1と2は同一個体と考えられ、また第22図4は同一個体と考えられる破片が一括で出土し、口縁部・スカシ孔部の破片もあるが、接合できなかった。

全て外面調整は1次調整タテハケのみのもので、2次調整を有するものは認められない。器厚が0.9cm前後のものと、1.5cm前後のものとがある。内面調整は中間段はいずれも縦方向のナデで、凸帯内面ナデを有するもの(第22図2、第23図4)があり、他のものは明確ではない。但し確実に凸帯内面ナデをもたないものは確認できなかった。最上段の内面調整は横方向のハケの後に縦方向のナデを行うが、ハケ調整が顕著に残るもの(第22図1・3)と、わずかしか観察されないもの(第23図1)とがある。凸帯はいずれも側面がわずかに凹む台形を呈するのが第23図4は同一個体と思われる破片の観察では、他のものより高さがやや大きくなるようである。凸帯が剥落した面に沈線を有するものがある(第23図5)。スカシ孔はいずれも円形で、段の中でも上に片寄って穿孔されており、孔径は6cm程のもの(第22図2、第23図3)と4cm程のもの(第23図5)とがある。底部は小破片が1点あるのみで特徴を知りえないが、底部近くの破片(第23図6)では内面調整は縦方向のナデである。



1-7 レンチ北壁断面

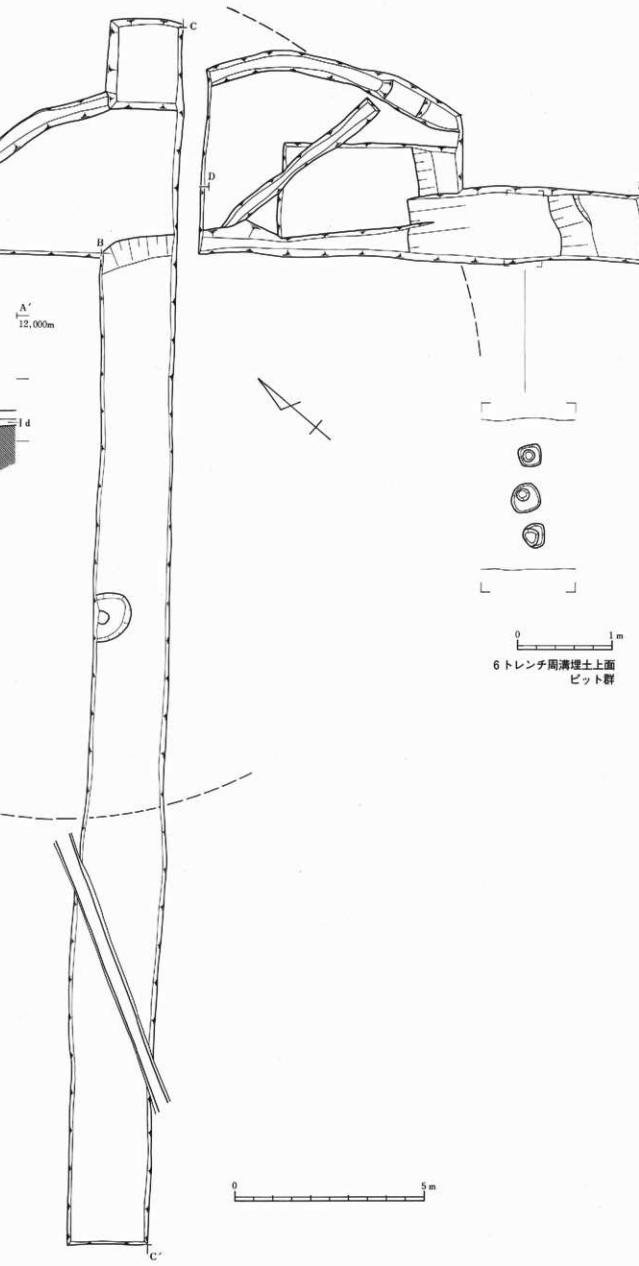
層位	土色	土質	備考	層位	土色	土質	備考	層位	土色	土質	備考
I a	灰褐色	シルト	曲道の盛土層	2 a	不明	不明		3 c	暗灰色	シルト	
I b	灰色	粘土質シルト		2 b	褐色	シルト		3 d	暗灰色	シルト	
I c	灰白色	粘土質シルト		2 c	灰黄色	シルト		3 e	暗褐色	シルト	
I d	暗褐色	シルト		2 d	灰褐色	砂質シルト		3 f	黒褐色	シルト	
III 黄褐色	シルト			2 e	灰褐色	シルト		3 g	暗灰色	シルト	
IV 黄褐色	砂質シルト			2 f	灰褐色	シルト		3 h	暗黄色	シルト	
周溝 1 a	黒褐色	シルト		3 a	黒褐色	シルト		3 i	不明	不明	ビット埋土
壁土 1 b	黒褐色	シルト		3 b	黄褐色	シルト		A	不明	不明	

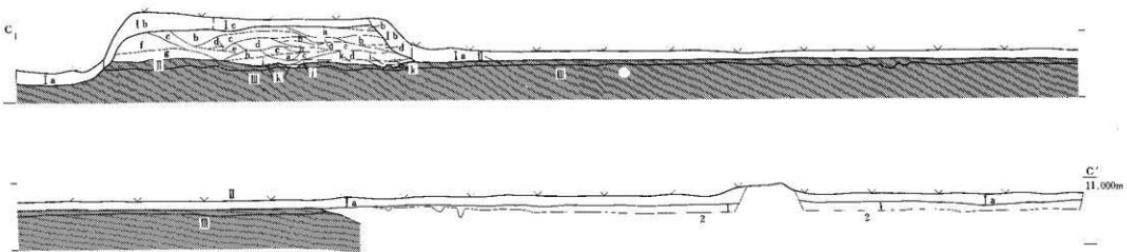


1 レンチ南壁断面

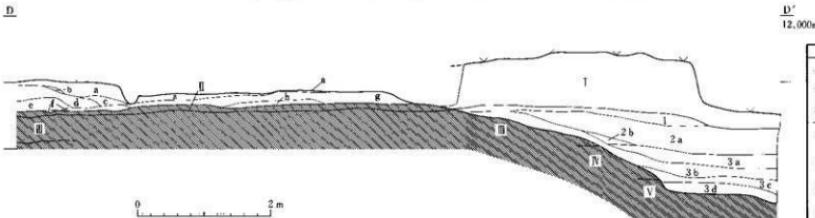
層位	土色	土質	備考	層位	土色	土質	備考	層位	土色	土質	備考
I a	灰褐色	シルト	曲道の盛土層	f	黒褐色	粘土質シルト		1 a	黒褐色	シルト	
I b	灰色	シルト		g	黒褐色	粘土質シルト		1 b	黒褐色	シルト	I a層より明るく茶色がかる
I c	灰褐色	粘土質シルト		h	黒褐色	粘土質シルト	黒褐色シルトブロック若干含む	1 c	黒褐色	シルト	やや黄色がかる
II 黑褐色	粘土質シルト	古墳築造時の表土		i	暗褐色	砂質シルト		2 a	黄褐色	シルト	
III 黄褐色	シルト			j	暗褐色	砂質シルト	1層より暗い	2 b	暗褐色	シルト	
a 黄褐色	砂質シルト	砂礫を含む		k	黄褐色	砂質シルト	黒褐色の薄い層をはさむ	3 a	暗褐色	シルト	
b 黄褐色	砂質シルト	a層より明るい		l	暗褐色	シルト	黒褐色の薄い層をはさむ	3 d	暗褐色	シルト	
c 黄褐色	砂質シルト	a層より明るい		m	暗褐色	シルト	1層より軽質	3 e	黒褐色	シルト	
d 暗褐色	シルト			n	青灰色	粘土	下部に部分的に薄い化物層	A	灰白色	シルト	
e 暗褐色	シルト	d層より粘質		B	灰色	粘土質シルト					

第20図 鳥居塚古墳平面図・断面図





層位	土色	土質	備考	層位	土色	土質	備考
I e	灰 色	粘 土		e 黒褐色 シルト			
I b	暗 紫 色	シルト		f 黑褐色 粘土質シルト			
I e	灰 灰 色	粘土質シルト		g 黑褐色 粘土質シルト	II層より黒い		
II	黑 暗 色	シルト		h 暗黄褐色 粘土質シルト			
III	黄 暗 色	砂質シルト		i 暗黃褐色 粘土質シルト	Ⅳ層より暗い		
a	暗灰黄色	砂質シルト		j 暗黄褐色 粘土質シルト	j層より暗い		
d	暗灰黄色	砂質シルト	Ⅳ層より暗い	k 青灰 色	粘 土		炭化物を若干含む
c	黑 暗 色	シルト		l 黑 色	シルト		
d	黄 暗 色	砂質シルト		m 2 黄褐色	シルト		



2-6 トレンチ北壁断面

層位	土 色	土 質	備 考
I	暗褐色	シルト	表面の土上層
II	黒褐色	粘土質シルト	山壁破壊跡の土質
本 壁	黒褐色	シルト	
基	灰褐色	シルト	
礫	青灰褐色	砂質シルト	
土	黄褐色	砂質シルト	
V	灰褐色	シルト	
a	暗褐色	シルト	砂質含む
b	暗褐色	砂質シルト	
c	暗褐色	シルト	高密度シルトブロック含む
d	暗褐色	シルト	高密度シルトの高い層を含む
e	暗褐色	シルト	
f	暗褐色	シルト	
1	暗 色	シルト	
2 a	暗褐色	シルト	
2 b	暗褐色	シルト	
3 a	暗褐色	シルト	
3 b	深褐色	シルト	
3 c	褐色	粘土質シルト	
3 d	暗褐色	粘 土	

第21図 鳥居塚古墳断面図

部位	1トレン			2トレン			4トレン			6トレン			7トレン			合計	
	周溝			周溝			周溝			周溝			周溝				
部 位	I	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
底 部	I																1
口縁部																	3
凸帯およびスカラップ		1						1						1			3
スカラップ																	1
凸 帯	I		1	2				1			1	1		1			8
朝顔形・口縁部				2													2

第4表 鳥居塚古墳出土埴輪集計表

番号	遺物番号	種類	器形	出土位置	は量(cm)	測定	特徴等	参考図版番号
—	A-1	縄文土器	不 明	2トレン頂部横土	—	細片		—
5	A-2	縄文土器	不 明	2トレン頂部横3層	—	丸地素面、内曲ガキ	33-12	
—	A-3	縄文土器	小 瓢	1トレン頂部横土	—	底部平、木製底	—	
—	C-1	土師器	不 明	2トレン1層	—	頸片、内外面ナデ	—	
—	C-2	土師器	不 明	6トレン頂部横3層	—	細片、内外面ナデ、C-1と同一個体の可能性	—	
—	C-3	土師器	不 明	6トレン頂部横1層	—	細片	—	
—	C-4	土師器	不 明	4トレン1層	—	点又は擦の跡から脛部にかけての破片、内外面ナデを調整	33-13	
—	C-5	土師器	不 明	1トレン頂部横3層	—	点又は擦の無破片	—	
—	C-6	土師器	不 明	1トレン頂部横3層	—	細片	—	
—	D-1	土師器	环	6トレン2層	—	口縁部細片、クロマナデ、内曲黒色底	—	
—	I-1	陶 瓶	透 花	1トレン1層	—	底、熱線、19°C中性以降	33-14	
9	I-2	陶 瓶	透 花	2トレン1層	—	底、熱線	—	
—	I-3	陶 瓶	透 花	4トレン1層	—	変通、灰石粒、買入	—	
10	N-1	古 銭	宣永通宝	6トレン1層	往 2.2		—	
—	N-2	鉄 制品	不 明	1トレン1層	往 3.0	環状鉄製品	—	
—	N-3	鉄 制品	—	1トレン1層	—		—	

第5表 鳥居塚古墳出土埴輪以外の遺物集計表

#### [朝顔形埴輪] (第23図2)

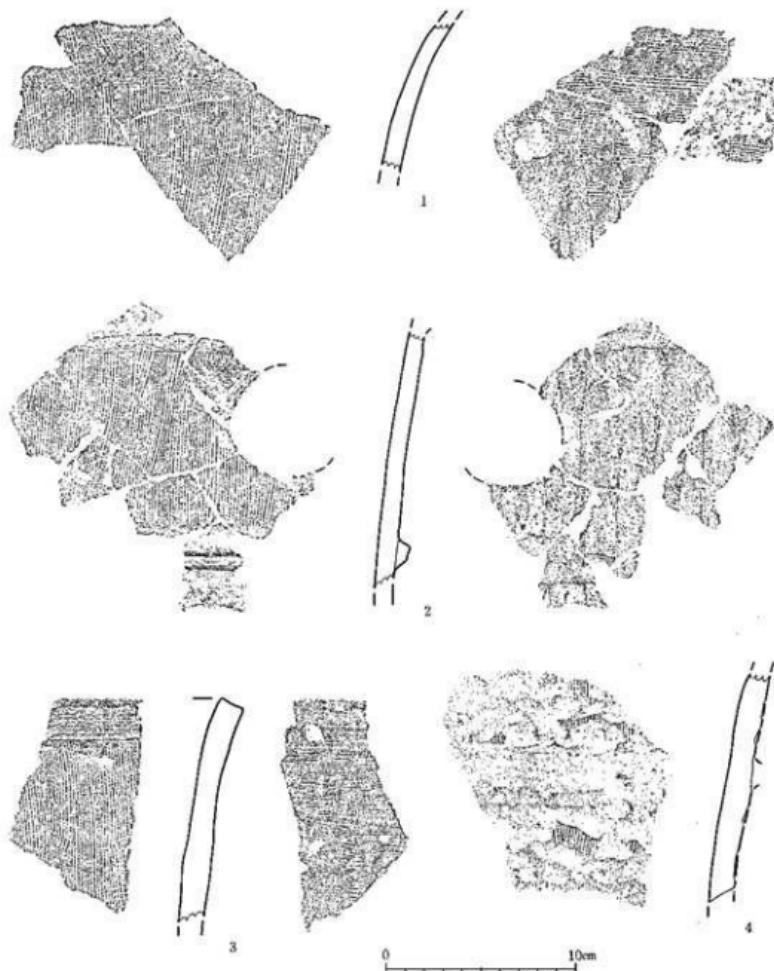
朝顔形埴輪は口縁部と考えられる破片が2点出土しているだけである。外面調整はタテハケ、内面調整は横方向ハケと思われるが明確でない。口縁端部はわずかに下方へ突出させる。

#### (形象埴輪) (第23図7)

形状から形象埴輪になると考えられる破片が1点だけ出土している。ほぼ直角に屈曲する部分の破片で、表面の風化が著しいが内外面ともナデによって調整していると思われる。

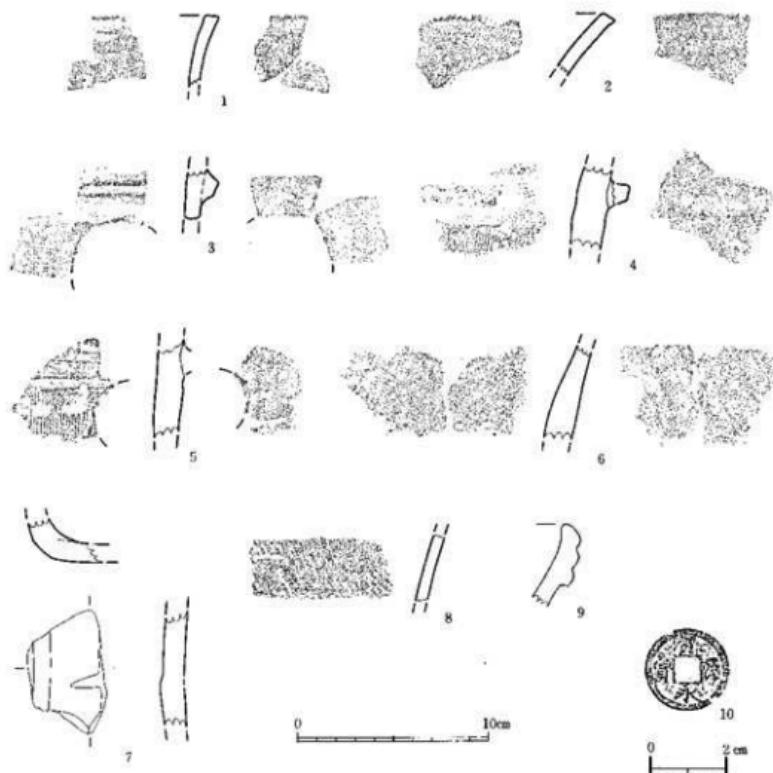
#### 埴輪以外の遺物。

埴輪以外では、縄文土器・土師器・陶器・古銭・鉄製品・焼夷彈がある。土師器は4点が周溝内から出土しているが、いずれも細片で時期は不明である。I層出土であるが写真33の13の土師器は要か壺の頸部から脣部にかけての破片で、形態、内外面調整より古墳時代の塙釜式から住社式の内に含まれると考えられるが、それ以上の比定は困難である。



番号	型鉢番号	種類	出土位置	径 上 下 幅	高 さ cm	ハラ × 1/cm	色 調	附 記	写真図版 番 号
				上幅 下幅 差	高 さ	外 面 内 面			
1	S-6	円筒形鉢	4トレイ Ⅱ層　直　上	— — —	— — —	6 6	7.5VR16 黄　褐	外面：チテハラ→ヨコナデ 内面：横方向ハラ→横方向ナデ・口縁部附近ヨコナデ	33-1
2	S-5	円筒形鉢	4トレイ Ⅱ層　直　上	— 0.7 —	1.6 0.7	6 —	7.5VR16 黄　褐	外面：チテハラ→凸面軋り付け 内面：縱方向ナデ→V字内面ヨコナデ	33-3
3	S-11	円筒形鉢	7トレイ Ⅱ層　直　上	— — —	— — —	6 5	7.5VR16 黄	外面：チテハラ→口縁部ヨコナデ 内面：横方向ハラ→横方向ナデ・口縁部ヨコナデ	33-4
4	S-12	円筒形鉢	6トレイ Ⅱ層　直　上	— — —	1.8 — —	6 —	7.5VR16 浅黄	外面：チテハラ→凸面軋り付け 内面：黒化のため不明	33-2

第22図 鳥居塚古墳出土遺物 (1)埴輪



番号	登録番号	性 種	生土位置	状 態	凸 印			ハサメ(1cm)	色 調	調 整	写真図書 分
					状態	上端	下端				
1	S-14	円筒埴輪	6トロ周溝 堆土 3層	-	-	-	-	8-9	約8	5YR5 度	外側: タチハケ→凸縁部ヨコナダ 内側: 橫方向ハナ→縱方向ナゲ→凸縁部ヨコナダ
2	S-8	羽根形埴輪	1トロ周溝 堆土 3層	-	-	-	-	9	不明	5YR5 度	外側: タチハケ→凸縁部ヨコナダ 内側: 橫方向ハナ?→凸縁部ヨコナダ
3	S-15	円筒埴輪	6トロ周溝 堆土 3層	---	0.6	2.0	0.7	10	-	5YR5 度	外側: タチハケ→心棒點の付付→スカシ孔穿孔 内側: 橫方向ナダ
4	S-3	円筒埴輪	2トロ1層	-	-	1.6	-	6	-	7.5YR5 度	外側: タチハケ→凸縁部の付付 内側: 橫方向ナダ→凸縁部ナダ
5	S-9	円筒埴輪	1.5トロ周溝 堆土 3層	-	-	2.1	-	6	-	5YR5 度	外側: タチハケ→凸縁部の付付→スカシ孔穿孔 内側: 橫方向ナダ
6	S-10	円筒埴輪	3.5トロ周溝 堆土 1層	-	-	-	-	約12	-	7.5YR5 度	外側: タチハケ 内側: 橫方向ナダ
7	S-1	羽根形埴輪	1.5トロ1層	-	-	-	-	-	-	7.5YR5 度	外側: ナダ 内側: ナダ
8											
9											
10											

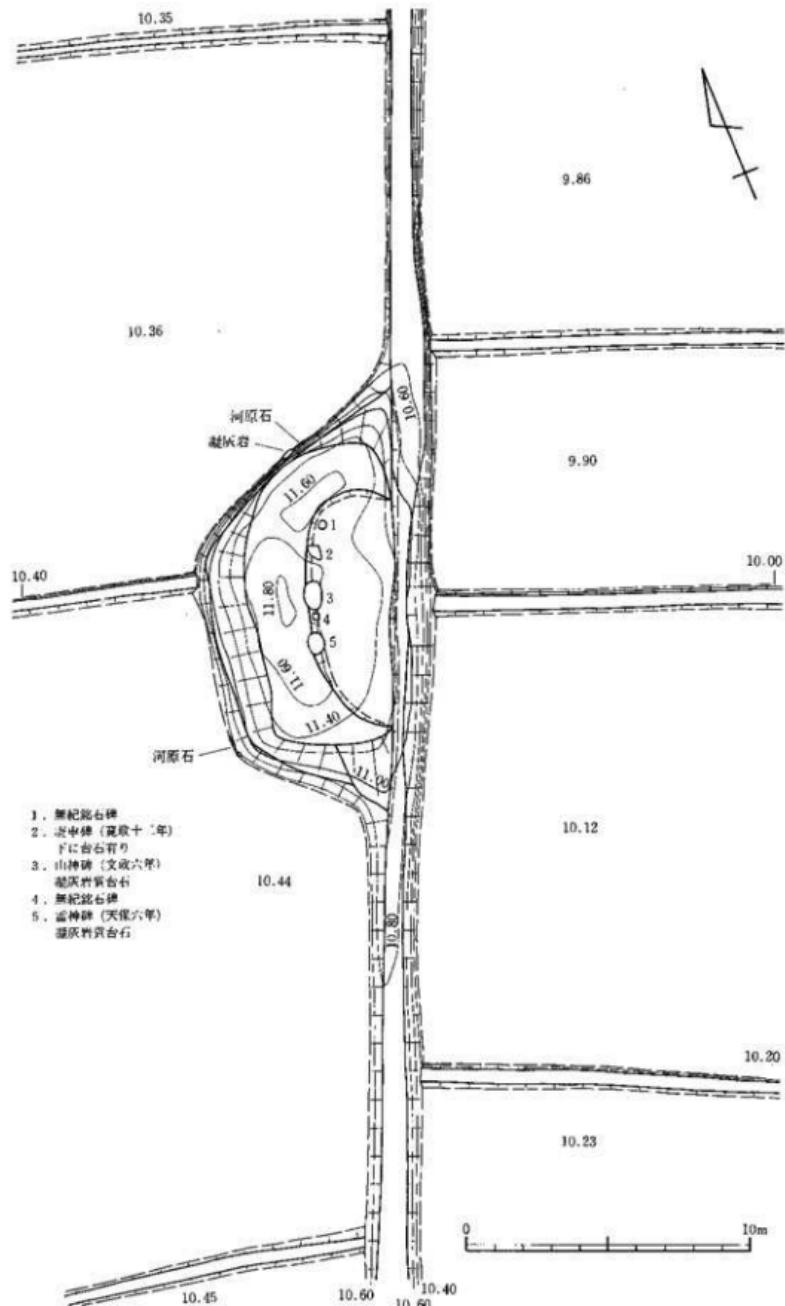
第23図 烏居塚古墳出土遺物 (2)埴輪・埴輪以外の遺物

## 第VII章 王の塙古墳

王の塙古墳は鳥居塙古墳の北西約100mにあり、水田の中に墳丘が一部残存している。墳丘は南北に走る畦畔に切られ、その東側は削平されている。西側も変形を受けているようで、平面形はゆがんだ台形のような形を呈している。円墳であるとすると、現状からは径15~16m程度の規模を考えられるが、地元の人の話では、かつては現状よりも大きかったとのことであり、規模がさらに拡大する可能性もある。墳頂はほぼ平坦で、西側の水田面からの高さは約1.4mを計る。

墳頂には5基の石碑があるが、現在は全て倒れている。そのうち紀年銘のあるものは3基でそれぞれ寛政十二年（1800年）・文政六年（1823年）・天保六年（1835年）である。この紀年銘のある3基には台石があり、そのうち2基のものは凝灰岩と思われる。北側の墳麓には凝灰岩が墳丘積土中から一部露出しており、これらの石材が横穴式石室の石材であった可能性も考えられるが、確証はない。また北側と南西側の墳麓には、小児の頭大程の河原石が水田面の付近に並ぶようである。葺石の可能性もあるが墳形が変形を受けていると考えられる部分にも存在することから、直接古墳に伴うものではなく、後世に付け加えられたものと考えられる。これら以外にも、墳丘の所々に小児の頭大程の河原石が散在している。遺物は今まで知られておらず、埴輪もないようである。

王の塙古墳は変形を受けているものの、沖積平野で墳丘が残存している仙台市内では数少ない古墳の一つであり、また横穴式石室であるとすれば郡山低地では初めての例となるため、今後その実態の究明が期待される。



第24図 王の塙古墳平面図

## 第Ⅷ章 考察

### 1. 墳輪の検討と大野田古墳群の築造年代

今回の調査で古墳に伴うと考えられる遺物は埴輪のみであり、また大野田古墳群全体でも、埴輪以外の遺物はごく少量のため、古墳の築造時期・築造順序等の考察は埴輪によるしかない。したがって、まず円筒埴輪を中心とした埴輪の検討を行いたい。

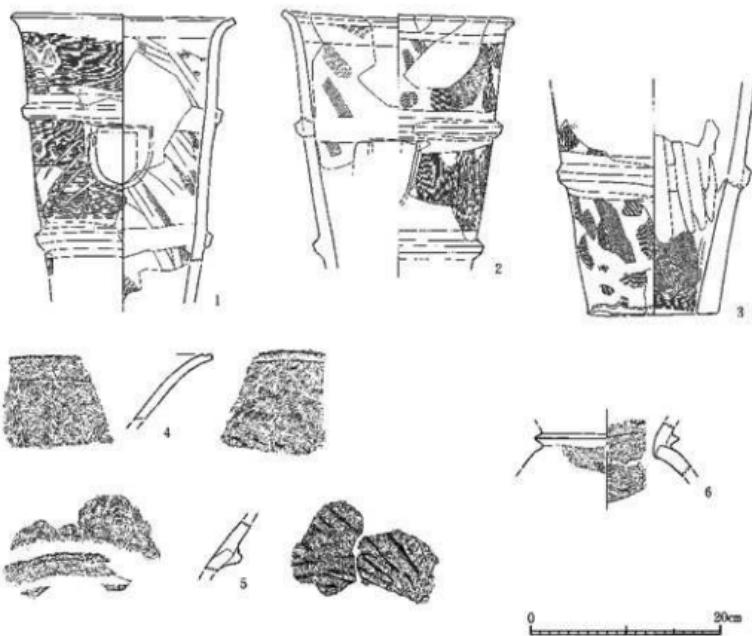
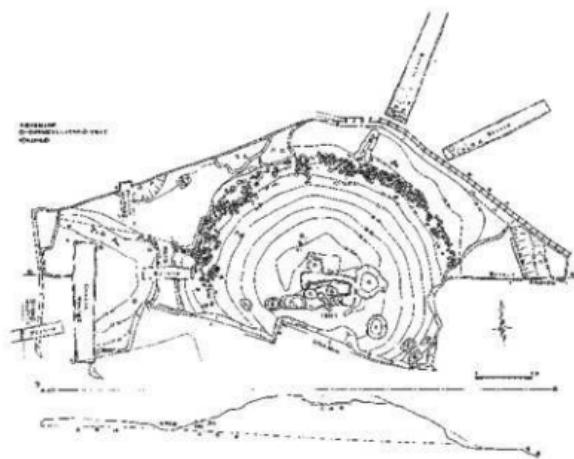
今回の調査で出土した円筒埴輪は、いずれも窓窯焼成により、かつ外面の2次調整が省略された1次調整のみのものであり、川西編年のV期に対比されうるが（川西宏幸：1978・9）それ以上の検討を行うには、全体の特徴を知りうるものがないため困難である。しかし本古墳群とその周辺には、今までに良好な埴輪の資料が蓄積されてきているので、まずそれらの検討を行い、その中に今回出土した埴輪を位置づけていくことにする。

#### 周辺の遺跡出土埴輪の概要

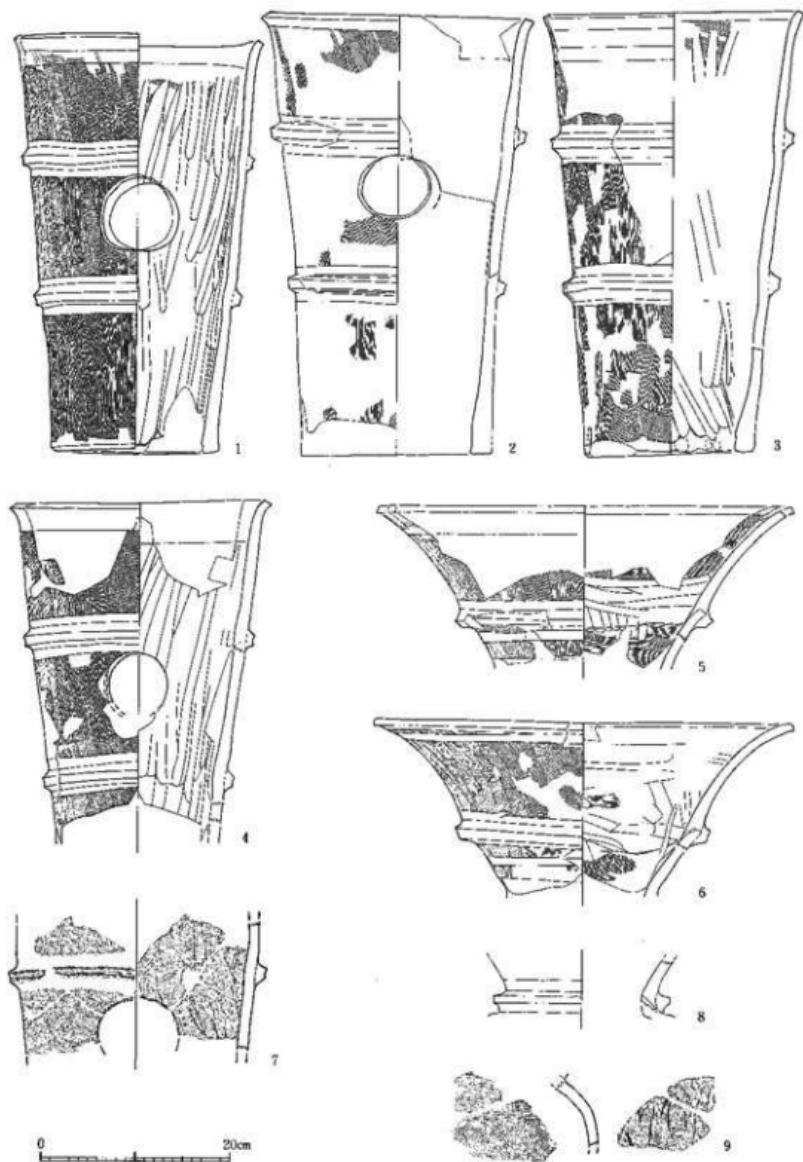
これまでに埴輪がまとめて出土している遺跡としては、裏町古墳・大野田1号墳・大野田2号墳・富沢窓跡がある。まずそのそれぞれの概要を明らかにしておきたい。但し、ここでとりあげる埴輪は、いずれも休止期間を設け、小工程を反復する成形により底部調整を有せず、<sup>註1)</sup>また全て窓窯焼成であるため、この点についてはそれぞれの中では省略し触れないこととする。また、明らかに時期の異なる遺物については省略する。掲載した図は、裏町古墳の埴輪と須恵器、大野田1・2号墳の埴輪は、筆者が再検討した際に作成した図であり、それ以外は報告書からの引用である。

##### 〔裏町古墳〕（第25～27図）

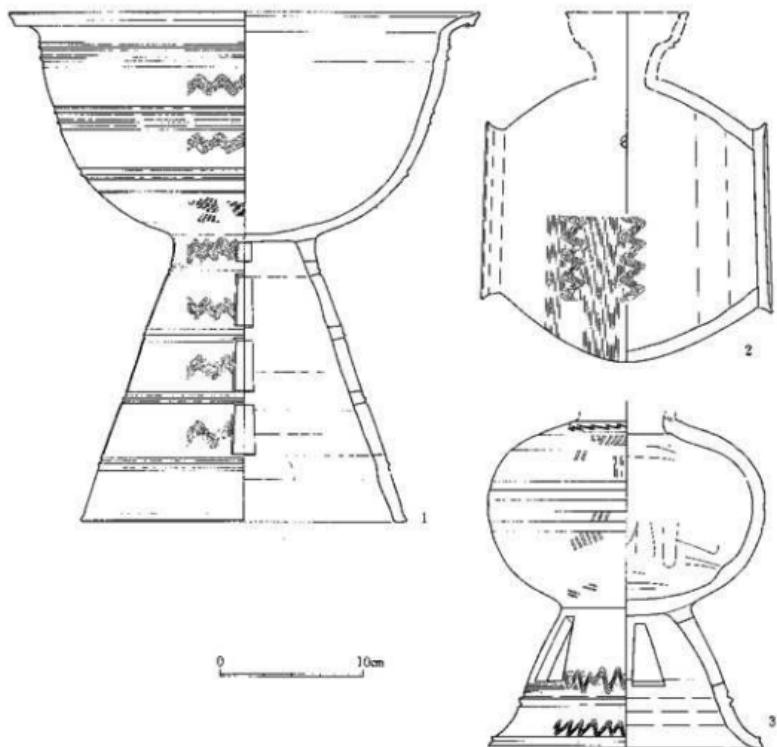
仙台市西多賀一丁目にあった西に前方部を向けた前方後円墳で、家屋新築に伴い1972年と1973年の2次にわたり仙台市教育委員会が発掘調査を行った（伊東他：1974・3）。前方部端と後円部の南側が破壊されていたため、正確な規模は不明であるが主軸長約40mと推定されている。しかし報告書で「周溝」としている部分が地山削り出しによる第一段目であると考えれば主軸長は50mを越え、60m近くなるものと考えられる。<sup>註2)</sup>後円部の高さは東側「周溝」底面から計って約6.0mである。蓋石・埴輪があり、3例だけではあるが振えつけられた状態で埴輪が検出されている。石室は盜掘により半分以上破壊されていたが、木棺を収めていたものと推定され、石室内より乳文鏡（獸帶文鏡）・刀子・細根式片刃鉄鏃が各1点発見された。主体部付近の盜掘痕とその周辺より須恵器が発見されている。埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪があり、形象埴輪は確認されない。これらは調査区の各所から出土しているが、大きくA群とB群に分類される。



第25図 裏町古墳平面図・出土遺物 (1)



第26図 萩町古墳出土遺物 (2)



第27図 裏町古墳出土遺物 (3)

A群は円筒埴輪1・2類と朝顔形埴輪1類からなる(第25図)。円筒埴輪1類(1)と2類(2・3)の相違は、外面調整が1類は2次調整B種ヨコハケを有するのに対し、2類は1次調整タテハケのみであることだけで、他の特徴は一致する。形態は全体の特徴を知りうるものはないが、わずかに外に聞く形で、2条凸帯と考えられる。底径11~13cm、口径24cm前後、器高は約40cm程になると想えられる。口縁部は外反し、一度ヨコナデを行った後に再度強くヨコナデを行うことによって内面に段を作り出す。内面調整は斜方向のハケとナデが観察されるがその前後関係は明確にしえなかった。凸帯内面ナデが内面調整の後に行われる。但し第25図3では、凸帯内面ナデの後に縱方向のナデが行われるが、これは全周の内の約半分にのみ認められるものなので、ここの中に含めておく。外側のスカシ孔の左下方に四本のヘラ描き沈線が認められるものがある。凸帯は上・側・下面とも強くナデられ、側面がわずかに凹む台形を呈す。

スカシ孔は半円形で、幅6.3cm～6.7cmで、第2凸帯の直下に上辺を切りこんでいる。II縁部形状、肩部内面調整においてこれらの円筒埴輪と共に通する朝顔形埴輪が第25図4と6で、5は6の近くから出土し、同一個体と考えられるため、これらを朝顔形埴輪1類とし、円筒埴輪1・2類に伴うものと考える。口縁部は端部近くの内面に段を有し、屈曲部から口縁部にかけての外面調整はタテハケ、内面調整はその下半が横及び斜方向のナデ、上半が横方向のハケである。屈曲部の凸帯は上・側・下面とも強くナデているが、上面は中ほどで強く屈曲する。これは下面を最後に強くナデたためと思われる。頸部突帯は三角形を呈し、頸部の内面調整はヨコナデである。肩部は外側調整がタテハケ、内面調整は斜方向のハケ、ナデが観察される。

B群は円筒埴輪3類と朝顔形埴輪2類からなる（第26図）。円筒埴輪3類（1～4）は、形態、口縁部形状、内面調整、スカシ形状、ヘラ記号において1・2類と異なり、破片資料においてそれらの属性の組み合わせを検討したが、例外ではなく明確に区分しうる。2条凸帯でわずかに外に開く形態をなすが、1・2類より開き方は小さい。底径17～20cm、口径26.5～29cm、器高44～47cmを計る。各段の幅は第1段が16～18cm、第2段が14～16cm、第3段が13cm前後と上にいくに従って小さくなる。II縁部形状はわずかに外反し、特に変化させることなく端部に至る。端面はわずかに凹む。外側調整は1次調整タテハケのみで、2次調整は認められない。内面調整は縦方向のナデを行うが、第3段は斜のハケの後にナデを行っている。この第3段目のハケは、ナデの粗密によって残り方に差があり、ナデのみしか認められないものもあるが（4）、他の特徴が共通するためここに含めている。凸帯内面ナデは一切認められない。凸帯は上・側・下面とも強くナデるM字形、あるいは側面がわずかに凹む台形のものである。スカシ孔は円形で、全て第2凸帯の横ナデの範囲の境付近から穿孔し段の中心には位置せず上方に片寄る。大きさは幅・高ともに7～8cmを計る。ヘラ記号は認められない。口縁部形状、肩部内面調整でこれらの円筒埴輪と共に通するものを朝顔形埴輪2類とした。頸径は16cm前後、口径は44cm前後である。頸部より上の外側調整はタテハケで、肩部はタテハケ後ヨコハケを施している。内面調整は肩部は縦方向ナデ、頸部は横方向ナデの後屈曲部に近い部分は横方向ハケ・屈曲部から口縁部にかけてはナデが主体を占めるもの（5）と横方向ハケが主体を占めるもの（6）とがある。口縁部形状は端部の外側をわずかに下に突出させる以外は円筒埴輪3類と共通する。凸帯は頸部・屈曲部とともに上・側・下面を強くナデるM字形で、頸部凸帯は台形に近い形を呈す。

須恵器には器台・樽形甕・台付壺・横甕・小形の壺（？）・脚部が各1点出土しているが、全て主部部盗掘場とその周辺に散在していた。再実測した器台・樽形甕・台付壺の実測図を第27図に示す。但し器台と樽形甕は破片からの推定復元である。器台（1）は器高35.5cm程、口径33cm程の大型器台である。台部は小破片からの復元であるが、外方へ屈曲する口縁部の下に

凸線によって界された波状文からなる文様帶が2段めぐる。凸線は最下に位置するものが1本である他は2本であり、その上下方を沈線状に下げることで表わしている。体部下半の外面には平行叩きの痕跡を残すが、内面はナデによって消されており當て其の痕跡は認められない。脚部はハの字形に広がるもので、凸線によって界された波状文を施す文様帶が4段にわたってみられ、4方向に方形スカシがあけられる。端部はほぼまっすぐにのびる。ややひずんでいるが焼成は良好である。樽形甕(2)は、体部中央に最大径があり、両端の径のはば2倍に近いビヤ樽形をしている。体部に波状文がめぐらされているが、はっきりしたものではなく描き方は弱い。焼き上がりが悪く部分的には明褐色の土師器に近いところもある。台付壺(3)は、壺部の最大径は中心よりやや上にあり、わずかに肩が張る。肩部付近に波状文をめぐらしているが、樽形甕同様弱いものである。脚部はハの字形に開くもので、端部近くでやや外反する。凸帶をはさんで波状文がめぐらされ、方形のスカシが1段あけられている。凸線はその上下方を沈線状に下げることによって作り出している。焼成は樽形甕のように土師器に近いようなところはないが、全体に甘い。

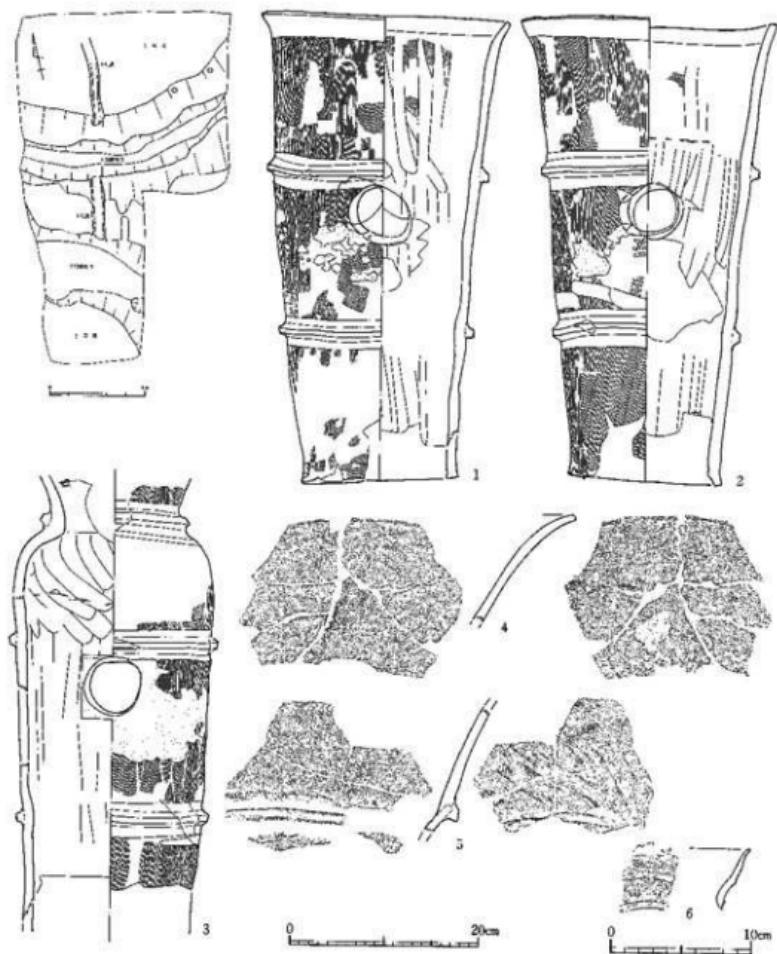
#### 〔大野田1号墳〕 (第28図)

調査経緯、遺構の概要は第I章1にゆずり、ここでは埴輪の内容のみを述べる。

円筒埴輪・朝顔形埴輪があり、形象埴輪は確認されない。円筒埴輪・朝顔形埴輪とともに、大きく異なるものではなく、1つにまとめよう。

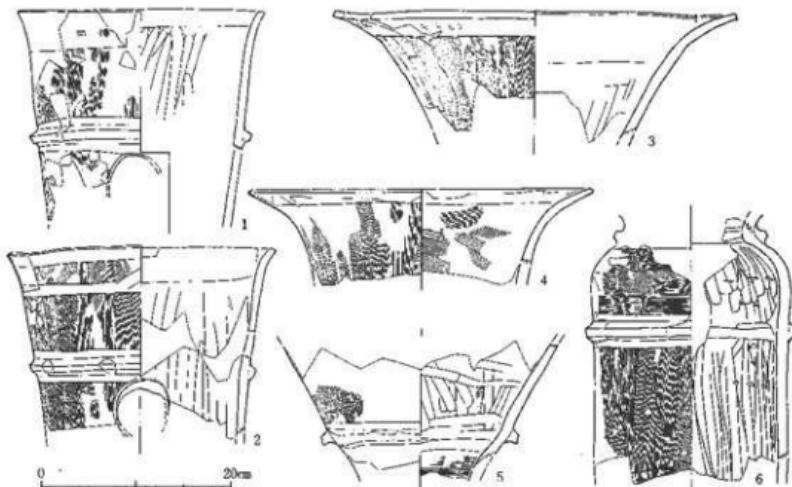
円筒埴輪(1・2)は、わずかに開く形態をなし、凸帶は2条である。底径16.4~18.6cm、口径26.0~30.8cm、器高49.1~52.0cmで、大きくひずんでいるものがある。各段の長さは、凸帶中心で計って16~17cmとほぼ等しい。LII縁部形状はわずかに外反しつつ端部に至り、端面はわずかに凹む。外面調整は1次調整タテハケのみで、2次調整は認められない。内面調整は縦方向のナデであるが、最上段は斜方向のハケのちにナデられている。凸帶内面ナデは一切認められない。凸帶は上・側・下面とも強くナデしており、側面がわずかに凹む台形を呈するが、下面の中ほどが屈曲したり、強く湾曲しており、最終的なナデの際に下面是ナデされていないと思われる。それに対し上面の湾曲は小さく、したがって下に垂れ下がったような形を呈するものが多い。スカシ孔は円形であるが、ひずんだ形のものが多く、その幅は6.0~8.3cm、高さ5.0~7.5cmとバラツキが大きい。第2凸帶のナデの境付近から切りこんでおり、第2段の中で著しく上方に片寄っている。穿孔箇所が対向する位置からずれるものがある。第2凸帶の内面に縦方向の平行する直線からなるヘラ記号があり、その本数は一定せず、同じ本数のものは確認されない。

朝顔形埴輪(3~5)は全体の特徴を知りうるものはないが、各部の破片よりおおよその特徴が知られる。円筒部はほとんど開かない円柱状の形を呈する他は特に円筒埴輪と異なると



第28図 大野田1・2号墳平面図・大野田1号墳出土遺物

ころはない。頸径は13~15cm程となると思われる。口縁部はわずかに外反し、端部はほぼ平坦である。外面調整は肩部がタテハケの後にナデを行う以外はタテハケのみである。内面調整は肩部が斜から縦方向ナデ、頸部は横方向のナデの後屈曲部近くは横方向のハケ、屈曲部より上は横方向のハケの後、横~斜方向のナデを行う。このナデのおよぶ範囲は狭いもの(3)と広



第29図 大野田2号墳出土遺物

いもの（4）がある。凸帯は頸部・屈曲部ともに上・側・下面とも強くナデ、かつ上面の湾曲が弱く、下面が屈曲ないしは湾曲する点で円筒埴輪と同様のものである。

壇丘裾部から須恵器が発見されている。小破片4点（体部片3点・口頭部1点）のみの出土で接合しないが同一個体の可能性が強い。体部片には径1.1cm程の円孔を有するものがあり籠と考えられる。口頭部片（6）は外面の中ほどに弱い棱をもち、その上部に波状文が入るものである。

#### 〔大野田2号墳〕（第28・29図）

調査経緯・遺構の概要については大野田1号墳同様第I章1にゆずり、埴輪の内容のみを記すこととする。

円筒埴輪・朝顔形埴輪があり、形象埴輪は確認されない。円筒埴輪・朝顔形埴輪とともに、一部の小破片を除けば大きく異なるものはなく、1つにまとめうる。

円筒埴輪（第29図1・2）は、中間段の半ばより上しか残存していないが、わずかに開く形をなし、口径は27.0～28.2cmで、最上段の幅は約13cmである。口縁部はわずかに外反して端部に至り、端面はわずかに凹む。内面調整は輥方向のナデで、2の最上段にはそれ以前の段階でなされた斜方向のハケが観察される。凸帯内面ナデはない。凸帯は上・側・下面とも強くナデるもので、台形をなす。スカシ孔は円形で、径は6.0cm程と推定される。1の口縁部内面に斜方向に1本のヘラ描きの沈線が見られる。これ以外に凸帯内面ナデを有する破片と、凸帯上端

幅が0.5cmと凸帯が細い破片が各1点ある。

朝顔形埴輪（第29図3～6）は全体の特徴を知りうるものはないが、円筒部はほとんど開かない形状を呈する。口径は復元値で3が42.5cm、4が36.0cmであるが、4はややひずんでいる。6の頭径は13.8cmを計る。口縁部は外反しつつ端部に至り、端部は外側の棱を下方にやや突出させる。外面調整は肩部がタテハケ後ヨコハケを施す他はタテハケのみである。内面調整は肩部は縦方向ナデ、頭部は横方向ナデ、頭部から屈曲部にかけては横方向のハケで、屈曲部より上はナデが主体を占めるもの（3・5）とハケが主体を占めるもの（4）とがある。6の肩部の下の凸帯の内面には横方向のナデが認められる。頭部、屈曲部の凸帯は接合できるものなく、図は大野田1号墳の例からの復元である。

#### 〔富沢窯跡〕（第30図）

三神峯一丁目に所在する埴輪窯跡で、1基が1974年に古窯跡研究会によって調査されている（渡辺泰伸他：1974・9）。三神峯丘陵の南斜面に立地する地下式無階無段の登窓で、灰原の一部が破壊されていた以外は良好に遺存していた。床面は二面認められ、二次床面は一次床面の奥壁を壊して造られている。一次床面の燃焼部から輝道までの長さは4.4mを計る。

一次・二次床面から埴輪が出土している他、一次床面の燃焼部付近で土師器が8点一括出土し、その近くから石製模造品が出土している。また焼台に使われたと考えられる焼けた河原石が二次床面で検出されている。

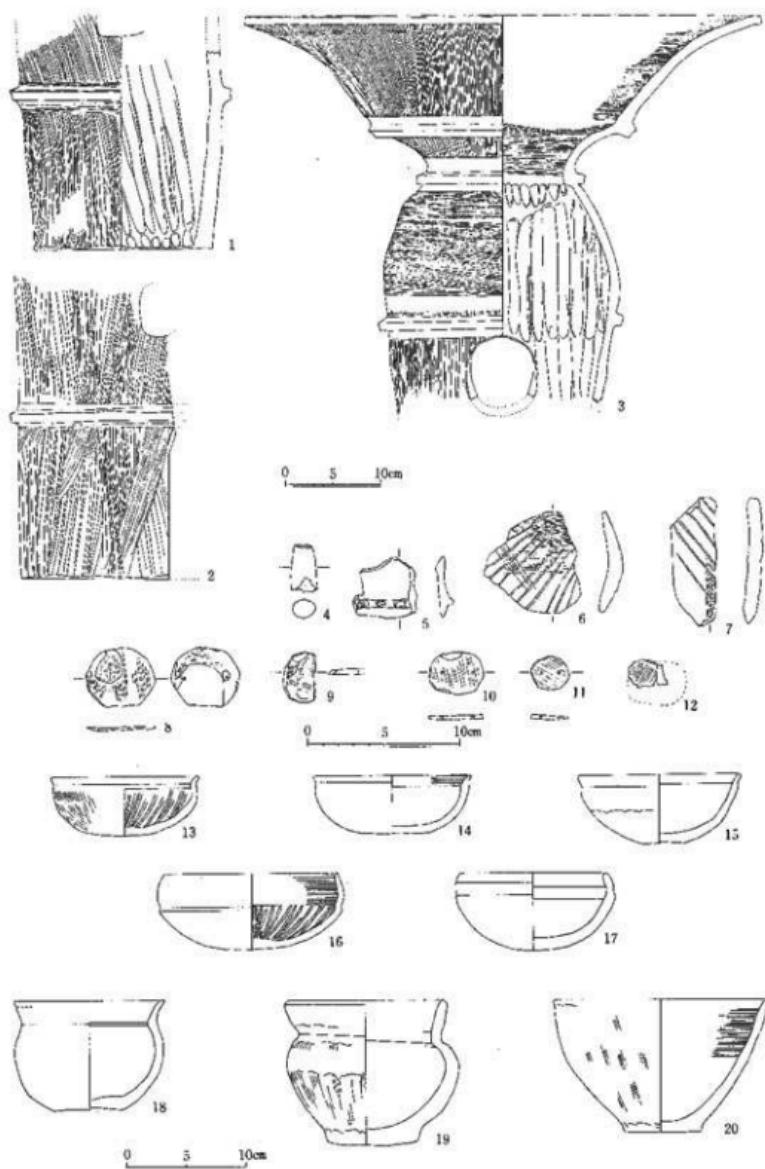
出土埴輪には円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪があり、円筒埴輪2点・朝顔形埴輪1点・形象埴輪4点が図示されている。この他に円筒埴輪の口縁部3点・凸帯部10点・底部6点の断面図が報告されている。以下、報告書で示された図をもとに所見を述べておく。

円筒埴輪（2・3）は中間段半ば以下のもので、底径は20cm程で、第1段の高さは17cm程である。M字形の凸帯をもち、スカシ孔は円形と思われる。外面調整はタテハケ、内面調整は縦方向のナデである。

朝顔形埴輪（第30図1）は2次床面上で一括出土しているもので、中間段半ば以上が残存している。口径は54cm程、頭径15cm程で、外面調整は肩部がタテハケ後ヨコハケ、内面調整は肩部以下は縦方向ナデ、頭部より上は横方向のハケを主体とする。凸帯は側面がわずかに凹む台形で、スカシ孔は円形を呈し、径は7cm程である。

形象埴輪は4点報告されているが、いずれも小破片で、種類を断定できるものはない。

土師器は杯5点、鉢3点が出土している。杯は口縁部が外傾気味に外反するもの（13～15）と、口縁部が直立気味に内湾する有段の杯（16・17）とがあり、前者には、口縁部の内面に稜をもつもの（13・14）と、稜がほとんど見られないもの（15）とがある。鉢には、小形の甕に近い形態のもの（18・19）と、わずかに内湾しつつ大きく聞くもの（20）とがある。いずれも



第30図 富沢墓跡出土遺物

再加熱をうけ表面の調整は不明のものが多いが、13と16の内面には放射状のヘラミガキが観察される。

### 埴輪の編年

埴輪の中でも普遍的なものである円筒埴輪の編年は、川西宏幸氏の「円筒埴輪総論」(1978:9)によって確立してきた。川西氏のV期編年は、埴輪出現期の問題を除けば、その変遷観は多方に支持されている。近年ではこの川西氏の編年に基づき、各地で埴輪編年の細分が行われてきた。しかし、川西氏のV期編年は、円筒埴輪の大きな変遷段階としては有効であるが、それ以上の細分となると更に異なる観点を持ち込むことが必要と思われる。

各地の円筒埴輪を覗見すれば、その形態や技法に大きな違いがあることは容易に知られることであり、それらの相違は埴輪を製作した工人集団の違いを反映していると予想される。このように考えうる埴輪の編年にあたって、その系統を識別していくことの必要性は、森俊二郎氏によって早くから指摘されてきたが(森:1973・1)、この視点はその後十分に継承発展させられていないよう見受けられる。川西氏のV期編年は、系統間の相違をこえて、なおかつ円筒埴輪の製作技法上の大きな変遷段階が存在することを、全国的視野をもって証明したのであって、基本的にはその編年案に依拠することができるが、それ以上の細かい変化をとらえるには、森氏の提示した視点を念頭に置くことが必要であると考える。特に東北地方の埴輪は、形態や技法の違いが大きく、相互の直接的関連をたどれるものが少ない上、隣接する古墳ですら全く異なる形態、技法のものが出土する例すらあるため(辻秀人:1986・4:1986・12)、系統関係の識別という視点は不可欠である。

今回とりあげた郡山低地周辺の埴輪は、東北地方では数少ない相互の関連をたどれる資料であり、上述の視点をもって、これらの編年を試みてみたい。そのための資料操作の方法の概略(註6)を以下に述べる。

- ①各古墳出土の円筒埴輪、朝顔形埴輪を、形態、技法の諸属性の組み合わせによって分類し(タイプの設定)、1古墳内における埴輪のセット関係を明らかにする。
- ②各古墳の各タイプの埴輪を相互に比較し、比較された両者の間で相違点がある場合、それらの相違点が時間的変化として認識できるか否かを検討する。すなわち、厳密に組列が組みえるもののみを時間的な変化と考え、矛盾するものはその組列からは除外する。これによって組み立てられた組列は系列と呼ぶことにする。
- ③組み立てられた系列を、共伴資料がある場合、その資料の年代観をもって検証する。形象埴輪があれば、その内容・変遷観と矛盾しないか検討する。また、窯跡出土資料がある場合には、その内容と照らし合わせて検証する。

④このような検討の結果、1つ、あるいは複数の系列の埴輪が同一工人工集団によって製作されたと考えられる場合には、それを工人工集団の系統と呼ぶこととする。

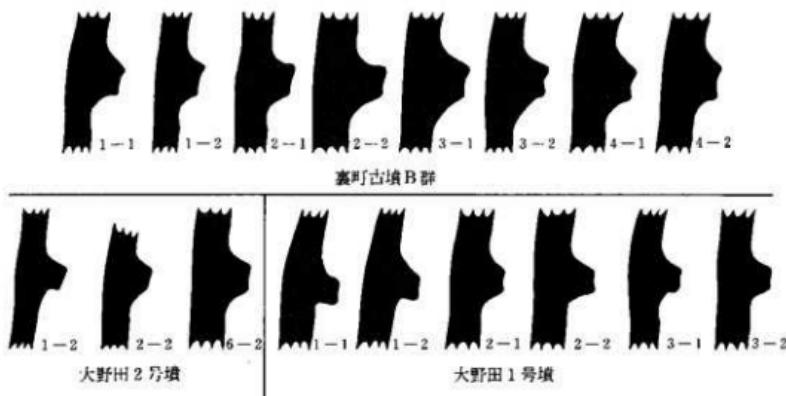
各遺跡の埴輪の内容については既に述べたので、それらの比較検討を次に行う。

#### [富沢窯跡系列]

裏町古墳の埴輪はA群とB群に大別できたが、円筒埴輪では全体の形態、口縁部形状、内面調整、スカシ孔において相違点が見られ、朝顔形埴輪ではさらに頸部、屈曲部の凸帯に相違がある。このように一古墳に複数のタイプの埴輪が見られる場合、それを追加樹立の結果として理解しようとする考え方も提示されているが（若松良一：1382・3）、裏町古墳の場合には追加樹立があったと考えられる根拠はない。したがってA群とB群は、両者ともに古墳築造時に樹立されたと考えられる。それゆえ、この両者を同一の系列の中に置くことはできず、別個の系列に属せしめるべきである。

大野田1号墳と大野田2号墳の円筒埴輪を比較すると、大野田2号墳の円筒埴輪には全体が知れるものはないが、両者の相違は、凸帯の形状がわずかに異なることと、最上段の幅が大野田1号墳の方が大きい以外は、他の特徴は一致するため、大きさは1つにまとめよう。そこで最初に、全体の特徴が判明する大野田1号墳の円筒埴輪をもって、裏町古墳出土の円筒埴輪と比較すると、全体の形態、口縁部形状、内面調整、スカシ孔の形状と穿孔位置においてB群のものと強い類似性が認められ、逆にA群とは大きく異なる。大野田1号墳の円筒埴輪と裏町古墳B群の円筒埴輪とを詳細に比べると、両者の相違点は大野田1号墳のものの方が、底径が小さく各段の幅が一定になり、したがって全体に細長くなること、スカシ孔の径が小さくなるとともに穿孔方法が粗雑になり、きれいな円形を呈さなくなること、凸帯が細くなり、端正なM字形から下方に重ね下がったような形状になることがあげられる。このスカシ孔の小形化と穿孔方法の粗雑化、凸帯の退化という変化は、いずれも円筒埴輪製作技法の粗雑化・簡略化という時間的変化として説明可能なもので、最上段の幅が大きくなることも、V期の円筒埴輪がしだいに細長くなるという一般的な変遷観によって理解しえる。朝顔形埴輪を見ても、屈曲部の凸帯が裏町古墳B群のものは端正なM字形を呈するのに対し、大野田1号墳のものは円筒埴輪同様下方に重ね下がったような形へと退化している。以上の検討より、裏町古墳出土埴輪B群と大野田1・2号墳出土埴輪は、前者から後者へと移り変わる同一の系列に置くことができる。

次に大野田1号墳と2号墳との間で更に検討するならば、朝顔形埴輪の肩部の外側調整が大野田2号墳のものは2次調整のヨコハケを有するのに対し、大野田1号墳のものはナデとなっている。先に述べた円筒埴輪の最上段の幅が、大野田2号墳のものの方が小さいこととあわせて、大野田2号墳の埴輪に見られるこの特徴が、裏町古墳出土埴輪B群のものと共通することにより、大野田2号墳の埴輪を、裏町古墳出土埴輪B群と大野田1号墳の埴輪との間に位置づ



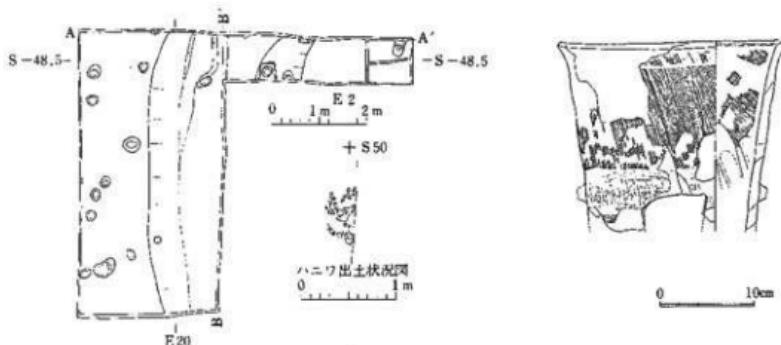
第31図 凸帯断面集成図

(縮尺1/2 番号は第26・28・29図の出土物番号と第1・第2凸帯の別を表わす)

けることができる。さらに凸帯の形状を見ると、大野田1号墳の埴輪の方が、下面の屈曲が大きいものが多いことを付け加えられるが、第31図に示したように、一古墳内のバラエティーが大きく、裏町古墳B群のものと大野田1・2号墳との間の差は比較的明瞭であるが、大野田1号墳と2号墳の間では明瞭に区別することは困難である。これ以外には大野田2号墳の朝顔形埴輪に凸帯内面ナデを有するものがあるが、次に検討する富沢窯跡出土埴輪の中に、凸帯内面ナデを有するものと無いものが混在するため、同一系列内の手法上のバラエティーとして考えておきたい。以上の検討より、裏町古墳出土埴輪B群→大野田2号墳出土埴輪→大野田1号墳出土埴輪という系列が組み立てられる。

富沢窯跡出土埴輪は、この裏町古墳出土埴輪B群から続く系列のものに類似する。中でも第30図1・2は、凸帯の形状から裏町古墳出土埴輪B群に類似し、他方第30図3は、肩部の高さにやや異なる点はあるものの、大野田2号墳出土埴輪に類似する。この朝顔形埴輪は二次床面出土であり、当窯跡出土遺物の中では新しい時期のものと判断できる。

このように富沢窯跡出土埴輪の内容は、上に述べた裏町古墳出土埴輪B群から続く系列に矛盾することなく、それを裏付けるものである。よってこの系列を富沢窯跡系列と呼ぶこととする。



第32図 五反田古墳平面図・出土遺物

#### 〔五反田古墳系列〕

大野田古墳群内では、富沢窯跡系列とは様相を異にする埴輪が五反田古墳から出土している(第32図)。五反田古墳の調査経緯、遺構の概要は第1章1にゆずることとする。出土埴輪は円筒埴輪のみが確認されており、第32図に示したもの以外は破片である。第32図に示したものは周溝底面付近の埋土最下層上面から一括出土したものである(田中則和他:1981・12)。口径25cm程、最上段の幅16cm程で、口縁部はわずかに外反し内面に段を作り出す。内面調整は斜方向のハケ・ナデで、凸帯内面ナデは確認できない。スカシ孔は半円形になると思われ、幅は7cm程である。スカシ孔の穿口方法は、上辺と右側辺は直交させるが、左側辺は下から上へ切り込み、上辺と接する所で強く曲げることでつないでいる。凸帯は剥落しており、一括資料内にも該当する破片がなく、不明である。

この五反田古墳出土埴輪は、口縁部形状・内面調整・スカシ孔形状において裏町古墳出土埴輪A群と類似し、他方富沢窯跡系列の中に位置づけることはできない。この裏町古墳出土埴輪A群と五反田古墳出土埴輪の間のスカシ孔形状・穿孔方法の粗雑化・最上段の長大化という相違は、前者から後者への時間的変化として理解でき、両者を同一系列に置くことができる。よってこの系列を五反田古墳系列と呼ぶこととする。

この五反田古墳系列としたものは、詳細に検討してないので確実ではないが、富沢窯跡からは出土していないようなので、一応富沢窯跡系列としたものとは、その製作にあたった工人集団を異にしていたと考えておきたい。

### [共伴資料による年代的位置づけ]

富沢窯跡系列とした埴輪には、裏町古墳、富沢窯跡、大野田1号墳において共伴資料があるので、次にそれらをとりあげ、埴輪の編年を検証するとともに、年代的位置づけを試みたい。

裏町古墳からは乳文鏡・刀子・鉄鎌・須恵器が出土しているが、須恵器以外の3点については、詳細にその時期を検討することは困難であるので、まず須恵器の検討から行いたい。須恵器で現在検討可能なものは、器台・櫛型竈・台付壺・横蓋の4点である。このうち器台・櫛形竈<sup>註8)</sup>・台付壺に関しては、これまでTK208型式の段階のものとの位置づけがなされてきたが、さらにいくつかの検討すべき点があるように思われる所以、次に各個体ごとに検討してみたい。

器台は、脚のスカシが4方向という点を除けば、台部の深さ、脚部の広がりと脚端部の形態・口縁部付近の外方への屈曲は、高藏208号窯出土品（田辺昭三：1966・4）や中村浩氏の編年<sup>註9)</sup>のI型式3段のもの（中村浩：1978・3）に類似する。櫛型竈は田辺氏によれば「高藏208型式まで存続し、その後急に姿を消す」とされており（田辺昭三：1981・7）、中村氏によればI型式4段階の窯からは全く検出されないとしている。台付壺は本例のような類例は答見では見い出しえていないが、脚端部の形態から陶邑編年II期（II型式）に多出する台付高口壺とは明確に異なる。あるいは有蓋台付壺になるのではないかとも考えうるが、頸部径が小さいこと、脚のスカシが1段しかないことから決め難い。ここでは波状文と凸線が器台・櫛型竈と類似するため、一応これらに伴うものと考えておきたい。したがって器台・櫛型竈からは、TK208型式の段階のものと考えることができる。しかしここで問題になるのは、本例の器台が台部・脚部とも文様帶の中には波状文を1条めぐらすだけである点である。上記した形態が類似する器台の諸例には、複数の波状文を施すものを文様帶の中に含むのが通例であり、中村氏によれば、一条の波状文によって構成されるのが大半を占めるのはI型式4段階になってからであるとされている。しかし高藏23号窯出土品やI型式4段階とされる器台とは、台部の形態などにおいて一致しない。一方櫛型竈・台付壺とともに波状文がきわめて細く、やや粗雑な印象を受ける。本例はその中に生焼けのものがあることなどから地方窯製品の可能性が指摘されており（田辺昭三：1981・7）、これらの点も含めて、当地方出土の須恵器をより詳細に検討していく必要を感じる。ここでは器形等の特徴からTK208型式の段階のものと考え、その中でもより後出的な様相を有していることに注意しておきたい。残る横蓋であるが、横蓋は田辺氏によればTK10型式から出現するとされていることから（田辺昭三：1981・7）、器台などとは大きく時期がずれ、明らかに複数時期のものが混在している。これらは全て上部部の盃掘壙とその周辺からバラバラに破碎された状態で出土しており、しかもこの盃掘壙からは、ロクロ整形で内面を黒色処理した平安時代の土師器壙も出土しており、須恵器の出土状態から共伴関係を検討することは不可能である。しかし、裏町古墳出土埴輪より後出すると考えられる埴輪を

出土した富沢窯跡 2 次床面から一括出土した土師器（第30図13～20）は、つぎに検討するよう I 期後半の須恵器に伴う土師器であり、横愛のTK10型式以後という編年觀とは大きく齟齬をきたす。よって裏町古墳の埴輪には、器台・樽形龜・台付壺の一群が伴うと考えうる。

しかし、ここで問題となるのは、川西編年では、V 期の開始は須恵器では TK23型式の時期以後であるとされていることである（川西宏幸：1978・9）。裏町古墳出土埴輪は A 群の一部に 2 次調整の B 種ヨコハケを有し IV 期の段階に対応するものがある以外は、1 次調整のみの V 期段階に対応するものからなっている。したがって、これらの埴輪に伴う須恵器を TK208 型式の段階のものとした場合、川西氏の論とずれる点が出てくるため、次にこの点について詳しく検討してみたい。川西氏は IV 期と V 期の実年代比定に際し須恵器を使用しており、畿内では IV 期は TK216 型式まで共伴例があり、V 期は TK23 型式から共伴例があるとして、V 期の開始を TK23 型式の時期に置いている。この両者の間に位置づけられる TK208 型式については、幾内については言及していないが、そこで検討結果をもとに全国の埴輪を検討する中で、三重県神前山 1 号墳から IV 期の埴輪に TK208 型式の須恵器が伴うとしている（川西：1978・9）。しかし川西氏が IV 期とした古墳の中には 2 次調整を欠く埴輪を含む例もあり、2 次調整の省略は画一的ではなかったと思われる。また、神前山 1 号墳の円筒埴輪には 2 次調整を欠くものが少なからず含まれている（下村登良男：1973・3）。埼玉県では「須恵器でいえば TK208 型式から TK23 型式の間」にヨコハケが消滅すると指摘されている（坂本和俊：1985・11）ように、2 次調整の省略の開始時期を TK208 型式の時期に逆にぼらせることは可能である。

以上の検討より裏町古墳の埴輪と TK208 型式という須恵器の編年觀は特に矛盾することができないと考えることができる。その実年代は、田辺昭三氏の須恵器の実年代觀に依拠すれば、5 世紀後葉とすることができよう（田辺昭三：1981・7）。また TK208 型式の時期という裏町古墳出土埴輪の年代觀が、2 次調整の省略の開始の上限に近いため、五反田古墳、大野田 1 号墳・2 号墳の埴輪を、裏町古墳より先行させることは不可能で、それに続くとした前述の型式学的操作の結果と矛盾しない。

註10)

富沢窯跡 2 次床面出土土師器は、宮城県の編年では南小泉式 C 段階とされている（丹羽茂：1984・3）。丹羽茂氏によって同じ C 段階とされている宮城県柴田郡大河原町台ノ山遺跡 5 号住居跡出土の一括資料には須恵器壺（？）が含まれ（阿部・千葉：1980・1）、丹羽氏はこの須恵器壺、裏町古墳出土須恵器ともに TK208 型式の時期のもので、富沢窯跡は裏町古墳に埴輪を供給したとの認識のもとに、C 段階を 5 世紀後葉と考えている。しかし富沢窯跡出土土師器は、裏町古墳出土埴輪より後出的な様相を有する埴輪を出土した 2 次床面に伴うもので、台ノ山遺跡 5 号住居出土須恵器が体部の破片のみであることもあり、C 段階を TK208 型式の時期としそうか否かは更に検討が必要であろう。そこで該期の資料が比較的豊富で、須恵器との

共伴例も多い福島県の成果との対比を試みたい。福島県の該期の土師器編年は、山内幹夫氏（1980・3）、高橋信一氏（1983・3）による論考が発表されている。両氏の編年のうち、南小泉式後半段階（辻秀人：1980・4）に相当すると考えられる部分を抜き出せば、以下のようになる。

#### 山内編年（南小泉式第2段階）

岩切鴻ノ巣遺跡1・2号住資料、同包含層資料の一部、矢ノ口遺跡資料 → 西原遺跡第1群土器、上高野遺跡2号住資料 → 板倉前B遺跡第1群土器

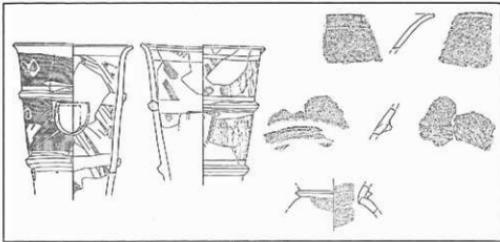
#### 高橋編年

第Ⅲ段階（下入ノ内遺跡1号住資料、西原遺跡第1群土器、大久保遺跡1号住資料） → 第Ⅳ段階（上高野遺跡2号住資料） → 第V段階（板倉前B遺跡第1群土器）

両氏の編年案は必ずしも対応するものではないが、大まかな変遷觀は一致している。これらの中で須恵器が伴っている例がいくつかある。下入ノ内遺跡1号住居跡では壺・蓋・把手付瓶・甕が出土しており、「TK 216の時期か、TK 216の特徴を強く残したTK 208の初期の段階のもの」とされている（佐藤博重他：1980・3）。上高野遺跡2号住居跡からは壺が出土し、<sup>註11)</sup>「TK 216窯跡出土資料に近い」とされている（山内幹男他：1980・3）。板倉前B遺跡では、2号住居跡から甕、3号住居跡から蓋が出土し、いずれも第I型式4段階のものに類似するとされている（高木和夫・大越道正：1979・3）。これら以外には、泉崎村の原山1号墳では川西編年V期の埴輪に伴ってTK 23型式のものに類似する無蓋高壺が出土しており（鈴木啓・辻秀人他：1982・3）、これに伴う土師器は、板倉前B遺跡第1群土器A I類に最もよく類似するようである。このように上高野遺跡例はやや整合しないが、土師器の変遷觀と共伴する須恵器との対応関係は、既に指摘されているように安定したものとなっている（辻秀人：1980・4）。富沢窯跡資料をこれらの福島県出土資料と比べると、比較しえるのが壺の一部のみであるため不安定であることは否めないが、上高野遺跡二次住居出土土師器に最も類似すると思われる。上高野遺跡2号住居跡出土の須恵器はやや問題が残るが、上記の変遷觀からすればTK 208型式の時期を中心とした年代が想定でき、それより下るとしても、さほど大きく下るものとは考え難い。したがって裏町古墳と富沢窯跡二次床面との年代差は、せいぜい須恵器1型式ほどのものと考えられる。

大野田1号墳の墳丘裾部付近で出土した須恵器甕について報告者は、「口縁部から頸部までが短く、最大径が体部に求められそうである。器形の特徴から見て、仙台市の大蓮寺窯跡・陶邑の1型式2～3段階のものに類似する」としている。器形の特徴は指摘されるとおりであるが、大蓮寺窯跡出土品も陶邑1型式2～3段階のものも、いずれも口縁部の屈曲部に明瞭な棱や凸線を有し（中村浩：1978・3：1985・5）、本例が不明瞭な棱しかないこととは対応しな

五反田古墳系列



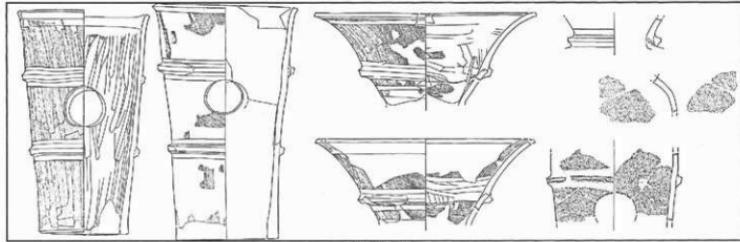
表町古墳A群



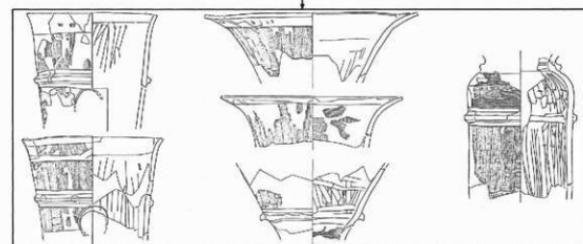
五反田古墳

注) 縦横の縮尺は約8分の1

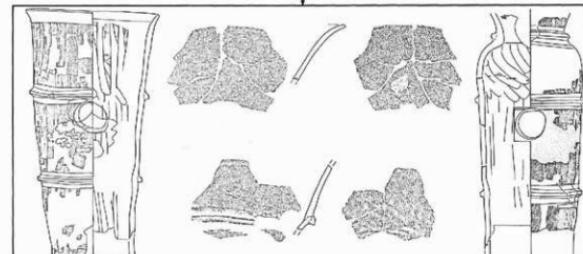
富沢窯跡系列



表町古墳B群

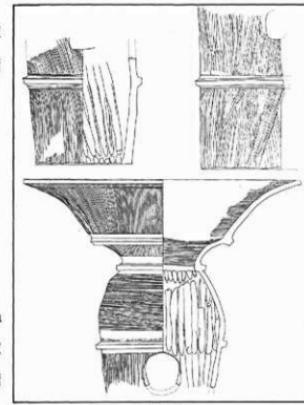


大野田2号墳



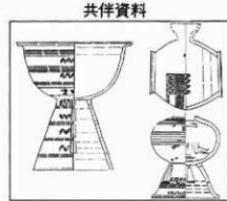
大野田1号墳  
第33図 郡山低地の埴輪墓年表

1段階

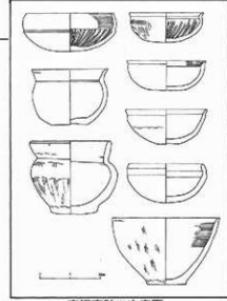


富沢窯跡

2a段階



表町古墳



富沢窯跡二次床面

2b段階



大野田1号墳

い。口頸部が長大化していないことを重視すれば、陶邑編年Ⅰ期（Ⅰ型式）の範疇に入ると考えうるが、この場合も陶邑出土品では屈曲部には明瞭な棱や凸線を有しており、対比しえない。小破片のみであるということをあわせて、本例で大野田1号墳の年代を考えることには慎重であるべきであろう。ただ、Ⅰ期（Ⅰ型式）の範囲内か、それより下るとても、さほど大きく隔たるものではないだろう。

以上の検討より前述した埴輪編年は、共伴資料から見ても矛盾せず、その変遷の最初に位置づけられる裏町古墳出土埴輪は須恵器のTK208型式の時期であり、5世紀後葉と考えられた。残された問題は、前述した埴輪の変遷の下限の年代であるが、これは共伴資料からは確定できなかった。したがって埴輪の特徴を他地域の埴輪と対比させることで見通しを得ておきたい。富沢窯跡系列で最も新しい段階に位置づけられた大野田1号墳の円筒埴輪は、休止期間を設け小工程を繰り返す製作技法によっている。ところで円筒埴輪の製作技法は、V期の開始、あるいはその間に、小工程をくり返すものから一撃に巻き上げるものへと大きく変化することが指摘されている（川西宏幸：1978・9）。この技法の出現は畿内ではV期の開始とともに、関東では6世紀中葉ごろには開始されていると考えられる。大野田1号墳の円筒埴輪が、関東の6世紀代の埴輪に多く見られる底径の矮小化、第1段の長大化、凸帯の低平化という特徴のいずれも有していないこともあわせて考えるならば、大野田1号墳の円筒埴輪は少くとも6世紀中葉までは降らない可能性が高い。富沢窯跡出土土師器の検討から、裏町古墳と富沢窯跡2次床面との年代差が、せいぜい須恵器1型式ほどであると考えられたことから類推すると、大野田1号墳の年代も、さほど下るものとは考えられないであろう。五反田古墳系列では、五反田古墳に共伴資料がなく、埴輪も全体の特徴が知りうるもののがなく決定し難いが、一応ここでは、大野田1号墳より大きく下ることはないと考えておきたい。

### [小結]

これまで検討してきたように、埴輪の系列と共伴資料の年代観は矛盾することはない。そこで埴輪の系列としたものが妥当なものであると考えて、次に各系列の変遷を再度整理しておくとともに、変遷の段階を設定したい。

五反田古墳系列は、裏町古墳出土埴輪A群から五反田古墳出土埴輪へと変遷し、五反田古墳例では、スカシ孔の形状と穿孔方法が粗雑化し、最上段の幅が大きくなっている。この系列のものは類例が少いため変遷段階の設定は控えておく。

富沢窯跡系列は、裏町古墳出土埴輪B群から大野田2号墳出土埴輪へ、さらに大野田1号墳出土埴輪へと変遷する。裏町古墳出土埴輪B群はスカシ孔はきれいな円形を呈し、凸帯は端正なM字形を呈するなど、全体に丹念に作られていることを特徴とするもので、これを富沢窯跡系列1段階とする。裏町古墳例以外には富沢窯跡出土埴輪の一部がある。大野田2号墳・1号

墳の円筒埴輪は、スカシ孔形状が不整なものが多くなり、大きさも小さくなる。また凸帯も下面の屈曲が大きくなり幅も細くなる。このように円筒埴輪の製作が粗雑化したものを2段階とする。2段階はさらに2a・2bに細分される。2a段階は大野田2号墳出土埴輪で、朝顔形埴輪の肩部外面にヨコハケを有すという特徴をもつ。富沢窯跡二次床面出土遺物の一部もここに含まれる。2b段階は大野田1号墳出土埴輪で、円筒埴輪の最上段が長くなり、凸帯は下面が大きく屈曲するものが多くなるとともに、朝顔形埴輪の肩部外面調整がナデとなるという特徴を有するものである。富沢窯跡系統1段階は、須恵器のTK208型式の時期で5世紀後葉と考えられ、2b段階は6世紀中葉以前におさまると考えられる。

## 大野田古墳群の築造年代

これまで検討してきた埴輪編年を基準として、大野田古墳群の築造年代を推定する。埴輪は古墳築造に伴い樹立されると考えられるもので、ここで問題となる中小古墳の場合、埴輪の年代観が古墳の築造年代を示すと考えて間違いないであろう。

### [春日社古墳]

春日社古墳出土埴輪は、円筒埴輪は富沢窯跡系統2段階のものと基本的に一致する。但し、かなりのものに凸帯内面ナデが認められるが、前記したように、これは同系列内の技法上のバラエティーとして理解できるものである。朝顔形埴輪には肩部外面調整にヨコハケが認められることより、2a段階のものとすることが可能である。形象埴輪は比較しうる資料が他にないが、馬形埴輪の特徴については他地方のものと対比させることで大まかな見通しを得ることができる。馬形埴輪については、近年、製作技法の分析からその変遷をとらえる試みがなされている（井上裕一：1985、12・福村繁：1986、8）、本例は製作技術は観察しえないので、タテガミの形状に特色を見い出すことができる。本例のタテガミは、角状タテガミと板状タテガミを別々に表現したもので、井上氏の分類ではC類となる。これは千葉県山王街道350古墳の例より5世紀後葉に見られ、地域によっては6世紀末まで見られるとされている（井上裕一：1985・12）。したがってこれは富沢窯跡系統2a段階としたことと矛盾しない。

春日社古墳の埴輪の出土状況は、必ずしも良好なものではないが、春日社古墳1・4トレンチでは周溝の外側からはほとんど埴輪を出土しないので、埴丘部を中心に大量に出土した埴輪は当古墳に伴うものと考えて間違いないであろう。よって春日社古墳の築造年代は、富沢窯跡系統2a段階の時期と考えられる。

### [大野田3号墳]

大野田3号墳出土の円筒埴輪は、富沢窯跡系統2段階のものと基本的に一致する。但し最上段の内面調整が、横方向のナデの後に縦方向のナデを行っている点が異なる。しかし、縦方向

のナデの後には、口縁部ヨコナデ以外の調整を行なわないという点では共通するため、同一系列内のバラエティーとして理解しておきたい。2段階の中での細別は朝顔形埴輪が出土していないため不明であるが、最上段の幅が約16cmと長くなっていることより、少くとも大野田2号墳よりは後のものであると考えられる。

本古墳では周溝内から一括して埴輪が出土しており、この埴輪が古墳に伴うものと考えられる。よって大野田2号墳の築造年代は、富沢窯跡系列2段階の時期で、その中でも大野田2号墳よりは後のものと考えうる。

#### [鳥居塚古墳]

鳥居塚古墳出土の埴輪は、第22図1・2・4、第23図1~3・6については富沢窯跡系列2段階のものに基本的に一致する。しかし、凸帯内面ナデを有するものがあることと、第22図1の内面調整が横方向のハケの後に縱方向のナデを行うが、このハケの残り方が顯著である点が異なるが、ハケ後ナデという調整順序には変化することがないので、これも富沢窯跡系列のものと考えておきたい。2段階の中での細かい時期は不明である。残る第22図3、第23図4・5は、他のものに比して器厚が厚い点において特異である。これらについては基本的な特徴は富沢窯跡系列のものに類似するが、資料も少いため断定は避けておきたい。

富沢窯跡系列2段階のものとした第22図1・2などは、周溝内縁付近の墳丘面から出土しており、当古墳に伴うものと考えうる。よって鳥居塚古墳の築造年代は富沢窯跡系列2段階の時期と考えられる。

#### [大野田1・2号墳、五反田古墳]

これらの古墳からは、いずれも周溝内から一括して、しかもかなり原形を保って埴輪が出土しており、これらの埴輪が古墳に伴うものであると考えうる。したがって大野田1号墳は富沢窯跡系列2b段階、大野田2号墳は富沢窯跡系列2a段階の時期に、五反田古墳は裏町古墳よりもの時期に築造されたと考えうる。

#### [大野田3号墳、王の塙古墳、五反田石棺墓、五反田木棺墓]

これらは遺物がないため時期を決める材料がないが、東北地方では同一古墳群中では埴輪を有する古墳が最も古く、その後に埴輪をもたない古墳が築造されていく例が多いことから、これらの埴輪を有する古墳より後の時期のものである可能性を考えたい。

#### [小結]

以上の検討より大野田古墳群の中で埴輪を有する古墳は、5基が富沢窯跡系列2段階のもので、五反田古墳も裏町古墳よりも後で、これらと大きく異なる時期ではないと思われる。よって大野田古墳群は埴輪の年代観から5世紀末頃に築造を開始し、現在知られている10基中6基が、下ても6世紀中葉より前という比較的短い間に次々と築造されたものと考えられる。

## 2. 仙台市内出土の埴輪

今回報告分も合わせて、仙台市内でこれまでに埴輪が出土しているのは計22遺跡ある。これは東北地方の中では、最も分布密度の高い地域となっている。ここではこれまでに知られている資料を紹介し、その特徴について若干の指摘を行うとともに、仙台市域の埴輪の全体的な様相への見通しを述べておきたい。なお掲載した図は、岩切小学校東側地点と星歎末遺跡以外は全て報告書からの引用である。

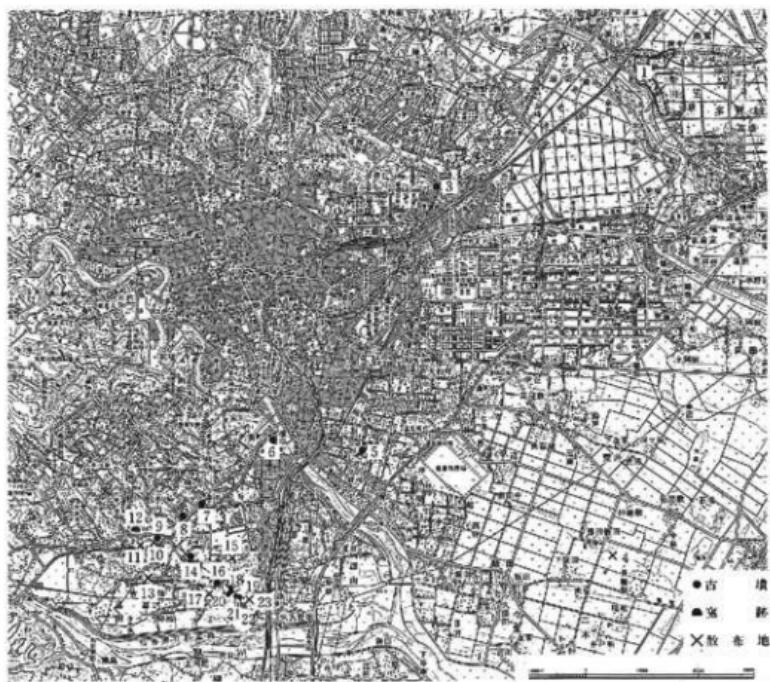
### [1. 新田遺跡、県登録番号18012]

多賀城市新田及び西後に所在する。行政区画では多賀城市内であるが、次に述べる岩切小学校東側地点に近いためとりあげる。七北田川左岸の自然堤防上に立地し、1964年の小笠原好彦氏らの調査では南小泉式期の住居跡が発見されている（小笠原好彦他：1968・10）。円筒埴輪が出土していると伝えられるが、詳細は不明で、出土地点も特定できていない。

### [2. 岩切小学校東側地点] (第35図)

岩切小学校が所蔵している円筒埴輪である。仙台市文化財分布地図では、岩切地区で埴輪を出土しているのは岩切烟中遺跡のみとなっているが、この埴輪を指しているとすると出土地は対応しない。この埴輪は裏町古墳の報告書で、伝聞として岩切中校庭遺跡から埴輪が出土していると紹介されたものにあたると思われる（伊東信雄他：1974・3）。また仙台市教育委員会の行った鴻ノ巣遺跡の報告に際してこの埴輪の概要が紹介されているが、そこでは岩切小学校校庭より出土したと言われているとしている（青沼一民・長島栄一：1982・12）。今回の資料化に際する聞きとりでは、岩切小学校の東側に隣接する永野昌一氏所有の畠から出土したものであることが判明した。この地点は七北田川右岸の自然堤防に立地する。

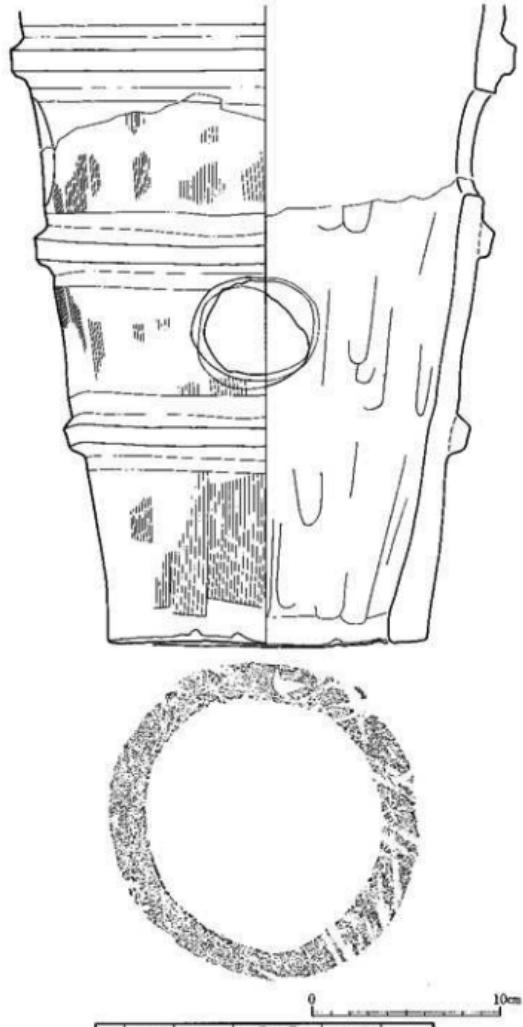
埴輪は口縁部を欠くが、凸帯数3本以上で、第2段と第3段で直交する位置に円形のスカシ孔を一対ずつ穿つ。各段の幅は、第1段11cm、第2段10cmで第3段も10cm程になると思われ、第1段の幅がわずかに大きい以外はほぼ等しい。外面とも風化が著しいが、外面調整は1次調整タテハケのみ、内面は底部付近を横方向にナデた後、縦方向のナデを行う。但し、この内面調整の前後関係は必ずしも明確でなく、一ヶ所だけではあるが、逆に縦方向のナデを横方向のナデが切っているように観察される所があり、そうであるとすれば底部調整である可能性がある。凸帯は、やや幅の広い台形である。スカシ孔は幅6.0cm～7.2cm・高5.5～6.0cmの円形で、第2段のものを見ると、段の中でも上方に片寄っている。黒斑は認められず、窓窓による焼成と考えられる。内面調整、スカシ孔の穿孔位置などは富沢窓跡系列のものに類似するが



第34図 仙台市内埴輪出土遺跡分布図 (国土地理院 1/50,000「仙台」を使用)

遺跡名	所在地	時期	古墳の種類	形	体積	文獻
1. 利出遺跡	多賀城市利出町 敷石地	古墳				
2. 古印小学校跡地	仙台市宮城 敷石地	古墳				
3. 宮内古墳	仙台市東仙台八丁目 前方後円墳	円錐又は 円錐部高30m	円錐部高30m	円錐		
4. 深谷水跡路	仙台市下郷町深谷水跡 敷石地			圓周内径約22m	円錐	
5. 芦沢神社内古墳(未命名)	仙台市古瀬二丁目	円錐		圓周内径約22m	円錐	佐藤卯二(1963.3) 千葉・河野(1973.3)
6. 先塚古墳	仙台市西原町 敷石地	主軸長約30m、後円部高約4m、 斜方墳内壇	円錐	主軸長約30m、後円部高約4m、 斜方墳内壇	円錐	伊東信義(1959.9) 伊東信義(1974.3)
7. 二塚古墳	仙台市南二丁目 前方後円墳					
8. 猪狩古墳	仙台市猪狩町18 前方後円墳 高約4m	円錐又は 圓周内径約42m	円錐・帆船			佐藤卯(1963.3)
9. 阿町古墳	仙台市西多賀一丁目 前方後円墳	主軸長約30m、後円部高約6m、 斜方墳内壇 河原石横置穴式石室	円錐・帆船			川島信義(1974.3) 川島信義(1974.3)
10. 恵美須跡	仙台市西多賀一丁目 敷石地			円錐		宮城教育大学考古学研究会(1973.2)
11. 草(西田)遺跡	仙台市西多賀三丁目 敷石地			円錐		宮城教育大学考古学研究会(1973.2)
12. 露尻(赤坂口)遺跡	仙台市露尻二丁目 露尻			円錐・帆船		渡辺伸哉(1974.9)
13. 風ノ内遺跡	仙台市露尻二丁目 敷石地			円錐		宮城教育大学考古学研究会(1973.2)
14. 教場古墳	仙台市露尻一丁目 円錐	高約17m	円錐・帆船			渡辺伸哉(1966.3)
15. 布袋遺跡	仙台市露尻町南二丁目 敷石地					
16. 五反田遺跡	仙台市大野田五反田 円錐	高約20m	円錐			田中朝嗣(1961.12)
17. 伊吉田(酒在前)遺跡	仙台市大野田酒在前 敷石地			円錐		宮城教育大学考古学研究会(1973.2)
18. 大野田1号墳	仙台市大野田酒在前 円錐	高約20m	円錐・帆船	帆船		武島幸一(1962.3)
19. 大野田2号墳	仙台市大野田酒在前 円錐	高約20m	円錐・帆船			武島幸一(1962.3)
20. 春日古墳	仙台市大野田酒在前 円錐	圓周内径約31m 形象	円錐・帆船			
21. 大野田4号墳	仙台市大野田酒在前 円錐	圓周内径約31m	円錐			
22. 乌帽子古墳	仙台市大野田字宮 円錐	圓周内径約25m 形象	円錐・帆船			
23. 長野瀬水(黒里地)遺跡	仙台市大野田字清水 敷石地			円錐		宮城教育大学考古学研究会(1973.2)

第6表 仙台市内埴輪出土遺跡地名表



番号	種類	法面(m)	内 壁			ハケノリ(枚)	色 調
			上部	下部	高		
-	円筒埴輪	底	1.3	2.3	0.7	5	-
内面							
外面							
外面：タテハケ→凸面筋り付け→スカシ孔壁孔							
内面：底部付近横古墳ナメ→縦方向ナメ							
33-15							

第35図 岩切小学校所蔵埴輪

凸帯形状が異質であり、一応別系列のものの可能性を考えておきたい。

本地点の周辺には南南西1.2 kmの所に千人塚古墳があり本地点も削平された古墳である可能性が高い。

#### 〔3. 案内古墳〕

仙台市遺跡番号C-044] 東仙台六丁目の丘陵上に立地する古墳で、円墳又は前方後円墳と考えられる。墳丘は変形が著しいが、円丘部の径は10mを計る。円筒埴輪片が採集されている。この古墳の直下の南側斜面にはON46型式の段階の須恵器窯である大蓮寺窯跡がある(渡辺泰伸他:1975)。

#### 〔4. 屋敷末遺跡〕

C-241] (第36図)

下飯山字屋敷東に所在し、本遺跡の北西約400mには弥生時代の遺跡として著名な藤田新田遺跡がある。浜堤上に立地し、現在は周囲の田よりもわずかに高い畠となっておりこの畠のほぼ全面から埴輪片が採集できる。

第36図に示したのは、比較的特徴の良く判るもので、2は底部近くの破片と思われる。



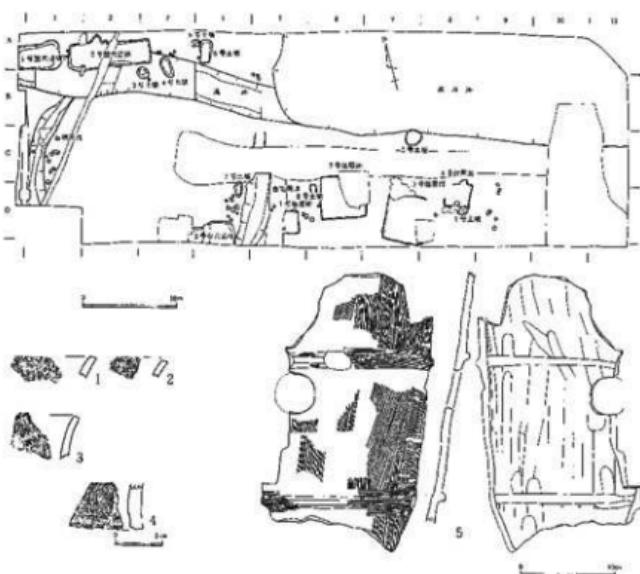
第36図 屋敷未遺跡出土遺物

採集された埴輪は、いずれも円筒埴輪片で、転顔形埴輪、形象埴輪は確認されていない。いずれの破片も外面は1次調整タテハケのみで、内面調整は縦方向のナデであり、黒斑はない。内面調整や内帯は富沢窯跡系列のものに類似し、特に3の内面調整の状態は、富沢窯跡の系統のものに酷似する。しかし資料的に限界があるため断定は避け、その可能性を指摘するに留めておきたい。

本遺跡の南約300mの所には下飯田薬師堂古墳があり、本遺跡も削平を受けた古墳である可能性が高い。

#### [5. 若林城跡内古墳 C-511] (第37図)

若林城跡は古城二丁目に所在し、寛永5年(1628年)に伊達政宗の隠居所として築かれた居館で、現在は宮城刑務所となっている。本遺跡の北約500mには猫塚古墳、北約800mには横穴式石室をもつ法領塚古墳、東約1.1kmには遠見塚古墳がある。1985年に職業訓練棟建設の際に仙台市教育委員会が発掘調査を行い、平安時代の集落跡と古墳周溝を検出している(佐藤甲二:1986・3)。墳丘はもとより周溝上部まで削平を受けており、周溝底面付近が部分的に残存していた。円墳と考えられ、周溝内縁での径は22mを計る。周溝は溝跡と3号竪穴造溝に切られており、溝跡はさらに1・2号竪穴造溝に切られている。1~3号竪穴造溝の堆積土上部には、いずれにも10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰が含まれている。溝跡・3号竪穴造溝とともに周溝より内側へかなり入り込んでおり、平安時代にはすでに墳丘はほとんど



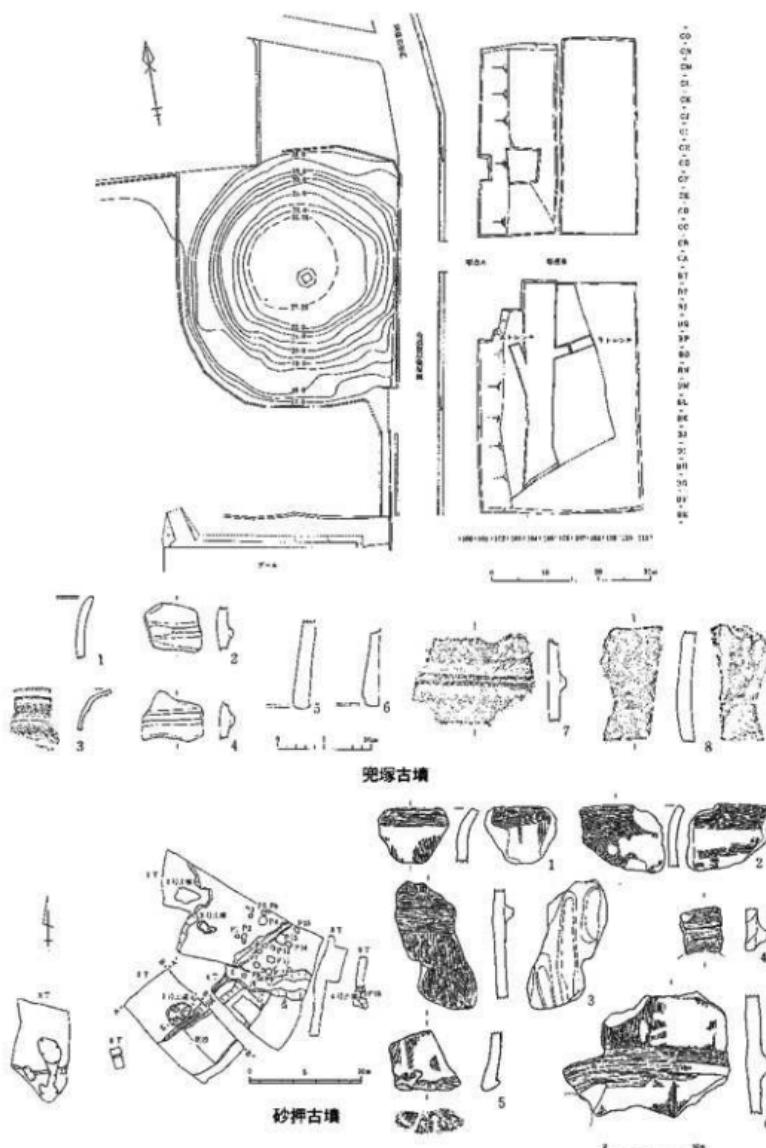
第37図 若林城跡内古墳平面図・出土遺物

削平されていたものと考えられる。

埴輪は周溝内と周溝周辺より出土しており、全て円筒埴輪である。全体の特徴を知りうるものはないが、富沢窯跡系2段階としたものに各部の特徴が一致する。

#### [6. 兜塚古墳 C-002] (第38図)

根岸町13に所在し、長町一利府線に近い沖積平野に立地する。径50m、高さ約5.5mの円丘状のマウンドが残存している。1977年に宮城県教育委員会によって市道根岸兜塚線の東側の地区的範囲確認調査が行われている。(千葉宗久・阿部博志:1978・3)。周溝の平面形が調査区南東で外縁が直角に近く屈曲することより、帆立貝形となる可能性が強い。深さは約40cmである。埴輪には円筒埴輪があり、破片のみで、いずれも表面の風化が激しいため全体の特徴を知りうるものはないが、口縁部形状・凸帯形状・内面調整は富沢窯跡系のものに合致する。但し7は富沢窯跡系1段階としたものに類似するが、2・4は2段階のものに類似する。いずれも表面の風化が激しいため決め難いが、1段階の中でも2段階に近い時期と考えておきたい<sup>註12)</sup>。他に須恵器が2点発見されており、そのうち1点が報告されている。焼けひずみがあるため口径等は復元し難いが、中型甕の口縁部と思われる。口頭の中ほどに凸線があり、それをはじめ



第38図 壳塚古墳・砂押古墳平面図・出土遺物

きんで2段に波状文が施されている。口縁端部や凸線のつくり出しは鋭く、陶邑編年のⅠ期（I型式）の範囲に入る可能性が高いと思われるが、出土状況が周溝束測での表探であるため古墳に伴うものか否かは不明である。

註13)

#### [7. 二塚古墳 C-024]

鹿野二丁目（旧長町鹿野前69）にあった西向きの前方後円墳で、1949年に削平されてしまった。この古墳については、高野松二郎（1907・12）、布施千造（1907・12）、笠井新也（1918・2）、松本彦七郎（1930・6）の諸氏の報告があるが、その内容は必ずしも一致しない。それらを検討した伊東信雄氏の報告（伊東：1950・8、伊東他：1974・3）にもとづいて、その概略を紹介しておきたい。規模は上軸長約30m、後円部径・前方部長ともに15m、高さ後円部4m、前方部2.5m程であり、1905～06年頃に後円部から凝灰岩の割抜石棺の身のみが出土している。石棺は長さ約2.6m・幅約1m・高さ約70cm・穴の深さ約30cmで、上縁が印籠造りにつくられているが、蓋は発見されていない。墳丘上で円筒埴輪の破片がひろえたことは伊東氏の報告に明らかである。埴輪の内容は不明である。

#### [8. 砂押古墳 C-007] (第38回)

砂押町18に所在し、台の原段丘が長町一利府線に切られる付近の斜面に立地し、径約20m・高さ約4mのマウンドが現存している。円墳あるいは前方後円墳と考えられ、1982年に墳丘南側が仙台市教育委員会によって調査されている（佐藤隆：1983・3）。それによると周溝内縄径約42m、墳丘径約29mで、崩溝は上端幅3.3～4.3m、下端幅2.3～3.9m、深さ30～40cmである。埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪があり、形象埴輪は認められていない。全体の特徴を知りうるものはないが、凸帯形状、内面調整、スカシ孔の特徴など、富沢窯跡系統のものに合致する。凸帯形状は富沢窯跡系統1段階のものに類似するが、スカシ孔の径は2段階のものに近い。いずれも破片のため決定し難いが、1段階の中でも後出的なものと考えておきたい。

#### [9. 裏町古墳 C-008]

第9章1で詳述。

#### [10. 原遺跡 C-155] (第39回)

西多賀一丁目に所在し、中町段丘が長町一利府線に切られる縁辺付近に立地する。宮城教育大学考古学研究会による名取川水系遺跡分布調査の際に、円筒埴輪片が1点採集されている



第39回 原遺跡・原東遺跡出土遺物

(宮城教育大学考古学研究会: 1973. 2)。報告されているものは外側調整はタテハケである。

[11. 原遺跡 C-154] (第39図)

西多賀一丁目に所在し、宮城教育大学考古学研究会による名取川水系道路分布調査の際に円筒埴輪片が6点採集されている(宮城教育大学考古学研究会: 1973. 2)。報告されたものは2点で、1は底部近く、2は底部の破片である。いずれも外側調整はタテハケである。

この原遺跡と原東遺跡は裏町古墳の西方にあ

たり、浜田廉氏の「名取鎮所址」に掲載されている西多賀地方の古墳分布略図には、この付近に古墳があったことが示されている(第40図)。この図中の東端に示されている古墳が裏町古墳に該当すると考えられ、原東遺跡が東から2番目の古墳に、原遺跡が3番目の古墳に、東西の位置関係ではおおよそ該当する。しかし古墳分布略図では、この2古墳はいずれももとの秋保電鉄の南側にあるが、現在の原・原東遺跡は、この秋保電鉄線にほぼ重なる国道286号線より北側の場所が登録されている。したがって、古墳分布略図におけるこの2古墳の位置と原・原東遺跡の位置は厳密には該当しない。

[12. 富沢窯跡(木戸口窯跡)、C-417]

第2章1で詳述。

[13. 堀ノ内遺跡 C-153]

富沢三丁目の自然堤防上に立地する。宮城教育大学考古学研究会による名取川水系分布調査の際に埴輪片1点が採集されている(宮城教育大学考古学研究会: 1973. 2)。

[14. 教塚古墳 C-014] (第41図)

泉崎一丁目にあった古墳で、1985年に古墳を含めた範囲に盛土が行われた際に仙台市教育委員会が遺構範囲確認のための発掘調査を行い(渡辺誠: 1986. 3)、翌1986年に宅地造成に伴い埋蔵文化財調査研究所が発掘調査を行い壊滅した。

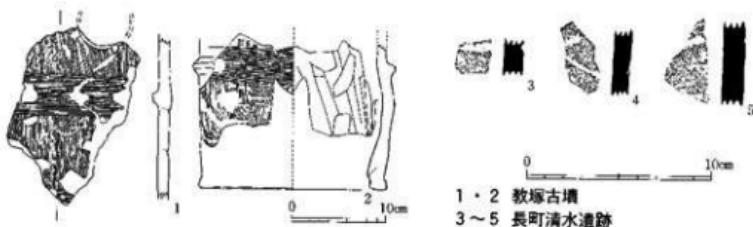
古墳は削平が著しかったが、径15m程の円墳と思われ、後背湿地の黒褐色粘土層上に堆積した黄褐色のシルト質砂層の自然堤防状の高まりを利用して築かれている。墳丘はほとんど削平され、主体部も発見されていない。

出土埴輪は仙台市教育委員会による調査では、円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土しており、形象埴輪は発見されていない。報告されている埴輪は中間段の破片と第一凸帯付近の破片で、全体の特徴を知りうるものはないが、いずれも富沢窯跡系統2段階のものに各部の特徴が類似する。



第40図 三神峯周辺古墳分布略図

(浜田廉「名取鎮所址」より)



第41図 教塚古墳・長町清水遺跡出土遺物

但し、第41図1は残存部の下端近くにヨコナデが一部観察され、これが凸帯貼り付けに伴うものであるとすれば、凸帯数が3本になる可能性もある。

[15. 線東遺跡 C-198]

長町南三丁目他に所在し、荒川北岸の自然堤防上に立地する。埴輪の内容、細かな出土位置は不明である。

[16. 五反田古墳 C-040]

第Ⅲ章1で詳述。

[17. 伊古田遺跡（宿在家遺跡）、C-196]

大野田字塚田に所在する。本古墳群の西約300mの自然堤防上に立地する。宮城教育大学考古学研究会による名取川水系遺跡分布調査の際に埴輪片1点（凸帯部）が採集されている（宮城教育大学考古学研究会：1973・2）。1983年と1984年に仙台市高速鉄道建設に伴い、遺跡範囲の西端に近い地区が仙台市教育委員会より発掘調査が行われているが、この調査の際には古墳に関する遺構や埴輪は発見されていない（高橋勝也：1984.3：1985.3）。しかし名取川水系遺跡分布調査では「中新荒川の西隣に位置する」となっている。「中新荒川」とは「新荒川」の誤りと思われ、この報告では新荒川の右岸であることは明らかであるが、現在の仙台市文化財分布地図では、新荒川の左岸のみの範囲が遺跡として登録されているため、本来の地点は現在の遺跡登録範囲とは対応しない。

[18. 大野田1号墳・19、大野田2号墳、C-054]

第Ⅲ章1で詳述。

[20. 春日社古墳・21、大野田4号墳・22、鳥居塚古墳]

第Ⅲ・V・VI章で詳述。

[23. 長町清水遺跡（四屋敷遺跡） C-185] (第41図)

大野田字清水に所在する。本古墳群の東約200mの自然堤防上に立地する。宮城教育大学考古学研究会による名取川水系遺跡分布調査の際に、埴輪片16点が採集されている（宮城教育大

学考古学研究会：1973・2）。報告されている3点は、ヘラ描きを有するものである。

### 〔小結〕

これらの23遺跡のうち、富沢窯跡系列に属す埴輪が11遺跡（古墳10・窯跡1）から出土している。特に郡山低地とその周辺では、五反田古墳を除き、特徴の知られている埴輪は全て富沢窯跡系列のものとなっている。この五反田古墳出土埴輪も、五反田古墳系列としたものが裏町古墳で富沢窯跡系列とした埴輪と併っている。これらの古墳は、前方後円墳で主軸長が50mを越えるもの（裏町古墳・兜塚古墳・砂押古墳？）と、径20m前後の円墳とに分けられ、この両者はその被葬者の階層が異っていたと考えるべきであろう。富沢窯跡系列・五反田古墳系列の埴輪の分布範囲がどこまで広がるかは充分明らかにはしてないが、この両系統の工人集団は、上記の前方後円墳の被葬者、あるいはそれらを統合するより上位の首長のもとで、これらより下位の階層にも埴輪を供給していたという生産の様相が想定しうるであろう。

今回報告分も合わせて、富沢窯跡系列・五反田古墳系列の埴輪は、ともに全て同様の胎土からなっている。すなわち、肉眼で確認できる砂粒が、ほとんど石英・長石の両者で、他の鉱物は極めて少なく、かつ長さ1mm程の動物珪酸体（宇津川徹・上条朝宏：1980・10：1980・12）<sup>註14)</sup>を少量含んでいる。また含まれる石英・長石も1～3mm程の大きさのものがほとんどで、しかも砂粒の角がとれて丸くなっている。このような胎土は、郡山低地の各時代の土器に普遍的に見られるものであり（佐藤洋：1981・3）、このことをもって限定することはできないが、これらの埴輪が富沢窯跡や、あるいは当地域の別の地点で製作された可能性は高いものと思われる。

ここであげた仙台市内の埴輪出土遺跡のうち、沖積平野に立地する中小規模の古墳は、そのほとんどが削平されており、墳丘が残存していたのは教塚古墳・春日社古墳、および鳥居塚古墳のごく一部にすぎない。若林城跡内古墳にいたっては、他の造構との切り合い関係より、平安時代には墳丘のほとんどがすでに削平されていたと考えられる。このような状況より、削平された古墳の数は、さらに多いことが予想され、今後の調査の進展によって、埴輪を有する古墳の数も増大するであろう。特に、若林城跡内古墳や教塚古墳のように、現在では1基のみしか知られていない中小規模の古墳の場合、大野田古墳群のように、その周囲に削平され埋没した古墳が存在する可能性は高いと考えるべきであろう。

### 3. 大野田古墳群の特徴と問題点

大野田古墳群の性格やその被葬者像について考えることは、本古墳群のほとんどが削平され主体部が明らかでないため、かなりの困難さを伴うが、それでもなおかつ、いくつかの特徴については指摘することができる。墳形と規模では、今までのところ円墳以外の形態になると考へる証拠のあるものは五反田石棺墓の小規模な隅丸形の周溝以外発見されておらず、径16m（大野田3号墳）～約30m（大野田4号墳）の中小規模のもので、さらに小規模な周溝をめぐらすもの（五反田石棺墓）や主体部のみ発見されているもの（五反田木棺墓）もある。これらは大野田1号墳と2号墳の周溝外縁の間の幅が約2mというように、密接して群在しており、その数は今後さらに増加することが予想される。

このような墳形・規模・在在形態は、埴輪の検討より時期が近接すると思われる長町一利府線に沿う一連の前方後円墳と比較すると、その特徴は一層明確であり、この両者の被葬者の間に階層差があったと考えるべきであろう。したがって、これら前方後円墳が当地域の首長墓で大野田古墳群をその支配下にあって次第に台頭してきた家父長層の群集墳として理解し、当地域における群集墳の成立を5世紀末前後に逆のぼらせることもひとつの有力な解釈であるだろう。しかしこのように考へることには、慎重にならざるをえない。その理由は、林謙作氏が指摘するように（林：1986・10）、東北地方の古墳時代首長層を他地方の首長層と同一の性格を有するものと考えるか否かという問題があり、それに伴いその首長層の下に支配される階層の性格も問題にならざるをえない。特に東北地方では、壺形埴輪を除けば埴輪を有する古墳は5世紀後葉～6世紀前半に集中し（辻秀人：1986・4：1986・12、藤沢敦：1986・7）、それらの埴輪を有し墳形・規模から首長墓の可能性のあるものは、前期（塩釜式期）の古墳からの直接的系譜をたどれるものが、現状ではほとんど存在しない。しかもこれらの埴輪を有し、当該期では最大規模の古墳の周囲に、次々と中小規模の円墳が築造され古墳群を形成する場合が多い。宮城県内でいくつかの例をあげるなら、白石市鷹巣古墳群では、白石市内最大の瓶ヶ盛古墳を中心に、合計41基の古墳が群在する（片倉信郎：1941・8、志間泰治：1972・5）。伊具郡丸森町の台町古墳群においては、中型規模の円墳ではあるが径25mの103号墳のみが埴輪を有し、6世紀と思われる小型前方後円墳の20号墳を除けば、中小規模の円墳、さらには封土をもたないものまで、合計174基が群在している（志間泰治：1954・3：1955・4：1961・10）。このような形態が東北地方ではむしろ普遍的であり、大野田古墳群のように、前方後円墳とは別地點に埴輪を有する中小規模の円墳が群在するという形態は、他に例がない。しかしいずれにせよこの時期に、辻秀人氏が「古墳時代第2の波」と呼んだように（辻：1986・4）、古墳への被葬者層の急速な拡大があることは事実であり、この点において全国的な動向と無縫

ではなかろう。このような問題を追及していくためには、他の古墳群との比較検討に加えて、集落や生産地との関係を総合的に把握していくことが不可欠であろう。

そこで最後に、本古墳群と集落、さらには生産地との関係について、現在知られているところを指摘しておきたい。本章の1で検討したように、充分とは言えないものの、須恵器を介在させることによって、埴輪の年代観と土師器の年代観を対比させることが可能であり、また富沢窯跡では土師器が共伴している。大野田古墳群の埴輪は富沢窯跡系列では2段階のもので、土師器では富沢窯跡二次床面出土のものが2a段階に伴い、須恵器ではTK208型式の段階のものである裏町古墳出土のものより後の時期が考えられる。よって土師器では南小泉式後半段階でもより新しい時期以降のものに相当する。

本古墳群の周辺では、下ノ内遺跡で2棟の南小泉式期の竪穴住居跡がこれまでに発見されている（第1図）。4号住居跡は旧河道によって一部が破壊され、調査区外へも範囲がびているため一部分を検出しているだけであるが、方形の平面プランをもち、地床炉が検出されている。概報では土師器1点が図示され、これを含む土師器2点と須恵器1点の写真が報告されている（篠原信彦：1982・3）。16号住居跡も調査区外へ範囲がびているため一部を検出しているだけであるが、方形の平面プランをもち、カマドを伴っている。概報では土師器1点が図示され、これを含む土師器9点の写真が報告されている（渡辺忠彦：1984・3）。これらは本報告がなされていない段階なので、細かな時期は不明であるが、概報で報告されているもの特徴より、南小泉式の後半段階のものと考えられ、また4号住居跡出土の須恵器も陶邑編年Ⅰ期（I型式）の範囲におさまると思われる。したがって下ノ内遺跡の住居跡と大野田古墳群が直接時期が重なるか否かは不明であるが、大野田古墳群の中でも早くに築造されたものは、少くともこれらの住居と近接した時期のものであることは間違いない。下ノ内遺跡の東側に隣接し、本古墳群の一部を含む六反田遺跡では、これまで計4,000m<sup>2</sup>の範囲が調査されているが、南小泉式期の遺構は、古墳以外一切発見されておらず、遺物もほとんど出土しない。したがって下ノ内遺跡の2棟の住居跡より東側に該期の集落が広がる可能性は少なく、西側に広がっている可能性が高い。

窯業生産では、埴輪は前述したように富沢窯跡との関係が追及できた。須恵器では大蓮寺窯跡に統く在地の生産の様相は充分明らかではないが、西多賀に所在する金山窯跡がその可能性あるものとされている。本古墳群から出土している須恵器は、大野田1号墳出土の種のみであるが、先に述べたように陶邑編年にはうまく対比できず、在地産の可能性を考えるべきかもしれない。また下ノ内遺跡からは、遺構からの出土ではないが、南小泉式土師器環と同様の製作技法で作られた須恵器が出土しており、在地産のものであることは間違いないであろう。下ノ内遺跡に居住していた人々が、このような在地産の須恵器を入手しうる立場にあったとするなら

註15)

ば、本古墳群との関係が一層問題となろう。

当時の社会を支える基盤と考えうる水田稲作農耕については、富沢遺跡での近年の調査によって、各時代の水田跡が次々と発見されており、古墳時代中期の水田は、富沢遺跡の北東隅に近い都市計画街路長町一折立線建設に伴う調査で検出されたもののみであり、本古墳群とは距離的にへだたりがあるが、当該期に自然堤防上に集落を営み、その周囲の後背湿地で水田を経営していたことは間違いないものと思われる。

このように本古墳群とその周辺地域は、集落、墳墓、生産地の相互の関係を、具体的な資料をもって追及しうる、東北地方では数少ない地域であり、今後そのような研究を通じて、東北地方の古墳時代社会の特性を明らかにしていくであろう。

註1 植輪の野焼きと窯窯焼成との識別は、川西宏幸氏（1973・7）の指摘以来、黒斑の有無によってなされてきた。しかし富沢窯跡出土埴輪の中には黒斑を有するものがある（第30図3）。これは二次床面上で発見されたもので焼台に使われたものと考えられ、「前部」から出土した黒斑のない破片と接合している。したがって窯出しの際に破損し、その一部を焼台に転用し、その時点で黒斑が付着した可能性が高い。この例は、地面上に接するような場所では、窯窯であっても火回りが悪く黒斑が付着する場合があることを示している。したがって黒斑のないものは問題ないが、黒斑があるから直ちに野焼きであるとするすることはできない。このような場合には、窯窯焼成に伴って出現する底部の焼けムラ（今津筋生：1983・3）の有無を検討する必要がある。但し、底部焼けムラも必ず伴うものではないため、黒斑・底部焼けムラの有無を総合的に判断するべきである。ここでとりあげる大野田1号墳出土埴輪には、黒斑状の色の変化を伴うものが3点あるが、これらの黒斑状の色変化は片側にのみ広く、しかも雲状にまだに付着している。これは野焼きに伴う黒斑とはその特徴が異なり、またこれらと全く同じ形態、技法の埴輪には黒斑がなく、底部焼けムラを有するため、これらの埴輪は全て窯窯焼成によるものと推定する。

註2 嘉町古墳の報告書では規模について、①葺石列あるいは埴輪列の下端を埴丘端とする場合、②埴丘部の範囲とする場合、③周辺内縁の3通りの類似を提示し②の方法を採用している。これはいずれも地山を掘りこんでいる部分を「周溝」と認定する前提に立っている。「周溝」部分は4ヶ所で調査されているが、「第6トレンチ」では「周溝」内縁の上端から10m以上まで調査しているが、外縁は検出されておらず、本末2段築成の古墳で、第1段目は地山削り出しによる可能性があると考えられる。また「周溝」底面付近からは各トレンチで埴輪がまとめて出土しており、この1段目のテラス上に埴輪列が巡らされていたことはほぼ間違いないと思われる。「埴丘」下端から地山削り出しの下端までは約6mあり、この長さを加えると主軸長は50mを越える。後円部北東側には、現在嘉町東遺跡として遺跡登録されている塙の部分に、かろうじてこの第1段目の下端が残存していると思われ、現地で埴輪も採集される。また第1段日の長さ分前方部も大きくなるとすれば、もと埴丘のあった西側に塙が一部あり、ここに前方部南西コーナー付近の第1段目下端が残存している可能性もある。

註3 嘉町古墳出土鏡は報告書では珠文鏡とされ、以後この認識が踏襲されてきた。しかし小林三郎氏は、この鏡を倣製獸面鏡類C型に分類している（小林：1983）。小林氏の指摘通り「珠文」とされてきた半肉割の文様は孔に3本の爪形の足をつけたような形で、その周囲に横に長いC字状の細線がめぐっており、珠文鏡で

はない。但し、小林氏は四乳九竜を表わすとしているが、13個の文様全てに上述の特徴が認められ、小林氏の分類に従えば乳をもたない13竜とするべきであろう。これは一般的には乳文鏡と呼ばれてきたものである（樋口藤廉：1979・10）。同様の文様表現で13竜を表わすものとしては佐賀県都古墳出土鏡がある（松岡史：1962・8、志佐揮彦：1977・3）。なおこの裏町古墳出土鏡の再検討は、川西宏幸氏の指摘にもとづいて行ったものである。記して負う所を明らかにするとともに謝意を表したい。補註）

註4 出土埴輪の全てを検討したが、形象埴輪と考えられるものは確認できなかった。但し註2に述べたように、本古墳の埴輪の全てが採集されているわけではなく、特に比較的良好に遺存していた埴丘第1段日下端付近の埴輪の大部分が採集されていないため、断定は避けておきたい。

註5 裏町古墳出土須恵器は報告書の実測図の不備のため、これまで渡辺泰伸氏（1980・3）、辻秀人氏（1986・4）によって再検討してきた。本書での図と報告書の図で示されたものとの対応関係は以下の通りである。器台（本書第27図1）は報告書の図版9（以下同様）の9・10。櫛型龜（第27図2）は報告書の7であり同じく報告書の3も同一個体と考えられ、2もこれの口縁部になると考えられるが、この両者と4・11は所在不明となっている。台付壺（第27図3）は報告書の5・6・8である。

註6 本稿は発掘調査の報告書という性格による制約もあり、埴輪の系統関係の識別のための方法論、および東北地方全体の埴輪の様相については、稿を改めて詳説することで責をはたしたい。

註7 埴輪の追加樹立は大阪府弁天山D2号墳でその出土状況から確認されているように（山代克代：1967・3）、その可能性は否定しない。しかし若松良一氏の議論では、出土状況の厳密な検証を欠いたまま、型式学的に先行する要素をもつものと後出る要素をもつものとを前後関係に置いているだけで、それでは追加樹立を証明したことにはならない。特に、氏が時間差の根拠の中心とされている色調の相違は、埴輪の製作技術の属性とは同次元で比較できない属性であることを指摘しておきたい。裏町古墳の場合、据えられた状態で出土した埴輪は3点のみで、出土状況からの検討は不可能であるが、底部片でA群とB群の数を調べると、A群11点・B群180点・不明54点で、半円形スカシ孔を有し、一部に2次調整B種ヨコハケをもつA群を先行すると考えた場合、大多数の埴輪が追加樹立されたことになってしまう。

註8 渡辺泰伸氏の論文「東北古墳時代須恵器の様相と編年」の註5において、田辺昭三氏のTK 208型式に類似するとの指摘が紹介されており（渡辺泰伸：1980・3）、田辺昭三氏は「大蓮寺窯の製品につづく型式で、東北地方には少ない『期に属する須恵器である』としている（田辺昭三：1981・7）。

註9 田辺昭三氏と中村浩氏の編年については、両者の間で方法論上の議論があり、両者の編年を直接対比すべきではないが、ここでは立ち入った議論をする余裕がないので、両氏の編年が結果的にほぼ対応するものと見なして論ずることとする。

註10 該期の土師器の編年は、氏家和典氏によって確立された東北地方の土師器編年では南小泉式→引田式→住社式とされていたが（氏家和典：1957・3）、宮城県仙台市鶴ノ巣遺跡の住居跡一括資料の分析では、引田式は南小泉式から分離しないとされた（白鳥良一、加藤道男：1974・3）。以後、引田式の扱いは研究者によって見解の相違が見られ統一されていない。本稿では引田式類似のものも一括して南小泉式としておきたい。但し、辻秀人氏が指摘するように（辻秀人：1986・4）、南小泉式には器種構成の上で大きな変化があり、今後南小泉式の後半段階を、古墳時代土師器全体の変化の中で位置づけ直す必要があろう。

註11 上高野遺跡2号住居出土須恵器環については、玉川一郎・大越道正両氏（1978・3）は「MT15ないしTK10出土環に類似する」とされた。しかし後に大越道正氏（1980・3）は「受部や口唇端部の形状は陶込編年におけるⅡ期の第1、第2段階と共通する面はもっているが、Ⅱ期の蓋環が大振りになる傾向にあってはまら

ず、むしろⅠ期の特徴に近い」とされ、山内幹夫氏（1980・3）がTK216墓跡出土資料に近いとされた。

註12 犀塚古墳出土埴輪に関する所見は、筆者が東北大学卒業論文作成時に実見させていただいた結果にもとづいている。その際、東北歴史資料館の桑原温郎氏にお世話になった。

註13 丹羽茂氏の御教示による。

註14 今回報告した鳥居塚古墳出土埴輪の中に、この動物珪酸体を多量に含むものが、わずかではあるが含まれている。しかし、いずれも表面の風化が著しく、その特徴は明らかにしえなかった。

註15 未報告であるが、調査担当者の御好意によって、実物を検討させていただいた。

補註 本稿脱稿後、裏町古墳出土鏡の類例を新たに知った。鳥取県東伯郡東郷町一の宮出土と伝えられるもので報告では「変形獸形鏡」とされている（山陰考古学研究所：1978・1『山陰の前期古墳文化の研究I』写真41・拓本15）。面径9.9cmで、円座をもつ円形紐の周囲に、3本の爪形の足をつけた乳様の突起で獸形を表わし、その周囲に横に長いC字状の細縫がめぐり、さらに一部にはもう一重細縫をめぐらしたもののが、13個右まわりに配されている。註3であげた佐賀県柳原古墳出土鏡は面径11.1cmで獸形の配列が左まわりであるのに対し、本例の伝一の宮出土鏡は、裏町古墳出土鏡（面径9.0cm、獸形の配列右まわり）に良く類似している。但し、裏町古墳出土鏡は、獸形の外側の文様が判然とせず、外区の一番外側に網目文帯のみが認められるに対し、伝一の宮出土鏡は、獸形の外側は2重の網目文帯—波文帯—網目文帯となっている。裏町古墳出土鏡を、伝一の宮出土鏡のより退化したものと見るべきであろうか。いずれにせよ、中期古墳の分布の北限に近い裏町古墳出土鏡の類例が、西日本に見られることは興味深い事実であり、今後とも類例の発見に務めていきたい。

## 第IX章　まとめ

1. 本報告書は、昭和51年度に行った市道・春日線拡幅整備工事に伴う調査内容をまとめたものであり、諸般の事情から、10年も報告がおくれたことを心よりおわびするものである。
2. 標題にもあるように、踏査により知り得た春日社古墳・鳥居塚古墳の調査を行ったものであるが、その過程において、他に古墳の周溝を2基確認し、大野田3・4号墳とした。
3. 既知の古墳及びこのように調査によって確認された古墳の増加に伴い、この周辺が一大古墳地帯であることが判明してきており、特に本報告にある春日社・鳥居塚古墳一帯を大野田古墳群として遺跡範囲を拡張した（昭和62年3月）。
4. 春日社古墳からは古墳出土としては仙台市内初めての形象埴輪が出土しているが、その多くは小破片であり、馬形埴輪の頭部片と考えられたものほかは判然としない。
5. 調査区より出土した埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪があり、おおよそ5世紀末を中心とした年代が与えられるが、詳細は本文を参考とされたい。埴輪以外に土師器・須恵器破片が若干出土している。
6. 古墳時代以外の出土遺物として、中世陶器片・江戸～明治にかけての陶磁器・寛永通宝等が少量あるが、今後の周辺遺跡調査時の参考となるよう、まとめて資料化した。
7. 上記のような遺跡環境及び出土遺物から、本報告の考察においては、仙台市内を中心とした、特に埴輪をもつ古墳・遺跡を概観し、埴輪等の比較検討を行い、その類型化より、当古墳群を位置付けたものである。
8. 当調査は、道路拡幅に伴うものであったため、調査区の設定も、ほぼ既存道路に沿ってトレンチ状に入れられたものである。よってこの調査では、周溝の数、平面形態によって、古墳の基數、形状をえたものである。この調査では、春日社古墳・鳥居塚古墳・大野田3・4号墳とも円墳であろうという推定しかできないし、上体部も把握できなかった。

## 引用・参考文献

- 青沼一民・長島栄一（1982・12）：「油ノ瀬遺跡」仙台市文化財調査報告書第44集
- 阿部博志・千葉宗久（1980・1）：「（4）台ノ山遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」宮城県文化財調査報告書第62集 PP. 51～212
- 伊東信雄（1950・8）「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史』3 PP. 1～106
- 伊東信雄（1957・3）：「古代史」「宮城県史」1
- 伊東信雄・伊藤玄三・岩渕康治（1974・3）：「裏町古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第7集
- 伊東信雄他編（1981・10）：「宮城県史」34考古資料編
- 稻村繁（1986・8）：「群馬県における馬形埴輪の変遷—上坂古墳出土品を中心として—」『MUSEUM』No. 425 PP. 4～20
- 井上裕一（1985・12）：「馬形埴輪の研究—製作技法を中心として—」『古代探査』11早稲田大学出版部 PP. 369～414
- 今津節生（1983・3）：「森台7号墳出土の埴輪について」『千葉県山武町森台古墳群の調査』青山学院大学森台遺跡発掘調査会 PP. 118～147
- 氏家和典（1957・3）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 PP. 1～14
- 氏家和典・加藤孝（1966・6）：「東北」「日本の考古学IV古墳時代（上）」河出書房 PP. 499～528
- 氏家和典（1974・11）：「東北における大型古墳の問題」「東北の考古・歴史論集」 PP. 127～156
- 氏家和典（1978・3）：「東北における大型古墳の企画性と編年」『東北歴史資料館研究紀要』4 PP. 19～35
- 氏家和典（1984・12）：「宮城の古墳」「宮城の研究」1 洋文堂出版 PP. 306～353
- 宇津川徹・上藤朝宏（1980・10・12）：「土器胎土中の動物珪酸体について」『考古学ジャーナル』181 PP. 22～25 「考古学ジャーナル」184 PP. 14～17
- 大越道正他（1980・3）：「第3編佐平林遺跡櫛区」「母畑地区遺跡発掘調査報告V」福島県文化財調査報告書第85集 PP. 141～298
- 小笠原好彦・阿部義平（1968・10）：「宮城県新田遺跡出土の土師器」『考古学雑誌』第53巻第4号 PP. 34～48
- 笠井新也（1918・2）：「奥羽地方に於ける原始時代遺跡の概観（上）」「考古学雑誌」第8巻第6号 PP. 8～28
- 片倉信郎（1941・8）：「廣の原古墳群調査報告」『白石市史』別巻考古資料編に再録
- 片倉信郎他編（1976・3）：『白石市史』別巻考古資料編
- 加藤孝（1955・12）：「宮城県名取郡瀬ノ瀬古墳」「日本考古学年報」4 PP. 119～120
- 川西宏幸（1973・7）：「埴輪研究の課題」「史林」56巻4号 PP. 108～125
- 川西宏幸（1978・9）：「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64巻第2号 PP. 1～70
- 川西宏幸（1973・3）：「円筒埴輪総論 地籍文献総覽」「考古学雑誌」第64巻第4号 PP. 90～105
- 日下部善己・佐藤博重（1980・3）：「下ノ内遺跡」「伊達西部地区遺跡発掘調査報告」福島県文化財調査報告書第82集 PP. 86～105
- 小林三郎（1983）：「古墳時代做製鏡の鏡式について」『明治大学人文科学研究所紀要』第21冊

- 坂本和俊（1985・11）：「埼玉県における円筒埴輪の編年の諸問題」『第6回三県シンポジウム 塩輪の変遷—普遍性と地域性—』群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所・地武藏古代文化研究会 PP. 63~69
- 伊藤甲二（1986・3）『若林城跡』仙台市文化財調査報告書集第90集
- 佐藤 隆（1983・3）：「砂押古墳」「仙台平野の遺跡群Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第47集 PP. 3~10
- 佐藤 洋（1981・3）：「土器胎土中における白色針状物質について」「山口遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第33集 PP. 229~230
- 志佐洋彦（1977・3）：「付 佐賀県下出土の古鏡—弥生・古墳時代—」「純島山遺跡調査報告書」佐賀県立博物館調査研究書第3集
- 福原信彦（1982・3）：「Ⅲ下ノ内遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第40集 PP. 5~25
- 志賀泰治（1954・3）：「宮城県伊具郡金山町古墳群調査概報」「歴史」第7輯 PP. 43~53
- 志賀泰治（1955・4）：「宮城県丸森町台町古墳群調査概報第2報」（ガリ版）
- 志賀泰治（1961・10）：「宮城県丸森町台町古墳群調査概報第3報」「東北考古学」2 PP. 28~40
- 志賀泰治（1972・5）：「白石市麻ノ瀬古墳群発掘調査概報」白石市文化財調査報告第12号
- 下村登良男（1973・3）：「神前山1号墳」「明和町文化財調査報告2
- 白鳥良一・加藤道男他（1974・3）：「岩切鴻ノ瀬遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書」宮城県文化財調査報告書第35集 PP. 161~274
- 鈴木 啓・辻秀人他（1982・3）：「原山1号墳発掘調査概報」福島県立博物館調査報告書第1集
- 高木和夫・大越道正（1979・3）：「第2編版倉前B遺跡」「母畠地区遺跡発掘調査報告書」福島県文化財調査報告書第74集 PP. 53~88
- 高野松二郎（1907・12）：「仙台市茂ヶ崎付近にて発見せる古墳」「考古界」第6巻第2号
- 高橋勝也（1984・3）：「亘吉古田遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ」仙台市文化財調査報告書第69集 PP. 5~22
- 高橋勝也（1985・3）：「亘吉古田遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ」仙台市文化財調査報告書第82集 PP. 5~16
- 高橋信一（1983・3）：「阿武隈川流域における古墳時代中期の土師器とその問題」「しのぶ考古」8 石のふ考古学会 PP. 21~43
- 山代克己（1967・3）：「弁天山D2分墳」「弁天山古墳群の調査」大阪府文化財調査報告第17輯 PP. 137~157
- 伊達宗泰（1966・3）：「勢野茶臼山古墳」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第23号 PP. 21~32
- 田中則和他（1981・12）：「六反田遺跡」仙台市文化財調査報告書第34集
- 山迎昭二（1966・4）：「南丘古墳群Ⅰ」平安学園考古学クラブ
- 田迎昭二（1981・7）：「須恵器大成」角川書店
- 毛川一郎・大越道正（1978・3）：「大正村上高野遺跡出土遺物の再検討」「しのぶ考古」7 石のふ考古学会 PP. 1~11
- 千葉宗久・河部博志（1978・3）：「(2)兜塚古墳」「宮城県文化財調査略報(昭和52年度分)」宮城県文

- 辻 秀人（1986・4）：「IV古墳時代」『図説 発掘が語る日本史』新人物往来社 PP. 150～178
- 辻 秀人（1986・12）：「福島における埴輪生産の動向」『福島の研究』第1巻 清文堂出版 PP. 249～272
- 鶴間正昭（1985・4）：「第3分層出土土師器の分類とその縦年の位置」『本尾敷古墳群の研究』法政大学 PP. 258～266
- 森俊二郎（1973・1）：『埴輪研究』第1冊
- 長島栄一（1982・3）：「大野田古墳群」『年報3』仙台市文化財調査報告書第41集 PP. 13～28
- 中村 浩（1978・3）：「和泉陶器窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30集 PP. 168～241
- 中村 浩（1985・5）：「東北の初期須恵器生産の系譜」『古代窯業史の研究』柏書房 PP. 45～61
- 林 謙作（1986・10）：「東北・北海道史の時期区分」『考古学研究』第33巻第2号 PP. 32～41
- 楷崎彰一監修（1984・6）：「日本陶磁の源流—須恵器出現の謎を探る」柏書房
- 丹羽 茂（1984・3）：「宮前遺跡」『朽木横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集 PP. 71～213
- 丹羽 茂（1985・3）：「今熊野遺跡I—古代編」『今熊野遺跡、一本杉遺跡、馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集 PP. 1～142
- 橋本博文（1981・2）：「埴輪研究の動向を追って」『歴史公論』2月号 PP. 120～130
- 浜田 康（1930・3）：「名取鍋所址」『宮城県史跡名勝名勝天然記念物調査報告』第5輯
- 樋口隆康（1979・10）：『古鏡』新潮社
- 藤沢 敦（1986・7）：「東北の埴輪」『山形考古学会第28回総会研究大会発表予稿集』 PP. 41～44
- 布施千造（1907・12）：「宮城県名取郡茂ヶ崎村古墳探見記」『考古界』第6巻第2号
- 埋蔵文化財研究会（1985・1）：「形象埴輪の出土状況」第17回埋文研資料
- 松岡 史（1962・8）：「第二編第四章古墳時代」『唐津市史』唐津市
- 松本彦七郎（1930・6）：「陸前平野区域の古墳」『東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告』第9集 PP. 115～130
- 宮城教育大学考古学研究会（1973・2）：「名取川水系遺跡分布調査」『宮教考古』第5号 PP. 3～22
- 山内幹夫他（1980・3）：「第1編西原遺跡」『母畠地区遺跡発掘調査報告V』福島県文化財調査報告書第85集 PP. 13～106
- 若松良一（1982・3）：「同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析」『法政考古学』第7集 法政考古学会 PP. 13～30
- 渡辺泰伸他（1974・9）：「宮沢窯跡」古窯跡研究会
- 渡辺泰伸他（1976・5）：「陸奥国官窯群Ⅱ」古窯跡研究会
- 渡辺泰伸（1980・3）：「東北古墳時代須恵器の様相と編年」『考古学雑誌』第65巻第4号 PP. 77～103

# 写 真 図 版

写真 1  
春日社古墳  
調査前全景  
(東より)



写真 2  
春日社古墳  
2トレンチ  
砾群検出状況  
(西より)



写真 3  
春日社古墳  
2トレンチ  
砾群下の落ち込み  
(西より)



写真4  
春日社古墳  
3トレンチ  
砾群検出状況  
(東より)



写真5  
春日社古墳  
2トレンチ  
周溝完掘状況  
(北西より)



写真6  
春日社古墳  
3トレンチ  
周溝完掘状況  
(東より)



写真 7  
春日社古墳  
2・3トレンチ  
周溝完掘状況  
(東より)



写真 8  
春日社古墳  
2・3トレンチ  
周溝完掘状況  
(西より)



写真 9  
春日社古墳  
2トレンチ断面  
(北より)



写真10  
春日社古墳  
3 トレンチ断面  
(東より)



写真11  
春日社古墳  
4 トレンチ全景  
(南より)

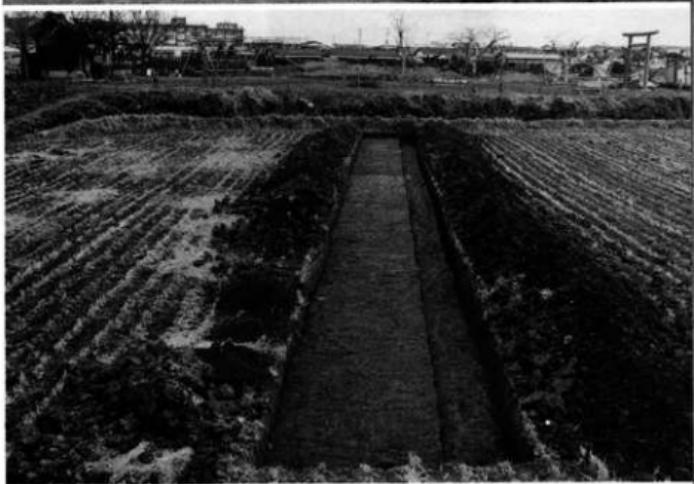


写真12  
春日社古墳  
4 トレンチ断面  
(西より)





1 a



1 b



2 a



2 b



3



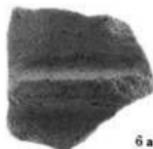
4 a



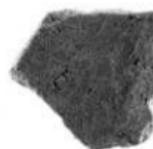
4 b



5



6 a



6 b



7



8 a



8 b



9 a



9 b

写真13 春日社古墳出土遺物 (1)

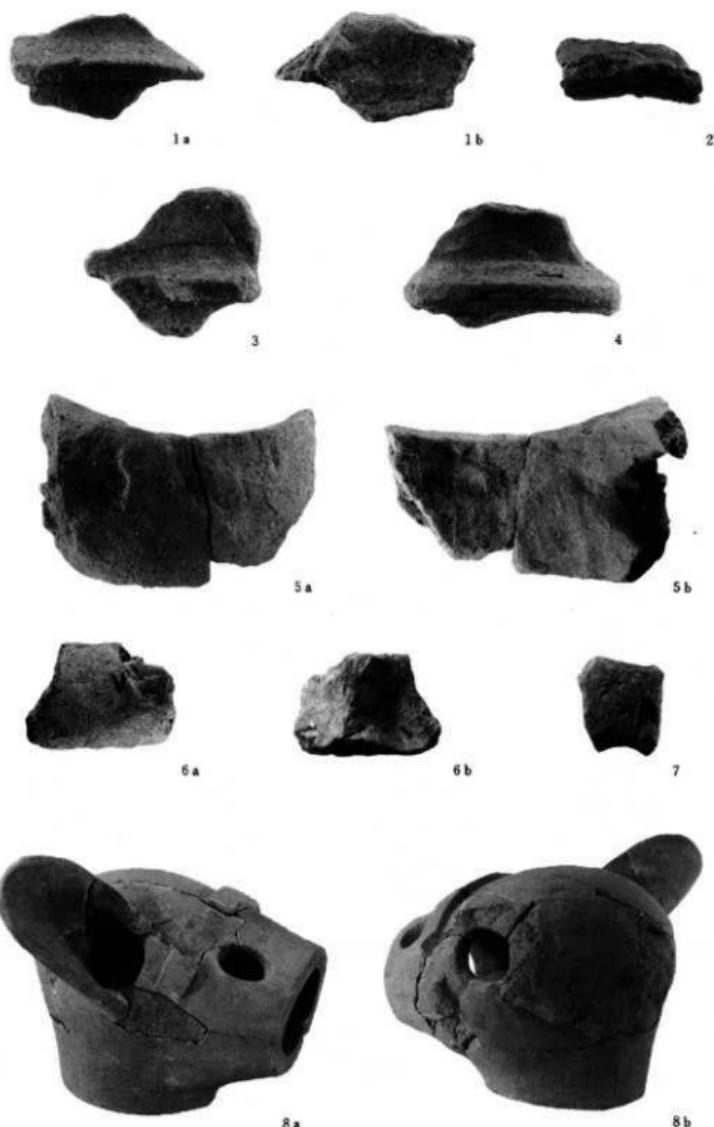


写真14 春日社古墳出土遺物 (2)

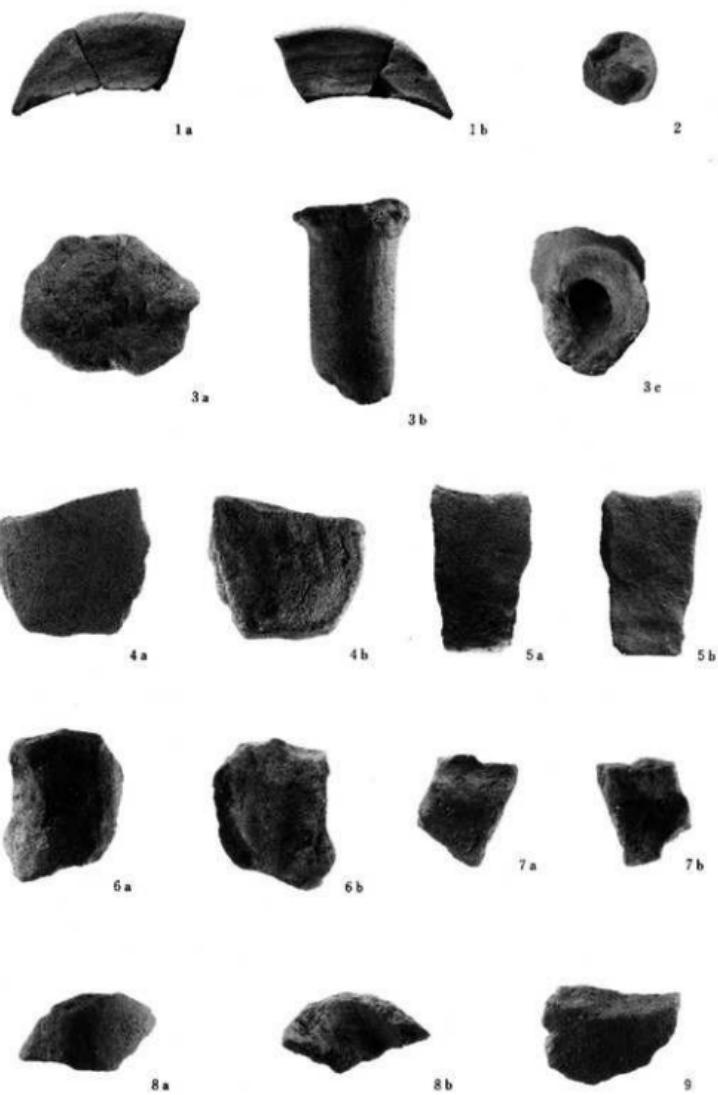


写真15 春日社古墳出土遺物 (3)



写真16 春日社古墳出土遺物(4)

写真17  
大野田 3号墳  
B トレンチ断面  
(北西より)



写真18  
大野田 4号墳  
C トレンチ断面  
(南より)



写真19  
大野田 4号墳  
出土遺物

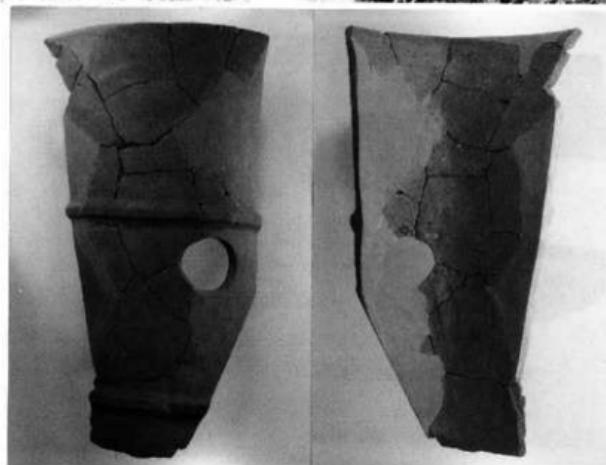


写真20  
鳥居塚古墳  
調査作業状況  
(南東より)



写真21  
鳥居塚古墳  
最終状況  
(北西より)



写真22  
鳥居塚古墳  
最終状況  
(南東より)



写真23  
鳥居塚古墳  
2・4・6トレンチ  
最終状況  
(北より)



写真24  
鳥居塚古墳  
2トレンチ  
墳丘残存部断面  
(南より)



写真25  
鳥居塚古墳  
6トレンチ周溝断面  
(南西より)



写真26  
鳥居塚古墳  
1・7トレンチ  
最終状況  
(東より)



写真27  
鳥居塚古墳  
1トレンチ断面  
(北より)



写真28  
鳥居塚古墳  
7トレンチ周溝断面  
(東より)



写真29  
鳥居塚古墳  
6 トレンチ  
ピット検出状況  
(西より)



写真30  
鳥居塚古墳  
3 トレンチ全景  
(南西より)

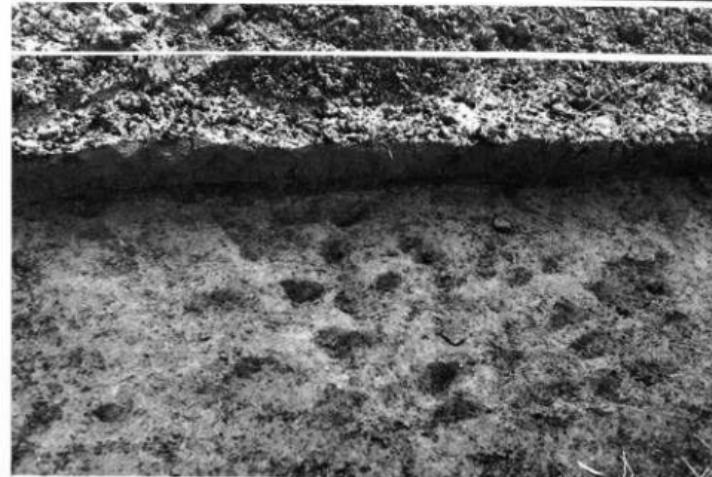


写真31  
鳥居塚古墳  
3 トレンチ断面  
(北西より)



写真32  
鳥居塚古墳  
墳丘残存部南北断面  
(北西より)

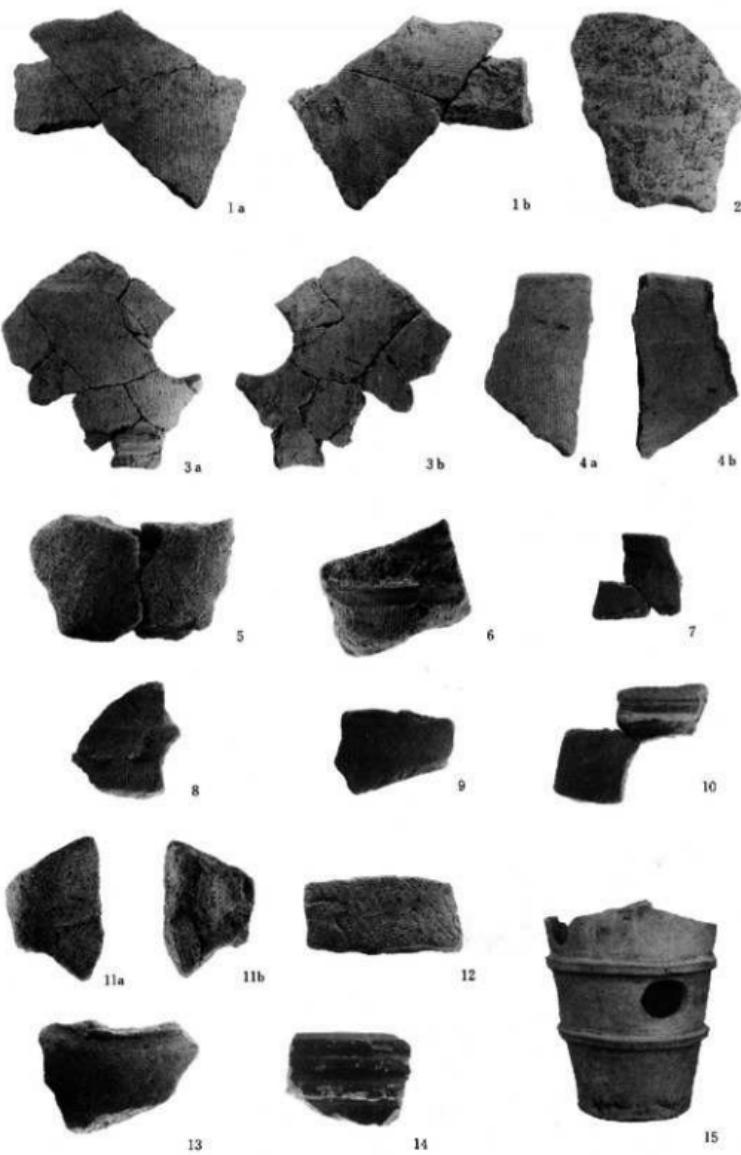


写真33 烏居塚古墳出土遺物・岩切小学校所蔵円筒埴輪

写真34  
王の壇古墳全景  
(南西より)



写真35  
王の壇古墳近景  
(西より)



写真36  
王の壇古墳  
墳頂の石碑  
(南東より)



## 文化財課職員録

課長 早坂春一

管理係 係長 成田時雄

主任 岩沢克輔

主事 白幡靖子・山口 宏

調査係 係長 佐藤 隆

主事 結城慎一・木村浩二・篠原信彦・佐藤 洋・金森安孝・佐藤甲二・吉岡恭平

工藤哲司・渡部弘美・主浜光朗・斎藤裕彦・長島栄一・及川 格・平間亮輔

佐藤 淳・渡部 紀・佐藤良文・中富 洋・松本素明・宮崎 明・大江美智代

教諭 千葉 仁・松本清一・太田昭夫・小川淳一・橋本光一・渡辺雄二

---

仙台市文化財調査報告書第108集

大野田古墳群

**春日社古墳・鳥居塚古墳**

発掘調査報告書

昭和62年8月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株) 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL263-1166

---

